

---

# くらんくらうん

バラ発疹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くらんくらうん

### 【Nコード】

N3451W

### 【作者名】

バラ発疹

### 【あらすじ】

顔面麻痺の主人公と変な三人との日常コメディー

(注) 製作挫折したノベルゲーのシナリオなので、会話の割合が多いです。

物語後半R15の内容が含まれる恐れがあります。

陽気な音楽と共にネズミヤアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている。

どうやらここは東京ネズミランドらしい。いわずと知れた米国の人気ネズミアニメのテーマパークである。千葉県にあるのになぜ東京なのかと疑問に思ったが、どうも大人になると細かい事は気にしなくなるようだと言子供心に理解したものだ。

「どうだ楽しいか息子よ、今日で皆勤賞だ！」と俺のことを息子と呼ぶこの男はなぜか土下座をしている。

「いくら年間パスポート買ったからって毎日来ると飽きるよお父さん」

「そうだなもう充分だよ……。あの女、俺一人にガキを押し付けて逃げやがって」

あきらかに雰囲気が変わった父親に不安になる。「お父さん？」

「これから父さんは自由に生きるから、お前も達者で暮らせよ。」

じゃあそうゆうことで」と言うが早いか土下座したまま人ごみに消えていった。

「え？ちよつと待ってよお父さん。あれ？なにこれ？」なぜか追いかけてよつとするが、どれだけ一所懸命に足を動かしても前に進まない。

ピンポンピンポン

父親の逃亡を助けるように館内放送が入る。

<本日は東京ネズミランドにお越しいただきまことにありがとうございます。本日の営業はこれで終了でございます。またのお越しをお待ちしております>

ジリリリリー…けたたましく営業終了のベルが鳴り響く。

ジリリリリリリリリリリ「うえええん、お父さんジリリリリ  
おいてかないでジリリリリリやだよおおジリリリリリ…さいジリリリリ  
リリリ…るさいジリリリリリ」リリリリ

「うるさいわー！ー！！」

ガシャン、という音と共に目覚まし時計は晴れて他の五つの壊れた目覚まし時計の仲間になった。

幾度となく同じ夢を見てはオチとして目覚まし時計を投げるとい  
う一連の持ちネタである。

「しまった、まだ買って一週間なのに……」  
たいしてしまったと思つてなさそうな顔をしてつぶやく。

この男は子供の頃に親に捨てられて以来精神を患い、顔の筋肉が  
麻痺して表情を作れなくなっていた。

「くつ、しょうがない。気を取り直して愛車のフェラーリで仕事  
に行くか！」

すばやく着替えと簡素な朝食を済ませ、愛車の前に立ったところ  
で行動が止まり震えだす。

「だ…誰だ！俺のフェラーリのサドルに傘で穴開けた奴はー！ー  
！！！」

フェラーリとは名ばかりの自転車のサドルのちょうど真ん中に、  
きれいに一つ穴が開いていた。

「くつそおゆるせん！まだ遠くに行つてないはずだ」

根拠もないのに犯人探しを始めだす。ちょうど50メートルほど  
先に、長いものを持ったスーツ姿の男性が歩いている。

「奴だ！」

築43年のボロアパートを背に全力で走り出す。

「てめえ待ちやがれ！俺の愛車のサドルに穴開けやがっただろ  
うがぁー！！」

突然の言いがかりに、スーツ姿の男性が振り返り言葉を返す。

「ああん？誰に口きいとんじゃワレエ！」

よく見ると、男性の所持していたのは傘ではなくて日本刀だった。どうやらこれから討ち入りのようだ。

「ぎゃあ！朝っぱらから抗争勃発？！俺死ぬかも。いや、一人ならイけるか？」

行くのか逝くのか意味不明な独り言を漏らしていると。

「兄貴！どうしやした！」と日本刀とドスを装備した二人が兄貴のパーティーに合流した。

「無理！とんずらじゃあああ！」ここまでみごとに無表情で通してきた男は、やはり無表情のままに叫び一目散に逃げ出した。

「待たんかいワレエ！」日本刀を振りながら追いかけてくる。待てと言われて待つヤツなんかいるはずなのにバカな奴。と心の中で笑いながら、必死で逃げる。

男は逃げながら思う。

この世に生を受けて24年、楽しいことなどなにもなかった。

全力でなにかしようとしてもしたい事がなにもない。

充足感など感じたこともない。でも。

あれ？これってなんか鬼ごっこみたいで楽しくね？

スポーツ選手がたまに言ってる”真剣勝負を楽しむ”ってこの事じゃね？と錯乱気味に。

その一方で、鬼達から逃げるために人通りの多い道へ向かっていた……はずだった。

「はあはあ、あれ？どこだここ？」

いつの間にか、閑静な住宅街にまぎれこんでしまったようだ。

「こつちに逃げ込んで行きましたぜ兄貴！」とさっき曲がってきた角のむこうから叫び声が聞こえる。

「やべえ、逃げなきや」

とつさに角を曲がると。

ドン！と出会い頭に人と衝突してしまう。

「「きゃあ！」」転倒する女。

「わあっ！ごめん、追われてるんだけどかくまってくれ！」と言  
つて、民家の生垣にもぐりこむ。

「「あ？えっ？ええっ？」」

そこへ兄貴一行がやって来る。さすがに刃物はしまっている様子。  
「姉ちゃん、ここに無表情の男が逃げてこなかったか？」

「「えっと、あの……あっちへ走っていきました」」

「ほうか、ありがとな姉ちゃん。行くぞ野郎ども！」

生垣からは見えないが、どうやら女の指した方向はこの生垣では  
なかったようだ。

兄貴一行の足音が聞こえなくなってから、ゆっくりと生垣から出  
てくる。

「いやー助かったよ。ありがとう、ケガとか無かった？」

「「いえ別に大丈夫です」」

あらためて見ると、女は自分と同じ位の年の様に見える。つつこ  
み所はあるのだが、助けてもらった手前失礼なので言わずに過ごす  
事に決めて他の会話をきりだす。

「なんかカギカツコが二重になってるけど病気？」言わないと決  
めたはずなのに言うのも駄目だが、病気の奴に病気よばわりされる  
のも失礼極まりない。

「「ごめんなさい、私がしゃべるところなってしまうんです。お  
かしいですよね？」」女は笑って見せるが、伏し目がち……と言う  
よりは目を合わせようとしなない。まあ人と接するのが苦手な人など  
めずらしくも無いので、たいした問題ではない。

「ああ別にいいんじゃない？それよりもホント助かったよ。それじ  
ゃ」仕事は完全に遅刻だな、と思いつながら帰ろうとすると。

「「あっ！ちよつと待つてください！」」

「ん？ああゴメン俺、宗教団体とか興味ないから。てか神様信じ

てないから」

「いや…そうじゃなくて…あの…私…で…」女はうつむいて何かごにょごにょ言っている。

「はっ！まさか除霊の呪文！しかもっとハッキリ唱えないと効果はないぞ！」神様は信じていないくせに霊の存在は信じているらしい。

男のアドバイスに従った訳ではないが、女は一つ深呼吸をしてからもう一度繰り返す。今度はちゃんと見えそうだ。

「わたしと友達になってください！！」

「はい？」

## 02とか03とか

02

女性に”友達になってください”なんて言われて悪い気はしないが、お互い初対面。目の前の女は、まあ美人と言うほどではないが普通レベルである。身なりといえば、ノーメイクにメガネをかけ髪はボサボサで上下ジャージにパーカーを羽織っていると言う具合。

男は品定めしている訳ではないが、いつものように無表情で女を見ている。

「あ、突然友達になってくれなんておかしいですよね？ごめんなさい忘れてください」「

「ん？いや、別にいいよ」

「え？あれ？ほんとにいいんですか？」

「なんでもなにも、友達になるくらいどってことないよ」

「わあ、ありがとうございます。すごい！占いが本当にあたった！」

この女は占いで友達を探しているようだ。聞いてみると、昨日インターネットで噂の占い師にうらなって見てもらったところ。「アシタジンセイノブンキテン、アシタトモダチツクルアルヨ」とのこと。カタコトなのが不安だが、占い師はさらに地図を取り出し適当にページを開き適当に指を置き。「ココデマテバトモダチデキルアル」

これで三万円、ぼったくりである。しかもなぜかカード決済オーケー。で、今に至るとのこと。

「アナタダマサレテマスヨ」

「なぜにカタコト？！デモトモダチデキマシタ」

「つーか、あんた友達じゃないのか？」

「ギャフン！カタコトおしまい？乗ったのに……。はい、こ



の9年ほど友達いないです。わたし引きこもりなのでw」「と泣いたり笑ったり表情をコロコロ変えながら言う。

「おおっ初めてヒッキー見た！やっぱ親のスネかじって生活してんのか？」

「「わたし一人暮らしなので、収入あります」「

「引きこもりで収入で内職とかやってんのか？」

「「いえ、ネトゲと株です」「さらにと男とは縁のなさそうな単語を口に出す。

「おおっ！絵に描いたような廃人ってヤツか！てかネトゲとかそんなに儲かるのか？」

「「まあ生活に必要な分くらいは稼げます。収入の大半は株ですけどね」「

たぶんネトゲも株も、素人が手を出すにはリスクが高すぎるだろうな。と男は思っているふりをして、ネトゲも株もぼんやりとしたイメージしか思い浮かばない。所詮その程度の人間である。

しばらく呆けていたが、ふと仕事に行く時間なのを思い出す。

「うおっやべっ！仕事行かなきゃいかん！じゃまた今度な！」

「「あつ、携帯のアドレスを」「

「すまん、俺携帯もってないんだよね」

「「じゃあウチに直接来てください。ウチは駅前のヒルズパレス903号室です」「

「「ああつ、あとわたしの名前は……」「女が自分の名前を言うとおとすると。

「待った！わかるぞ！お前の名前は……」

「「カギ カツ子」だあああああつ……」

「「えええええっ！！ぜんぜん違いますよおおっ！てゆうか安直すぎますよお……」

「「あ……でも、それでいいです」「いいのかそれで？しかしな

ぜか少しうれしそうに見える。

「じゃあ近いうちに遊びに行くぞ！またなカツ子！」

「「はいつ！待ってます！」」

カツ子と名づけられた女は、男の姿が見えなくなるまで手をふりつづけた。そこで気づく。

「「名前聞くの忘れた」」

03

築43年の四畳半の部屋に、目覚まし時計の「ごう音が鳴り響き男が目覚めます。

昨日は結局一時間遅れで出勤してバツが悪かったので、早めに起床する。

「さて、今日もバリバリはりきって仕事するぜ！いつものように俺の仕事っぷりに上司も舌を巻くぜ！」

サドルに穴の開いた愛車のフェラーリを走らせること12分、ここが男の勤務先スーパー バローフーツである。

バローフーツは、ここ地元愛知県に6店舗を構える中堅スーパーである。

男はいつものようにバリバリ仕事をする。

「おらぁ！新入りい！いつまでもチンタラやってつとクビにすんぞぉー！」

どうやら男は、新入りで駄目社員のようにである。

人はみんな、自分が主人公の物語の中で生きている。

中学生の頃そんなことをぬかした教師がいた。うまいこと言ったつもりだろうが、つまらない”物語”しか出てこない人間にとって  
はビター文心には響かない。

てか中坊ばつか相手してるから頭ん中膿んできて、そんな厨二病的な発言をはずかしげもなく言えるのだろう。

主人公だからってデキル奴ばつかじゃねえんだよ！と誰にうつたえるでもなく心の中で叫んだ。

そうやっていつものように悶々と仕事をしているうちに、帰宅の時間を迎える。実は男はバイトなので15時で帰宅なのである。男は持ち前の低能力と社交性の無さで定職には就けずにいた。

しかもこれまでの24年の人生の中で、友達と呼べる存在は皆無に等しかった。

「おつ、そういや昨日友達できたんだつた。さつそく遊びに行くか！」と言ったところで行動が止まり震えだす。

「だ……だれじゃあああ！俺の愛車のサドルに穴開けた奴はー！しかも二つも！俺の顔（ ）みたいになつてんじゃねえかww

w

確かにサドルには綺麗に三つの穴が開いている。また勢いにまかせて犯人探しをしようとする、どこからともなく声が聞こえる。

「ひとつ人よりかわいくて」

「ふたつ二重の器量よし」

「みつつみんなの癒しキャラ、それは誰かとたずねたら……」

「それはわたしの妹だあああああ！！！！」

と、駐輪場横の自動販売機の上に現れたのは二人の子供である。

叫んで現れた一人目はライオンだと思われる着ぐるみに身を包んでいる。どうやら手作りのようで、サイズも大きければ作りも雑。顔に至っては、黒目があらぬ方向を向いている始末。

着ぐるみの後ろでおっかなびっくりしがみついているもう一人は、かわいらしいパステルカラーのワンピースに身を包んだ女の子である。

どうやら声の感じから、着ぐるみの方も女の子の様子。叫んでいた内容からすると姉妹なのだろう。着ぐるみの方が背が高いので姉なのだろう。

「あ、あぶないから降りなさい」啞然としていた男がなんとか発した言葉は、おそろしいほどまともな忠告だった。

二人の子供は、プラスチック製のビールケースを積み上げて作った階段を使って降りてくる。

「……………」(笑)「ワンピースの女の子が、無言のまま口をパクパクさせる。

「こんにちは。わたし達はあやしい者ではございません。……と言ってる」とライオンの着ぐるみがしゃべる。

「うわぁ、まためんどくさいのが絡んできたな。と思っていると。

「……………」(怒)「

「めんどくさい言うな!……と言ってる」

「ぎゃぁ!勝手に人の思ってることを読むな!てか読めるの?」

「うん、妹は人の思ってることがわかるよ」とライオンの着ぐるみが言う。

「嘘だ!」と言いながら、何で着ぐるみなんか着てんだ?と思うと。

「……………」(怒)「

「着ぐるみちゃうわ!お姉ちゃんはお物のライオンじゃない!……と言ってる」

「ぐはぁ!モノホン?!やべえ怖い!もう行く!」と愛車に乗るうとすると。

「……………」(哀)「

「おなかすいた。……と言ってる」

「はい?」

「……………」(笑)「

「マグドでゆるしてやる。……と言ってる」

マグドとは大手メジャーハンバーガーショップで、1000円バー

ガ―を始め貧乏人にやさしいお店である。

男も常連だが、見知らぬ子供におごってやるほど人間出来てはいない。

今日から俺はNOと言える人間になる！と男は思うのであった。

なぜに俺は子供二人と大量のマグドの袋を抱えて一緒に歩いているのか、自分に問いかけているが、答えは神のみぞ知るということなのか。

手をつないで楽しそうに歩く着ぐるみと女の子の姉妹を横目にため息をつく。

「……………(?)」

「どうした？調子悪いのか？…と言って」

「おまえらに会ってからずっと調子悪いわ！っーかこんな時間にハンバーガーなんか食ったら、晩飯食えなくて母ちゃんに怒られるぞ」

「……………(笑)」

「だいじょうぶ、おかあさんのご飯は別腹だから。…と言って」

子供は食べ盛りの育ち盛りと言うが、買ったハンバーガーはそんなレベルの量ではない。カツ子の分もあわせて12個のハンバーガーと、一人各一個つつのポテトとドリンクである。

見たところそんなに食べそうな体つきでもない。痩せの大食いか？というより、こんな小さな頃にこんなに食べた覚えが無い。

「おまえら二人とも小学生か？いくつなんだ？」

小さいほうが両手の指を6本立てる。着ぐるみのほうはというと指の曲がらない着ぐるみの手を見て止まっている。

「アホか！おまえは喋ればいいだろ！」と思わず突っ込むと。

「あほ言つな！9才の4年生と6才の1年生じゃどあほ！」と叫びながら繰り出した蹴りがわき腹に入る。

「ぐほあ！いてえ！蹴んなクソガキ！」

「……………(怒)」

「……………」なぜかライオンは訳さなかった。

「ん？おい、今なんか言っただんじやないのか？」

「お姉ちゃん、蹴っちゃだめだよ！って言われたんだよ！」と言  
いながら殴られた。足がダメでも手はいいのか？

そんな調子で歩くこと15分、カツ子に教えてもらった駅前辺り  
にさしかかると、なにやら警察官ともめている人がいる。

「げっ！なにカツ子のヤツ警察ともめてんだ？！」

警察官ともめているのはカツ子のようなので、他人のふりを決め  
込もうと目をそらしていると。

「あーっ！やっとなって来てくれたんですね。ちょっと助けてく  
ださいい！」メガネをかけているだけあって、視力は良いよう  
である。

「ぶっ！声をかけるな！知り合いと思われるだろ！」

「おまわりさん、この人を待ってたんですよ！ほんとにあや  
しい者じゃありませんよお！」と泣きながら警察官に訴える。

「いや、だから朝の6時からずっとこの辺りをうるちよろしてて、  
あやしいからって通報が来たんですよ？」警察官から衝撃の事実が  
告げられる。

「はあ？おまえそんな朝早くから待ってたのか？！てか待ってな  
くたって家まで行くって！」

「だってウチの場所忘れてるかも知れないじゃないですかあ！」

「いくら俺だって、そんなすぐに忘れるほどバカじゃないわ！」

終わりそうにも無い醜い言い争いに見かねた警察官は、「もう不  
審な行動は控えるように」との忠告を残して見逃してくださいまし  
た。

「ったく、もしかして俺が行くまであそこで待ってるつもりだっ

たのかよ」

「だってせつかく勇気を出して友達になってもらったのに、来てもらえなかったらって不安だったんですよお」「と言ったところで、ついて来ている奇妙な子供達に気づく。

「「?えつと、この子達はあなたの妹さんですか?」「

「いや、ぜんぜん知らない子供達」

「え?え?それって、それこそ警察沙汰なんじゃないんですか?!!」「

「知るか!こいつらが勝手に飯食わせろってついてきたんだよ!ついでにカツ子の分もあるからな」と言っマゲドの袋を持ち上げて見せる。

「あ、ありがとうございます。それと、お二人さんはじめまして」「

「.....(笑)」「

「はじめまして。こんにちは.....と言ってる」「きよとん顔のカツ子に説明してやる。

「妹の”丸美”が言おうとしていることを、姉で自称ライオンの”ライ子”が通訳するってのが、この”ライ丸”姉妹のルールらしい」「

「.....(怒)」「

「勝手に変なあだ名をつけるな!.....と言ってる」と言いながら下腹部にパンチが入る。

いくら女の子でも9才ともなると、攻撃力はすでに笑い事ではすまないレベルに達している。度重なる攻撃に無表情のまま悶絶しているうちに、カツ子の住んでいるアパートに到着したようだ。

「ここがわたしの住んでるところです」「

と指差した建物は、そこに建っていたのはアパートではなく、高層マンションだった。

「.....」絶句する三人。

さらに家に入ると、そこはテレビでしか見たことないような家具



や電化製品の数々。

「……………(驚)」

「うわあ！部屋が広すぎて怖い！テレビが壁みたい！台所の蛇口がシャワーだ！……と言ってる」

と、はしやぎながら二人であちこち見て回っている。残念ながら、俺の思っている事は子供達が全部言っている。

「……………(楽)」

「ひゃあ！ベッドふかかだあ！お風呂にテレビついてる！トイレのフタが自分で開いた！……と言ってる！」ライ子も思わず興奮したらしい。

「すげえな、家賃いくらするんだ？」と思わず出た独り言にカツ子が答える。

「「ここ賃貸じゃないですよ。わたしの持ち家です」」衝撃発言。

「何年ローン？」

「「え？わたしお金借りるの好きじゃないんで、一括で払っちゃいました」」さらに笑顔で衝撃発言。

「ネットゲと株って……そんなに……儲かるの？」なんか衝撃のあまり呼吸困難に陥っている模様。

「「ネットゲはそんなにないです。どうやらわたし株の才能があるらしくて。でも今は少し抑えて月に80万位ですかね(笑)」」

《(笑)ってよく見ると、なんかドラ もんに見えない？ああ、なんかそう見えると良くないことが起こるらしいよ、80万日以内に。》

「はっ！やばい！意識が飛んで、訳わかんない幻聴聞こえた」

「大丈夫ですか？それよりも、そろそろみんなでマグド食べましょ。あたためなおしますか？」

気を取り直し、あたため直したハンバーガーをパクついた。さすがに残したカツ子のハンバーガーは、なんとライ丸姉妹が半分づつ

食べていた。

全員食べ終わったところで。「食べ終わったらそろそろ帰るぞ、ライ丸。家まで送ってやるから」ときりだすと。

「……………(怒)」

「ちょっと待った！人に変なあだ名付けといて、自分だけ逃げようったってそうはいかないぞ！……………と云ってる」

「は？別にいいじゃねえか、お前達とはもう会うことなんてないんだからよ」

カツ子も少し考えて。「それはいい考えかも！」「なんてことを云う。

「いやいや、ちょっと待て……………」

すでに三人は、楽しそうに話し合いに突入していた。

ああやべえ、なんかノリで変なあだ名ばっか付けちゃったけど、かつこいい名前がいいなあ。なんて都合のいいことばっか考えていると。

「「じゃじゃーん！会議の結果、名前が決定いたしました！」」

「……………(笑)」

「いつも無表情で、景気悪そうで機嫌の悪そうな顔してるからおまえの名前は、仏頂面の”ブッチョ”できまりだ！……………と云ってる」

「いやだブッチョなんて！そんな太った奴が付けられそうなおだ名は—！」

「「残念ながらブッチョに拒否権はありません」」

「……………(笑)」

「じゃあ達者で暮らせよ、ブッチョ！……………と云ってる」

「こうして俺は”ブッチョ”と云う名前に生まれ変わった。

後に思うと、この最悪なあだ名が付いた時から、俺の本当の人生が始まったんだと思う。

ここから始まる虚構と現実の物語。

あらためて自分は主人公なんかじゃないと思いき知らされる……。

# 第一話「愛情と調味料と調理器具」 01とか02

## 第2章

### 1話「愛情と調味料と調理器具」

01

陽気な音楽と共にネズミやアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている。

どうやらここは東京ネズミランドらしい。いわずと知れた米国の人気ネズミアニメのテーマパークである。隣には海をテーマに作られた”ネズミシー”という系列テーマパークがあるが、日帰り日程ではどうしても”ネズミランド”の方に行ってしまうがちである。

「どうだ楽しいかブッチョよ、！」となぜか土下座をしている父親は、なぜか俺のことを違う名前で呼ぶ。

「え？僕ブッチョなんて変な名前じゃないよ、お父さん」

「なにを言ってるんだ？おまえは最初からブッチョって名前じゃないか」

「は？そんな名前、役所の方が受理するわけないじゃん」

「あ？もう時間？じゃあそうゆうことで」と言っが早いか土下座したまま人ごみに消えていった。

「え？ちよつと待ってよお父さん。あれ？なにこれ？」気が付くと、不恰好なライオンの着ぐるみに、はがい締めになされていた。

ピンポンパーンポーン

父親の逃亡を助けるように館内放送が入る。

<<あー、本日は東京ネズミランドにお越しいただきまことにありがとうございます。本日の営業はこれで終了でございます。

ブッチョさんのまたのお越しをお待ちしております>>

ジリリリリ…けたたましく営業終了のベルが鳴り響く。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ  
おいてかないでジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ  
リリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

「ブッチョって呼ぶな―ー!」

がつん!と鈍い音。いつも置いてある場所に目覚まし時計は無く、つかもうつとした手は空を切りタンスの角に当たる。

「いてえ!しまった、目覚まし壊さないように隠しておいたんだっ!」いつもは使われない学習能力がアダとなった。

だっさいあだ名を付けられてから三日、ブッチョは毎日そのことであなされていた。

しかしあの子供達はもう来ないので、カツ子だけなら本名で押し切ることも可能だろう。

とりあえず、鳴り続けている隠した目覚まし時計を止めたところで、今日の仕事が休みだと気づく。

なにか損をした気分であったが、すべてが損でできているのである気分は速攻消え失せた。

ちなみに今日は日曜日で、スーパーマーケットにとってはかき入れ時なのでバイトが休みなどありえないのだが、ブッチョは戦力外なので休みとなっている。

本人は気づいていないが、バイトがクビになる日は近いだろう。

そうとは知らず「早起きついでに、朝飯買ってカツ子んところも行くか」と、のん気なものである。

それから1時間ほど後。

ブッチョは二人分の食料を持って、カツ子のマンションのエントランスに到着した。

マンションのエントランスは、ドアをくぐると部屋番号を押してインターホンを鳴らす機械が置いてあるのだが、先のドアは住民の許可がないと開かないので一時的に完全個室になってしまう。

別に閉所恐怖症でもないけれども、居心地の悪さを感じながら間違えないように部屋番号を押すと。

ピョッはあい、どちらさまですか？』』チャイムに仕事をさせない速さで、スピーカーから声が聞こえる。

「はやっ！インターホンの前で待ってたのか？とりあえずここ開けてくれ」

『』はい？どなたですか？』』

「は？なに言ってるんだ？カメラもついてんだろ……」と言ったところで、相手の意図に気づく。

どうしても俺の口から”ブッチョ”と言わせたいらしい。しかし俺は絶対に自分で言ったりなどしない！と決意した時に、個室のエントランスに住民らしい人が入ってくる。おもわず目が合って、その場が少し気まずい空気になる。

「おい！マジで早く開けろって！」

『』で？お名前は？』』

「くっ、ブ……ブッチョです」作戦負けである。

『』はい？もう少し大きな声でお願いします』』どうやらこの女にはサドっ気があるようだ。

「わ、わたしの名前はブッチョです！ドアを開けてください！」  
最終的には完全敗北で落ち着いたようである。

02

ひと悶着終えてようやく部屋の中にたどり着いたブッチョを待っていたのは。

この家主で、ヒッキーセレブのカツ子。

と、

もう会うことはないと思っていた、お笑い芸人のライ丸姉妹。その三人が爆笑の中迎えてくれたのだった。

「……………(怒)」

「誰がお笑い芸人じゃい！……と言ってる」と、いつものネタでツッコミを入れる。

「てか何でおまえらがいるんだよ！」

「ブッチョさんいらっしやい。ライ丸ちゃん達のご両親は、二人とも土日出勤なんだそうです」

「いや、だからってここに来なくてもいいだろうよ」

「……………(怒)」

「別にいいじゃんか！細かい事言っつとハゲるぞ！……と言ってる」

「誰がハゲか！てか、お前らの分の朝飯買ってきてねえぞ  
そう言いながらマグドの袋を見せる。

「またマグドですか？よく飽きませんね」

「……………(笑)」

「マグドは日本人の主食ですけど何か？……と言ってる」

「うむ、セレブのカツ子には日本の和の心が理解できないのである  
らっ」

「いやいや、マグドは外国資本ですよ？」

「……！！」三人は驚愕の表情で顔を見合わせる。そのうち一人は無表情で、そのうち一人は着ぐるみで表情は変わらないのだが。

「いやいや、マグドって略さないとマグドナルドって……聞いてます？」

カツ子のお話を無視して食べだす三人。

「ぎゃふん！わたしの分は？っていうか、二人分買って来たにしてはハンバーガーの数多くないですか？」

ポテトとドリンクは2つずつだが、ハンバーガーは3人が1人につき4個抱えている。

「ん？ああ昼飯の分も買って来たからな」昼食もハンバーガーで

済ませるつもりだったらしい。

カツ子が泣きついてきたので、三人は渋々1個ずつめぐんでやった。

「それにしても、ホントに同じものばっかで飽きないんですか？」

「ったく、これだからブルジョアは駄目なんだよ！見てな！」

そう言うと、ハンバーガーの上の部分のパンを取り外し、5本ほどのポテトを下の部分の上に乗せ、取り外したパンをもとに戻す。

「どうだ！これでポテトバーガーの完成だ！」

「……………(喜)」

「そうそう！中にケチャップやマヨネーズをかけると、まったく違う食べ物になるよ！……………と言ってる」

「そうだ！カツ子、ケチャップとマヨネーズを持って来い！」

「すいません、ありません」

「コシヨウでもいいぞ」

「ありません」と顔をそらす。あいかわらず目はあわせないが、顔をそらした。

「？」三人の頭に疑問符が浮かぶ。

それを見てカツ子が口を開く。

「「ウチに調味料は無いです」」

「……………(?)」

「え？どうやって料理の味付けしてるの？……………と言ってる」

「「ウチには、調理器具も無いです」」

「は？いやいや、包丁にフライパンぐらいはあんだる普通」

「「料理なんかしなくても生きていけますけど、何か？」」カツ子は開き直った。

ウソだろう？と思いつつながら台所を物色した三人が発見したのは、紙コップと紙の皿の束。冷蔵庫には、ペットボトルのジュースと大量の冷凍食品が入っていた。

「マジか……………俺だつて自分の飯ぐらい作れるぞ」



「別に作らなくたって困った事ないですよ?」「」

「……………(願)」

「カツ子姉ちゃんの作ったご飯食べたいなあ。……と言ってる」

「え?」「」

「よし!じゃあ今日の昼飯は、みんなで作って手作り料理だ!今からジヨスコに買出しだ!」

「えええつ!」「」

ジヨスコとは、全国展開の大型スーパーマーケットである。専門店も入っているので、食料品からファッションや電化製品まで何でも揃う。

休日に家族で行くと、家族全員が満足するという便利な施設である。

最近はいヨンと言うブランド社名に変更し、看板も変えているにもかかわらず、通称”ジヨスコ”で通じているようである。

ということで四人は、昼食用の食材と調理器具を買いにジヨスコに出かけることになった。

カツ子のマンションからジョスコまで通常徒歩15分。なにこともなく到着……はしなかった。

カツ子が迷子になる事2回、ライ子が近所の子供にもみくしゃにされること3回、カツ子の忘れ物を取りに戻ることに1回。通常15分のところを、1時間以上を費やす。

「……………(疲)」

「やつと着いた。……と言ってる」

「よし。時間短縮のために、割り当てを決めて要領よく買い物するぞ」一番要領の悪そうなブッチョが仕切りだす。

組分けのじゃんけんの結果、食材・調味料はカツ子・ライ子組、調理器具はブッチョ・丸美組に決定した。

ジョスコは、一階の約半分が食料品売り場になっている。こちらはカツ子とライ子にまかせておけばいいだろう。

ブッチョと丸美が向かっているのは、二階の雑貨売り場である。

二階は、こちらも約半分のスペースに生活雑貨売り場が展開されている。

歩き出すブッチョの手を丸美がつかむ。そういえば、この姉妹はいつも手をつないでいるな、と思ったところで気がつく。

「おまえ、もしかすると耳が聞こえないのか？」と、右手の先の少女に話しかける。

すると丸美は、大きく首を縦にうなずく。

むかし、話で聞いたことがある。耳の聞こえなかったり聞こえなくなった人は、自分が出している声が聞こえないのでしゃべれないのだそうだ。実際に会ったことがないのであまり気にしたことはな

いが、現にそういう人は存在するのだと実感する。

「でも俺の言ってることは分かるのか？はっ！そうだった、こいつは人の考えてることが分かるんだった！」

丸美は、ブツチョコを横目で見てほくそ笑む。

「ぎゃあ！ホラーか？！完全ホラーだろこれ！」

そうこうしているうちに、エスカレーターは二階に到達する。エスカレーターを降りる時、ブツチョコがつまづいて丸美の失笑を買ったのは見なかったことにする。

で、二階に着いて5分。目当てのフライパン・まな板・菜ばし・万能包丁をカゴに入れ、台所で確認した食洗機用の洗剤もついでに入れる。

「食洗機だけでまな板も包丁も全部洗えるのか？」二人で首をかしげつつ、必要なものはそろったようだ。

レジに向かおうとしたところで、重大な事に気づく。「やべえ、こんだけ払える金持ってねえ。今朝のマグドで使っちゃまった」やはりハンバーガー買いすぎである。しかしハンバーガーを買わなくても、お金は足らなかつたであろう。

話し合いの結果、カツ子を呼びに行くことになり、とりあえずその場にカゴを置いて二人で一階に向かう。

一階の食料品売り場に到着したブツチョコと丸美は、子供に囲まれてオロオロしているライ子を発見する。こちらは二人で手分けしているのか、カツ子の姿が見えない。

「おいライ子、カツ子どこ行った？金払おうと思つたら、金足んなかったからよ」とたずねると、ライ子はふるえながら言う。

「ど……どこ行つたつてこつちが聞きたいよ！一緒に歩いてたらカツ子姉ちゃん段々パニックつて、すごいスピードでどっか行つちやうんだもん！ホラーか？完全ホラーだろあれ！」どこかで聞いたフレーズも出たが、ライ子も相当パニック状態である。

「ライ子落ち着けて！さすがにまだ店の中探せばいるだろ。ほ

ら、癒しアイテム返すから」と言いつつ、先ほど”ホラー”と呼んでいた少女とつないでいる右手を差し出す。

やっと定位置について安心したのか、徐々にライ子は落ち着きを取り戻す。

「……………(怒)」

「誰がホラーじゃ！こんな美少女つかまえて！呪いコロされるぞ！……………と言ってる」

「ここでツツコミかい！てかやっぱホラーじゃんか！」丸美はホラーと言われたことを、だいぶ根に持っているようだった。

とりあえず三人でカッ子を探す事にする。

搜索開始から30分。一階から三階まであるジヨスコの建物を、一通り見て回った。

「……………(泣)」

「のどかわいた、ちよつと座りたい。……………と言ってる」

「そうだな、少し休むか。ジュース買う金くらいあるから何か飲むか？」

自動販売機でそれぞれジュースを買い、備え付けのベンチで一息つく。三人同時にジュースを口にしたとき、館内放送が聞こえる。

ピーンポーン

《迷子のご案内です。ブッチョさんライ子ちゃん丸美ちゃんが迷子です、カッ子様がお待ちですので、至急インフォメーションまでお越しください》

「ブーーーーッ！」三人は同時に口に含んだジュースを吹き出し、インフォメーションに向かってダッシュする。

で、インフォメーション。

「いやいや！自分が迷子のくせに、他人のせいにしてんじゃねえよー！」

「……………(怒)」

「迷子になったのカツ子姉ちゃんじゃん！すっごい探したんだから！・・・と言ってる」

「うえええん！だって気がついたら倉庫の中にいたんだもん！」探しても見つからないはずである。

奇妙な四人組に、完全にドン引き状態の係りのおばちゃんにお礼を言いインフォメーションを後にする。

先ほどのベンチに戻り、カツ子にもジュースを買ってやり落ち着かせてやる。

落ち着いた頃に、カツ子に二階に精算の済んでない商品があることを告げる。話し合いの結果。二階のカゴの場所を知ってる丸美がカツ子を連れていき、精算を済ました後四人で食料品を買いに行くことになった。

「じゃあ、ちょっと行ってきます」「手をつないだカツ子と丸美が、エスカレーターに乗っていく。

残った放心状態のブッチョとライ子。

「カツ子のヤツいい年して迷子って。いったいいくつなんだよ」とブッチョが愚痴ると。

「ん？25才だって言ってたよ」

「俺より年上かよ！あれで金持ちだってんだから、意味が分からん」と言いながらジュースを口にすると。

ピンポン

《迷子のご案内です。ブッチョさんライ子ちゃんが迷子です。カツ子さま丸美ちゃんがお待ちですので、至急インフォメーションまでお越しください》

「ブーっ！」二人は同時に口に含んだジュースを吹き出し、インフォメーションに向かってダッシュする。

「・・・（怖）」

「二階に行ったらカツ子姉ちゃん段々パニックって、すごいスピードで引っ張って行くんだもん！ホラーか？完全ホラーだったよあ

れ！・・・と言ってる」ホラー少女にホラーと言われる位なのだから、相当怖かったのだらう。

「「め……面目ない」」

その後、四人で調理器具を精算しに行き、食料品を買い帰路に着く。

「なんか超疲れたな」

「……………(疲)」

「買い物するだけで、こんなに疲れたの初めて。・・・言ってる」

「すみません、外の世界にあまり出ないので」「そう言うレベルの話では無い。」

現在すでに14時30分。これから料理をしようと思うとつんざりである。

「……………(泣)」

「おなかすいた。・・・言ってる」

「そうだな」

「「そうですねえ」」

そう言いながら四人の視線は同じ方向を向いていた。

「もうマグドでいいか……」本末転倒である。

余談になるが、買った食材は夕飯としていただいた。そこに至るまでに、ぼや騒ぎまで起こしていたのは四人の記憶に黒歴史として封印した。

まあ四人の人生すべてが、ほぼ黒歴史のみなのだが。

## 第二話「正義の価値は」01とか02かも

2話「正義の価値は」

01

西暦2035年

地球から超エネルギー物質が発掘された。そのエネルギーは、宇宙を征服できるほどの力を持っていた。

その存在を嗅ぎつけた、宇宙海賊ドンゾックによる地球侵略が開始される。

宇宙海賊ドンゾックに対抗するべく、地球政府は超エネルギーを使用したスーパード部隊を開発。

彼ら5人に地球の運命は託された。

彼らに名づけられた部隊名は

讃岐戦隊 ウドレンジャー！！

ワーツ！と言う大勢の歓声と共に、ステージ上に登場する白い全身タイツの5人。

名前の通りうどんをモチーフにしているらしく、白ばかりで5人の区別がつかない。

「……………(叫)」

「わーっ！ぶっかけー！……と言ってる」と、お前はあっち側じゃないのか？と思うような着ぐるみ芸人コンビが叫ぶと。

「わーっ！かまあげー！」「と、いい年したヒッキーセレブも負けじと叫ぶ。

その横で、無表情のままの男がポカンとしている。

「カツ子お前もファンなのかよ！俺には5人の区別がつかん！」

「なに言ってるんですか！頭のマークが違いますよ。リーダーの”てんぷら”を筆頭に、”かまあげ””ぶっかけ””ざる””カレー”の5人です」「

「こんな子供だましじゃないのか？」ブッチョは子供の頃にヒーローものの番組を見た記憶がなかった。

「見たことないんですか？番組開始5話で地球侵略されるんですけど、そこから神なんですよ」「」での悪いヒーローもいたものである。

カツ子の話では、地球征服を一ヶ月で達成してしまったドンゾックとやらは、まず世界の兵器を無力化。一年で全世界の生活水準を上げて、世界のカリスマとなる。

一方、地球政府から解散を命ぜられたウドレンジャー達は、ゲリラ的にドンゾック達を攻撃するのだった。

と、まさかの電波シナリオが親までもを巻き込んで大ヒットしているそうだ。

「「カリスマ”ドンゾック”と蛮人”ウドレンジャー”の人間くさい掛け合いが秀逸なんですよお。最後は人間の愚かさを精神世界まで掘り下げ、文学的なラストを描くという噂まで出てるんですよ」

朝8時半からの番組らしいが、朝から憂鬱そうな内容である。

とはいえ、なぜ四人でこんなショーを見ているのかという点。

話は三日前にさかのぼる。

それは、カツ子の家に来たライ丸姉妹に「お前ら、また来てんのかよ」と言うブッチョの言葉を聞かなくなって、しばらくした時期の話。

カツ子はいつものように、近所のコンビニで食料品を買いあさっていた。

ブッチョとライ丸姉妹が来るようになってからというもの、今ま



で通信販売で済ませていた食料の購入を外で買うように心がけている。引きこもり脱却の第一歩らしい。

今日の購入商品は

「のりべん」ピッ

「コーラ×2」ピッ

「ポテトチップス」ピッ

「バーデンダッツ」ピッ

「菓子パン小倉マーガリン」ピッ

「てか、ろくなもん食ってねえな。高級アイスのバーデンダッツ買うあたりがセレブくせえ」

「「！！！」カツ子は、店員からのいきなりの暴言に絶句する。その失礼な店員を見て、さらに驚愕する。

「「ブブ……ブッチョさんなんで、こんなところで何してるんですかあ！」「」

「あー前のバイトはクビになったんで、今日からここでバイトっす！弁当温めますか？」

「お代は、あー電子マネーね。……はいどうぞ。お前現金持たないのな」

カツ子がレジに携帯をかざすと、シャリーンという電子音が鳴る。精算完了の合図だ。

「「私お金持ち歩くの嫌いなんです。財布の中はカードと電子マネーだけですな」」

温めた弁当と、その他の商品を別々の袋に入れて渡す。初日にしては、なかなかできている。

「じゃ、バイト終わったら遊びに行くわ」

「「はい。待ってます。あつ、じゃあもつと買っていきます」」その後カツ子は、大量の商品を持って店を出て行った。

「キミ、やれば出来るじゃないか。その前のお客様までのように失敗ばかりだとやめてもらうよ」と、奥からやってきた神経質そうな男は言う。

「はい店長！がんばります！クビにしないでください！」やはりあまり出来は良くないようである。

02

「ゴチになります！」という掛け声をカツ子に向ける三人。目の前には大量のコンビニ弁当とドリンク、そしてデザートまで並んでいる。

「どうぞ、ちよつと買いすぎたので残してもいいですよ」「いつもの食べっぷりを見る限りでは、いらぬ心配だと思うが。

現にものの20分足らずで、すべてを平らげてしまった。

食事をすませたライ丸姉妹は、カツ子になにかを促している。それを合図にカツ子はブツチョに話をもちかける。

「あのうブツチョさん、今度の日曜日ってバイトお休みじゃないですか？」「

「ん？いや、休みじゃねえけど。一応土日はバイト夜間にしてもらってるから、日中ならあいてるぞ」

「じゃあジヨスコに遊びに行きませんか？」「

「は？買い物じゃなくて？ゲーセンか？」

「……………(頼)」「

「だめ？……………と言ってる」

「いや駄目じゃねえけど、わざわざ予定聞かなくてもジヨスコならすぐだろ？」

「……………あのですね、日曜日の朝9時までに行かなきゃ駄目なんです」「よ」

「朝9時！ってまだジヨスコ開いてねえだろ！襲撃か？開店前を襲うんか？！」

「……………(怒)」「

「おちつけ！おまえが襲撃したところで、返り討ちにあうのがオチだ！……………と言ってる」

「なんの話しに発展してるんですか？そうじゃなくてですね、朝9時に着くって事は8時前には出なきゃだめなんですよ。わたし達は」

その原因はお前だけだな。という視線をカツ子に向ける三人。

「そうだな、その時間だとバイト終わってから寝る暇ねえな」深夜のバイトが22時から翌早朝6時までなのだそうだ。

「……………(哀)」

「やっぱりダメだね。うん、いいやあきらめるよ。……………言ってる」

「別にいいぜ。ちょっとぐらい寝なくなつて大丈夫だろ。親と一緒に行かないって事は、その日しかないんだろ？」

「……………(喜)」

「ほんと！やった！ぜったい約束だよ！……………と言ってる」だいぶ喜んでいるようだ。そんなに楽しいことがあるのだろうか。

「……………ありがとうございますブッチョさん。よかったねライ丸ちゃん達」

まさか徹夜でバイトした後に、あんな電波ヒーローショーを見せられるとは知らないブッチョであった。

## 2話の03と04で

03

そして日曜日。

ジョスコへの道すがら、ブッチョはすでに後悔していた。バイトが終わったのが朝6時。

着替を済ませ、全員がカツ子の家に集合したのが7時半。

みんなで朝食を済ませ、ジョスコに向けて出発したのが7時45分。

そのまま行けば、到着は予定時刻よりも一時間も早い。

はずなのだが。やはり、というかカツ子の神がかった迷子能力のせいで、いまだ到着には至っていない。

現在8時半。カツ子の姿はここには無い。

「……………(汗)」

「どうしよう、本気でカツ子お姉ちゃん行方不明だよ。……と言ってる」

「とりあえず、一度戻ってみるか。てかあいつ迷う理由がマジハンプねえよ」

カツ子は、ここに至るまでに二度迷子になっているのだが、その理由が毎回違っているのだ。

一度目は、突然思い立ったように一人でコンビニに立ち寄り、みんながいらないのに気づきパニック状態に。

二度目は、猫を発見してそのままふらりと追いかけて、柵にハマり動けなくなる。

はたして今回はどんな理由で迷子になっているのだろうか。

と、たいして楽しくもない事に考えをめぐらせていると、前方で二人の警察官ともめている人を発見する。

「あれ？なんか前にもこんな光景見たような気がするが。デジャ

ブか？」

「……………(汗)」

「いや、たぶんこれは確実に前にもあった光景ですな。……と言ってる」

そう、警察官ともめているのは、迷子の子猫ちゃんならぬ迷子のカツ子である。もし警察官が犬のおまわりさんだったとしても、相手がカツ子だと、困ってしまったってワンワンする前にガウガウ言っただけで威嚇することだろう。

「よし、他人のふりしてやりすぎすぞ」

「……………(汗)」

「了解。今日はカツ子姉ちゃん来られなかったってことで。……と言ってる」

そう言っただけ、まわれ右する三人。

すると、背後から聞きなれた声が。「あつ！あの三人です！ブツチヨさんライ丸ちゃん達、助けてくださいよお！」「見つかったようだ。」

「ぐはあ！呼ぶんじゃねえよ！知り合いだと思われるだろ！」

04

警察官に呼ばれる三人。事情聴取の幕開けである。

「で、君が旦那さんで、そちらの二人がお子さんですか？」第一声からおかしなことを言い出す警察官である。

それを聞いてブツチヨは警察官に言う。「は？なに言ってるの？お前頭おかしいの？」たぶんお前の方が頭おかしいのだろう。

「いや、この女性が、旦那さんと子供達が迷子になったと言っていたので」「さすが警察官、ブツチヨの暴言にも毅然とした対応できり返す。」

「……………(?)」

「え？カツ子姉ちゃんそんな風に説明したの？……と言ってる」

「「だつて、そう説明した方が早いと思つたんだもん」」

それを聞いて、もう一人の警察官が出て言う。「おい女！それじゃ本官に嘘をついたと言うことかあ！」

突然怒り出した警察官に、啞然とする5人。4人ではなく5人である、毅然とした警察官も啞然としていた。

「すまん君たち、この人は警察の中でも少し問題のある人なので気をつけて」と怒った警察官に聞こえないように小声で、ありえないアドバイスをしてくる。

「なにをこそこしているのかね。あまり本官を馬鹿にすると撃つちゃうぞ」おそろしい事を言う警察官もいたものである。

「あ？やつぱ頭おかしいだろ。てめえどっかのマンガの拳銃バンバン撃つ本官さんか?!」

なるほど本官さんは鼻の穴は二つあるものの、目は左右がつながつてしまいそうなほど見開かれている。

「「ぶ……ブツチョヨさん、国家権力にたてつくのやめましょうよお。本官さん目つきがヤバイですよ？」」

「……（恐）」

「おおう、まじめに撃つてきそうぞで怖い。……と言つてる」その様子を見ていた、毅然とした警察官が補足説明をする。

あの本官さんは、過去に2度拳銃で問題を起こし、若手の頃殺人犯を射殺した経歴を持っているという。

「ぶつ！本官さんマジヤバイ人じゃん！てか人殺しはじめて見た！」と、ブツチョヨが空気を読めない発言をすると。

「「へえ、人を殺すってどんな感じなんですか？」」と、さらに変な食いつき方をしたカツ子が追い打ちをかける。

「失礼な！本官は犯人に正義の鉄槌を下しただけである！断じて人殺しなどではない！」正義の鉄槌とは良く言つたものである。

「そう言えば昔。殺し屋のことを、ターゲットを”消す”って意味で”イレイサー（消しゴム）”って言つたドラマか映画があつた気がするから、これから本官さんの事をイレイサーの”レイさん

”と呼ぼう！”ブッチョの最低あだ名付け芸の本領発揮だ。

「ほう、なかなか格好の良い名だ。これから本官のことをそう呼ぶがいい」殺し屋警官レイさんの誕生である。

あきれかえるもう一人の警察官に、多少の警告を受けた後にようやく解放される。

「……………(疲)」

「ようやく行けるよ、てか早く行かないと時間がないよ！……と言ってる」

時計を見ると、9時までは後5分しかない。

これ以上のタイムロスは許されないので、四人で手を繋いで行くことになった。

その後無事にジヨスコに到着。結局今日の目的は11時からのヒーローショーだと判明するのだが、なるほどすでにショー目当ての行列ができていた。

ショーが始まるまでの時間ブッチョは、眠気と戦いながら、レイさんの言う”正義”と”殺人”と言う言葉が微妙な違和感を持って繋がらないでいた。

まあそんな違和感も、もうしばらくで始まる電波ヒーローショーのおかげで混沌の中に埋もれてゆくことになるのだが。

ショーも終わり、余韻に浸りながら会場を後にする観客達。

カツ子がいらない事に気づく三人。

ピンポーン

《迷子のご案内です……》

カツ子お得意のネタで、今日の行事が締めくくられる。





### 第三話「以心電信」01および02で

#### 第三話「以心電信」

01

街は初夏と言っても過言ではない暑さをまとっている。  
そんな時期のお話。

あの電波シヨールから一週間、カツ子のマンションのリビングにある巨大な液晶テレビのスクリーンの中では、かのウドレンジャーがゲリラ活動を行っている。

この、朝から憂鬱になりそうな番組が終わると、次は仮面ソルジャーという、これも変身ヒーロー物の番組が放映されるのだが。これらのヒーローが変身するために使用するアイテムが、今回の話の中心になる。

「……………(笑)」

「今週のウドレンジャー最高だったー！ゾンドックが、ウドレンジャーをまさかの幹部起用！来週が楽しみ！……………と言ってる」

「お前ら朝からこんなもん見てると、アホになるぞ」

「……………(怒)」

「ブッチョは見てなくてもアホじゃん……………と言ってる」

「「ライ丸ちゃん達、女の子がそんな言葉づかいしちゃいけませんん。ブッチョさんはちょっとアレですけど、アホじゃありません！」

「……………」  
などといったものようにコントを繰り広げる四人。

ほどなくして、テレビから仮面ソルジャーの歌が流れ出す。

仮面ソルジャーは、やはり怪人と戦うヒーロー番組なのだが、ウドレンジャーの5人とは違い主に1人で戦うことになる。姿かたち

も仮面ソルジャーの方が、昆虫をモチーフにしている格好が良い。  
しかし、そんな似ても似つかない二種類のヒーロー達の共通点に  
ブッチョは気づく。

「あれ？こいつも携帯電話で変身するんか？」

そう、ウドレンジャーは携帯電話を掲げ、仮面ソルジャーは携帯  
電話を腰に当てて変身するのだ。

それに連鎖するようにカツ子も気づく。

「「そうだ！ブッチョさんが携帯電話持ってないから、私が迷子  
になったとき困るんですよ！」」

迷子になる方が悪いのだが、とんだとばっちりである。

「・・・・・・（解）」

「なるほど。カツ子姉ちゃんが迷子になった時、連絡が取れれば  
館内放送で呼び出される事もないね。・・・と言ってる」

「ん？そういうもんか？携帯電話持ったことないから、気づかん  
かった」

ブッチョは別に、理由があつて携帯電話を持っていなかったのだ  
はなくて、ただ必要なかつただけの寂しい男なのである。

しかしカツ子も、電子マネーの支払い以外で携帯電話を使用する  
ことなど皆無に等しいのであった。

「・・・・・・（笑）」

「じゃあ今日は、ブッチョの携帯を買いにいこう！・・・と言っ  
てる」

「は？いや、そっか、必要なら買ってでもいいか」ブッチョは、ま  
さか携帯電話が必要になるとは思ってなかったので少し戸惑う。

「「じゃあ決まりですね。今日はヘイデン社に行きましょう」」

ヘイデン社とは、ここ愛知県を中心に展開する大型家電量販店だ  
ある。家電から、ゲーム、おもちゃに家具までなんでもあり、一日  
いても楽しい店舗なのだ。場所も、ジヨスコの近くという利便性の

良さもポイントだ。

こうして一行は、ブッチョのはじめての携帯電話を買いに行く事になったのである。

02

「「じゃあヘイデン社へ出発です!」」と元気良く叫ぶカツ子を。  
「ちよつと待て!」とブッチョが止める。

「「はい? なにか忘れ物ですか?」」

「いやいや、今までスルーしてきたが、カツ子お前いつも同じ格好してないか?」

そう言われて全員の視線がカツ子に集まる。

なるほど、いつものノーメイクにボサボサ髪、上下ジャージにパーカーを羽織っている。見慣れた光景なので、疑問に思わなかったが、カツ子が他の服を着ているのを見たことが無い。

「「なっ! ちゃんとクリーニングしてますし、同じ服4着ずつ持ってて、毎日着回してるんで汚くないですよっ!」」

「「つて、そういう事を言ってるんじゃないかって! てか4着ずつもあるのかい! お前はアニメキャラか?!」」

「「ブッチョさんだって、いっつもジーパンにTシャツじゃないですかあ!」」

「「いやいや、俺だって3着ずつ違うのを着回してるし、ジーパンだって1回履いたら洗濯するぞ!」」以外とキレイ好きらしい。

「「……………(汗)」」

「もう、ふたりともケンカしちゃだめだよ! ……と言ってる心配をするライ丸達を指さしてブッチョは言う。

「「見てみる! ライ子はしょうがないとして、丸美は毎回違う服を着てきてるだろ!」」確かに、丸美が同じ服を着ている事はあまりない。

「……………(怒)」

「お姉ちゃんだってライオンの皮3着を洗濯して着回してるぞ！  
…と言ってる」

「！！！！」「！！！！」「まさかの事実にはブッチョもカツ子も驚愕する。」

結局、カツ子の持っている服は、ジャージ以外は礼服しか無いことが判明。カツ子の服の購入はまたの機会ということになった。迷子阻止の為に携帯電話を購入するのが先、という結論に達したためだ。

で、出発したのだが、今回は最初からみんなの手を繋いで行ったため、何事もなくヘイデン社に到着した。何事もないと逆に不安になる一行であった。

ヘイデン社の店舗は、3階建てながらも広大な敷地に建っているため、かなりの商品数を有している。

1階は駐車場となっており、実際は2階と3階が商品スペースとなっている。

さらに、3階は家具や大型家電を販売するスペースで、携帯電話を販売しているのは2階部分ということになる。

「うおおおっ！でけえ店だなおい！こりゃあカッ子じゃなくても迷子になるぞ！」

「……………（驚）」

「わあああっ！見てあれ！おもちゃコーナーもある！ウドレンジャーフィギュアもあるよ！……………と言ってる」

いなか者まるだしのはしやぎよの三人。地元の店でこれだけ興奮できるのは安上がりこのうえない。

さすがヒッキーとはいえ、セレブのカッ子はこの程度でははしやがない、と思いきや。

「ぶっ！カッ子がいねえ！」どうやらあまりの広さにパニックになっただけらしい。

幸いこの商品棚は低く作られているので、さまようカッ子の姿をすぐに確認できた。

「……………（呆）」

「まったくもう、ブッチョが携帯買つまでおとなしくしてよ。……………と言ってる」

「……………面目ない……………」小学生に説教される25歳の女。

まわりを見てみると、ここはテレビ売場のようだ。

「・・・・・・・・・・(喜)」

「あつ！カツ子姉ちゃんこのテレビと一緒にだ！・・・・・・と云つて  
る」

「これが一番でかいテレビだな、さすがヒツキーセレブ」

「「そりゃあ毎回、その時一番の機種を頼みますから」「テレビは、そう頻繁に換えるものではないと思うが。」

「テレビかあ。そろそろ買わなきゃいかな」

「・・・・・・・・・・(?)」

「ブツチョ、テレビ持つてないの？・・・・・・と云つてる」

「ウチにあるテレビは厚型のブラウンさんじゃい！」どうやらブツチョの家には、地デジ・コオは来てくれなかったらしい。

ちなみに地デジ・コオとは。テレビの電波が、地上デジタルというものに切り替わり、今までのテレビでは見れなくなってしまふ。そのためにテレビを買い換える。というキャンペーンのキャラクタ―である。

伝説の元サッカー選手ジーコオを起用し、大量のCMが流された。サッカーと言えば、地元チームグランドパスエイティを悲願の優勝へと導いた、元選手で現監督のストコビッチが神である。

余談が長くなつたが。簡単に言うと、現在ブツチョのテレビは砂嵐しか映らない。

「まあいいか。テレビなんか見られなくても生きてける」三人に苦笑されるブツチョであった。

「・・・・・・・・・・(!)」

「あつ、見て！こんな所にソファァーで寝てる人たちがいる！・・・・・・と云つてる」

「ああ、マッサージチェアコーナーだな。ジヨスコにもあるぞ」

「・・・・・・・・・・(汗)」

「こんなところでガチで寝て、恥ずかしくないのか？こいつら・・・  
と言ってる」

「みんな寝てるから恥ずかしくないんだろ？それに見る。店側も  
みぐるしいからって、ちゃんと周りから見えにくい様に配置してあ  
るだろ？」

「いやいや、本人達の目の前で暴言吐くのやめましょうよお」「  
迷惑極まりない一行である。」

04

なんだかんだで、携帯電話売場に到着。

電話会社別に、実にカラフルな携帯電話が数多くディスプレイさ  
れている。

「・・・・・・・・・・(笑)」

「やっぱスマホがいいよね。ゲームできるし。アンドロノイドと  
アイホンどっちがいいかな？・・・と言ってる」

「すまん、日本語でしゃべってくれ。横文字はわからん」じじい  
の様なことを言う若者である。

「こっちのスマホは防水仕様ですよ。こっちは私が持つて  
のと同じです。新作が発売されることに買い換えてるんで詳しいで  
すよっ」「次々に説明してくれる、こちらは金銭感覚のおかしい若  
者である。」

「ちよつと待て！まずスマホってなんだ！そっから説明しろ！」

「・・・・・・・・・・(！)」

「マジで言ってるの？CMとかでもやってんじゃん！・・・と言  
ってる」厚型砂嵐のテレビではコマーシャルなど放映されてはいな  
い。

この騒ぎに気づいた店員が、説明しようとかatalogを持って少し  
後ろで待機しているが、この異様な一行に近づけないでいる。苦笑  
する店員をしりぬに、カッ子はスマートホンの意味から機種の説明

までブツチョにたたき込んだ。

「なるほど、これ一台あれば電話もインターネットも何でもできるわけだ」

「そうですね。どのスマホにしますか？」

「いや、どれにもしない」

「・・・・・・(?)」

「は？ここまで来て買わないのかよ！・・・と言ってる」

「おいおい、お前らフリーターの収入をなめてんじゃねえって言うてんじゃねえか！」 予算オーバーらしい。

「いや、これぐらい私が出しますよ。私と同じ電話会社なら、使用料も出します」

「！！！！」 カツ子の言葉を聞いたブツチョは、どろり……と忘れていた嫌な記憶が、膿のように出てくるのを感じた。



ブツチヨは、高校生の頃に一時だけ友達ができたことがあった。友達と呼ぶには曖昧な感じに集まる四人。ブツチヨは、長い間友達などできた覚えが無いので、どこか馴染めない居心地の悪い感じを抱えていた。

しかしあれは、ほんとに気まぐれだったのだが、放課後寄ったマグドで、ブツチヨが三人に奢ったのだ。

「おっ！マジで？ごっそさん」

「バイトやってんだっけ？ゴチっす」

「ごちそうさん。俺も給料入ったら奢るよ」

その当時バイトをやっていて、それこそたいした金額ではなかったのだが、初めて友達のような関係が持てた気がした。

それから遊びに誘うときは、決まって奢ると自分で決めていた。

他の三人もバイトをしていて、金に余裕があるので奢ってくれることも多々あった。

そんな感じで、四人の関係は成り立っていた。

今と同じで出来の悪いブツチヨは、ある時バイトをクビになる。

収入が無くなり、バイトを探すがなかなか見つからない。

そうになると、奢ることで友達と繋がっていると思っていたブツチ

ヨは、徐々にその三人とは疎遠になる。

そのことを三人に打ち明けると、「そんなこと気にすることねえよ、別に金で繋がってた訳じゃねえんだし」と言ってくれた。実際三人は全く気にはいなかったのだが。

しかし結局、以前のように居心地の悪さを感じるようになってしまい、三人とは付き合わなくなってしまった。

今、同じ状況になったとしても、あの三人とちゃんと友達でいられる自信は無い。

だが、同じ気持ちを今日の前にいる友達にあじあわせない様にする事はできるはずだ。

ゴン！

「「いったーい！ブッチョさん何するんですかあ?!」「いきなり脳天にゲンコツをくらったカツ子は、泣きながら抗議する。

「アホかお前！友達と付き合う為の予算ぐらい自分で出すつーの！それにそんな事されると、逆に友達でいずらいわ！」

「「えっ?!」「」

と言う感嘆符付きの声を発したかと思うと、次の瞬間カツ子と目が合う。

今までも、偶然目が合う事は何度もあったが、すぐに目をそらしていた。

しかし、今は確かにカツ子は”目を合わせた”。まあ次の瞬間には目を背けてしまったのだが。

「・・・・・・・・(怒)」

「あーっ！ブッチョがカツ子姉ちゃんいじめてるー！・・・・と云ってる」と絶妙な横やりが入る。

「いやいや、ちよっと叱ってやっただけだから。いじめとか言うな。教育委員会から苦情が来るわ！」

「・・・・・・・・(?)」

「カツ子姉ちゃん、大丈夫?・・・・と云ってる」と言いながら、カツ子のゲンコツの落ちた箇所をなでるライ丸姉妹。

しかし、カツ子の様子を見て手が止まる。

「「えへへへ、友達だつて。えへへへ」と小刻みに震えながら笑っている。

「・・・・・・・・(恐)」

「か……カッ子姉ちゃんが壊れた！ホラー再来？！……と言ってる」

「やべえ、打ちどころが悪かったか。もっかい叩いたら治るかもしれない、お前らたのむ」

ライ丸姉妹は、カッ子の頭をポカポカ叩くが、一向にヘラヘラ笑いは治らないのであった。

結局ブッチョは、0円で買える折りたたみ式の携帯電話を購入する事に決める。

しかし契約の段階で、身分証が必要な事が発覚。

自動車免許その他身分証になるものなど、持ち合わせている訳などなく。

本日の購入を潔く断念。

その後の店内には、マツサージチェアを占拠する四人がいたという事である。

後日ブッチョは、一人で保険証と住民票を持って来店。契約を済ませ、晴れて携帯電話の所持者となったのであった。

と、これがブッチョの初携帯電話所持までの経緯である。

それと、もう一つ。カッ子のファッション問題について。

ブッチョが携帯電話を購入した日から三日後に進展があった。

カッ子の服装は、パステルピンクに白のツーラインが入った長袖長ズボンのジャージに、淡い水色の長袖パーカーを羽織っている。これを4セット持っているらしく、その服装しか見たことが無いのだが。

その日に見た格好は。

パステルグリーンで、胸の部分に英語のロゴが入り、半袖の。

上下ジャージであった。

ご丁寧に、パーカーもオレンジの腕の部分の無い夏物に変わっている。

なにごともしなかつたように、それを着ているカツ子を見て、ムカついたブッチョは、ツツコまずにスルーするのだが。

二日目には、デザインが全く同じで、色の違うものを着ていて。

三日目にも、さらに色だけ違うものを出してきた。

そして、四色目を見せられたときに。

「色違いで、お前はどっかのゲームの雑魚キャラか！」 という

ブッチョの絶叫で、このネタは幕を閉じたのである。

### 第3話了

### 第三話補足「着信アリ」01と02です

第三話補足「着信アリ」

01

はじめての携帯電話から二日後、カツ子が新しい服を披露する前日の話。

いまやすでに、変人達のたまり場になりつつあるカツ子宅。その食事時間でのひとコマふたコマ。

最近夕飯は、四人そろって食べるのが習慣になりつつあった。二人ほど、夕飯ではなく間食として食べている子供がいるが。

「……(汗)」

「うっ。カツ子姉ちゃん、このハンバーグすっごい甘いんだけど。……と言ってる」

「おい、味噌汁の半分が味噌のかたまりだぞ」

「ええっ！おかしいなあ、ちゃんと料理本の通りにやったんですけどねえ」

あの買い物の一件からしばらくして、せっかく買った調理器具を使わないのはもったいないと、ブッチョとカツ子が交代で夕飯を作ることになったのだ。

カツ子は、料理本を見ながら作っているにもかかわらず、できあがる物は、見た目は良いが、本とは違った味になる。まともにできるのはご飯を炊くことぐらいである。

ブッチョの作る料理はというと、味は良いのだが、高タンパク、高カロリー、高コレステロール、そして量が多いときている。しかも、オリジナル料理が多いので、見た目が最悪なのだ。

とはいえ、文句を言いながらも毎回全部たいらげてしまうのだが。

食事を終え、食洗機に食器をセットしているブッチョにカツ子が声をかける。

「ブッチョさん、携帯電話の調子はどうですか？」

「ああアレなんか壊れてるみたいだから使ってねえよ」

「……………(怒)」

「なんだ、いまだき不良品つかませるたあふてえ野郎だ！……と言ってる」とライ丸は、なぜか時代劇の口調で怒りをあらわにする。

「それじゃあ交換してもらわないといけませんねえ。どこが悪いんですか？」

「ああなんか、どのボタン押しても、画面が真っ黒で何も映んねえ」

「ん？」

「……………(?)」

「あれ？それって、電源入ってないんじゃない？……と言って」

「は？だから、電源も入らないんだって」

「えつと、電源ボタンは3秒ぐらい長押ししないと入らないですけど？」

「え？そうなのか？どれどれ」ポケットから、携帯電話を取り出す。使えないのに持っているとは律儀なやつである。

「言われた通りボタンを押してみると、電子音と共に画面が映る。」

「おおっ！ちゃんと動いた！」

「……………(汗)」

「いまだき携帯の電源も入れられないやつがいるのか？……と言ってる」

「ブッチョさん、どれだけ文明の利器から離れてるんですか？」

「電源が入り、はしゃいでいたのもつかの間。すぐに落ち込んでし

まっ。

「……電話をかけようにも、かける相手がいねえ！」

「……（驚）」

「ブッチョ友達一人もいねえのかよ！いるのかそんな奴！……  
と言ってる」

「なっ！お前らだって、毎日こんな所に来てて、友達いねえんだ  
ろっがあっ！」

「……（怒）」

「ブッチョと違って、友達いっぱいいるもん！いつも友達と遊ん  
でから来るんだもん！……と言ってる」

「ま……まじか、お前から絶対友達いないもんだと思ってたのに  
ガツクリとうなだれるブッチョ。」

「「ブッチョさん携帯貸してください」「と言いながら、カッ子  
はブッチョから携帯電話をうばいとる。」

すると、手早くブッチョの携帯をいじりまわし、自分の携帯と向  
かい合わせる。どこかの儀式のように向かい合わせると、ピロリン、  
という電子音になる。

そのまま返された携帯電話を見ると、画面には登録された電話番号  
が映っていた。ご丁寧に、「カッ子」という名前で。

「「ブッチョさんの初めてもらっちゃいましたあ」「と、うれし  
そうにはしゃぐ。」

「なんかそのいいまわし、ちょっとエロいな」

「……（怒）」

「ブッチョさいて！……と言ってる」

「ぶっ！意味わかんのか、お前らにはまだ早い！」

あまりこのネタを引っ張るとヤバいと感じたブッチョは、携帯電  
話を持って歩き出す。

「ちよっとお前からここで待ってるよ」と言い残し部屋を出ていく。

取り残されるカツ子とライ丸姉妹。

しばらくすると、カツ子の携帯が鳴り出す。

カツ子が電話を取ると、『もしもし、ってうわっ、もしもしって言っちゃったよ。しかも自然に！』という、ブツチヨの、はしゃぎ過ぎて寒いテンションの声が、静かな部屋に響き、苦笑する三人。

「あのう、同じ家の中で電話って、電話代の無駄だと思うんですけど」と、呆れながら言う。

『別にいいじゃねえか。最初ぐらい。ってお前、脱いだ服こんな所に山積みにしてんじゃねえよ』

「ぎゃあっ！ブツチヨさんどこにいるんですかあっ?!」「」

『どこって、ベッドがあるから寝室か？てか洗濯ぐらいしろよ』

「まとめてクリーニングに出してるんですっ！女性の寝室のぞかないでくださいっ!」「」

「………(汗)」

「いや、でも、カツ子姉ちゃん、アレはちょっとないね。……と言ってる」

ライ丸姉妹は、初めて来たとき寝室をのぞいていた。

「ぎゃふん！寝室のぞかれて、ダメだしされて、最悪ですっ!」

撃沈するカツ子であった。

電話を切り、ブツチヨは携帯電話をポケットにしまう。

そこで、前にテレビで見た映画のCMで、“着信あり”というタイトルのホラー映画があったのを思い出す。

映画そのものも、見たことはなかったのだが。

当時も携帯電話の事を、あまりよく知らなかったので、携帯電話の画面に“着信あり”と出ると呪われると思いきんでいた。

そんな事を、ふと思いだしながら部屋を出ようと、ドアの付近に差し掛かったとき、散乱していた服につまづいて転んでしまう。



その時、運悪く照明のスイッチを切ってしまい。部屋が暗黒の闇に支配される。

一方、カツ子たちは、ブッチョがなかなか帰ってこないので電話を掛けることにした。

「あれ？電気のスイッチどこだ？」と手探りでスイッチをさがしている。

ピリリリリリリリ！

ブイイイイイイン！

と、大音量の着信音とバイブレータが鳴り出す。

「ぎゃああああああつ！！」暗闇での初めての着信に、もう大パニックである。

携帯が鳴り止み、落ち着きを取り戻すと、ポケットの携帯電話が光っているのに気づく。

恐る恐る携帯電話を開くと、その画面には。

”着信あり”の文字

「ぎゃああつ！！リアルホラー！」という絶叫と共に意識を失うブッチョであった。

二度の絶叫を聞いて、部屋に駆けつけた三人が見たものは、カツ子の山積みの洗濯物に顔をうずめて気絶したブッチョで、さらにそれを見たカツ子の絶叫でこのネタは終わったのであった。

第3話補足了

## 第おまけ話「顔出しNO GOOD」（前書き）

はじめにお読みください。

この話には挿絵が入っております。

もともとノベルゲー用の物語なので、キャラクターのデザインがあります。

しかし、小説という媒体で、キャラクターのビジュアルを固定するのは本望ではありません。

話的には第3話の続きの体ですが、物語の本筋に必要な情報は含まれていません。

まあ、どうでもいい小説にどうでもいい絵が付いただけなので、気にすることはありませんが。

素人の描いた絵を見るのが苦痛な人は、ぜひ読み飛ばしてください。

## 第おまけ話「顔出しNO GOOD」

第おまけ話「顔出しNO GOOD」

01

ある日の昼食時の光景。

今日の昼食は、定番のマグドである。

定番で大量のマグドである。

「……………」

「うまい！マグド最高！発明した人は神！……………」

「それじゃ、わたしもいただきますよ」と

そんな食事風景の横で、一人携帯電話をいじるブツチヨ。

カツ子がハンバーガーを口にくわえたと同時に。

ピロリン！

>i31975—3933<

電子音と同時に、ブツチヨの携帯電話の画面に、カツ子とライ丸姉妹の写真が保存される。

「わっ！いきなり写真撮るなんてマナー違反ですよブツチヨさ

ん！」

「……………」

「えっ写真撮ったの？見せて？……………」

「わりいわりい。携帯で写真撮れるって、今気がついたから撮っ

ちまった」

「もう、ちょっと見せてください」

カツ子はブツチヨの携帯を取り上げ、写真をチェックする。

「……………」

「えっ？今消したの？勝手に消すのはマナー違反じゃねのかよ！」

どっちもどっちである。

「ちゃんと撮ればいいんなら、これから撮影会だ！」  
「ううして、なんの脈絡もない撮影会のスタートである。」

02

トップバッターはカツ子である。

カツ子はなにやら、奥の部屋でゴソゴソやっている。

待つこと10分、いよいよライ丸達からあくびが出始めた頃にカツ子は出てきた。

「おまたせしましたあ。じゃあ始めましょうか」

そう言いながら登場したカツ子は、セーラー服のコスプレに羽根が生えていて謎のステッキを持っている、という出で立ちであった。

「……………(汗)」

「……………と言ってる」

「あつ、あれ？ライ丸ちゃん達なら、このステッキわかってくれると思っただけどなあ？」

「……………(哀)」

「ごめん、カツ子姉ちゃん。ステッキはいいけど、なんかもうどっ散らかってパニックだよ。……………と言ってる」

カツ子の話では、”鈴宮八ヒルの鬱憤”とか言う大ヒットライトノベルの主人公のセーラー服に、なぜか羽根を背負い、手持ちぶさたなので少女アニメのステッキを持った。とのことだった。

「どう見ても、いい年した女がセーラー服着て、はしゃいでるよ  
うにしか見えないので10点」

「え？10点満点で？」

「アホか！100点満点中だ！」どうやら採点されるようだ。

「じゃあとりあえず撮るぞ」

「えっ？ほんとに撮るんですか？ちょっと待ってください」

ピロリン！

「あつ、もう撮っちゃったんですか？中途半端な感じになっ

てないですか？」「といいながら携帯をのぞき込むカツ子。

> i32047—3933<

「「やっぱり中途半端……っっていうか、これってまさか、手抜きですよネ?! 絶対手抜きですよ!! 完全に線が適当ですもん!」「」  
なにを言っているか解らないが、断じて手抜きなどではない。面倒くさくなっただけなのである。

「なに言ってるんだよ! 写真に手抜きもなにもあるか!」

「……………」

「あははは。ほんとだ、完全に手抜きだね。……と言ってる失礼なガキである。」

「お前ら! そう言うツツコミを入れるのはルール違反だぞ! 自重しろ!」こんな小説に、ルールもへったくれもあつたもんじゃない。

03

で、次はライ丸姉妹である。

「……………」

「カツ子姉ちゃん、よぶんな事するからあんな結果に終わるんだよ。……と言ってる」

「「だってえ、こんな時ぐらいいしかコスプレ着る機会なんてないんだもん。ライ丸ちゃん達もなにか着る?」

「……………」

「いや、遠慮しときます。イタい結果になるのは目に見えているので。……と言ってる」

子供の目にも、カツ子のコスプレは相当イタらしい。

「じゃあ撮るぞ」

「……………」

「えっ! ちょっと待ってよ! 前振りもうおわり? 採点とかしてないし。……と言ってる」

「ああ、お前らすでに出落ちだし、採点はもう飽きた」

ピロリン！

「……………(汗)」

「よっしゃ、とりあえず顔だけはいい感じに作れたと思う。．．．  
と言ってる」「といいながら携帯をのぞき込む。

> i32048—3933 <

「……………(怒)」

「てか、私たちの顔だけかい！絶対からだ描くの面倒くさかったの見え見えじゃねえか！．．．と言ってる」「さすが自称エスパー、  
わかっていらっしゃる。

「もう俺はフォローしないぞ」

04

なんだかんだでブッチョの番である。

「これで撮影会はおひらきだな」

「！！！！」三人はブチギレである。

「……………(怒)」

「お前、自分だけ逃げようだったってそうはいかねえぞ！お前もガツ  
ツカリ写真とれ！．．．と言ってる」

「「そうですよお！あんなにひどい写真撮られたんですから、ブ  
ッチョさんも撮ってくださいよおっ！！」」

「わかった、落ち着けお前ら！それじゃあ四人の集合写真を撮る  
う。それでいいだろ？」

「……………(苦)」

「なんか釈然としないけど、まあいいか。．．．と言ってる」

「「しょうがないですねえ。それで手を打ちましょう。じゃあみ  
んなで写るなら着替えてきますね」」

「よし！タイマーセット！撮るぞ！」いつの間にか、タイマーな  
んて機能を使えるようになっていた。

ピピッ！タイマーセット完了の電子音が鳴る。

「はい？ちょっと待ってくださいよお！なんでブッチョさんはいつも勝手に撮り始めるんですかあっ！」

「は？なに言ってるんだ？見るよライ丸達はもう準備万端だぞ！」  
ライ丸姉妹は、携帯の前で澄まし顔で手を繋いでいる。

「ぎゃふん！ライ丸ちゃん達ずるい！ブッチョさん、私こんなイタイ格好じゃ嫌です！」やはり自分でもイタイらしい。

「いい年こいてアニメキャラの扮装なんてするからだろ！お前が着替えてる間に、ライ丸達寝ちまうぞ！」

「たしかにさつき着替え終わったときも、ライ丸ちゃん達眠そうでしたけどっ！それでも着替えたいんですっ！」

そんな言い争いをしている二人の前で、ライ丸姉妹は笑顔で立ち尽くす。立ち尽くしながら思う、タイマー長え！

ブッチョがタイマーをセットしてから、すでに30秒以上が経過していた。

笑顔で立ち尽くす子供二人と、言い争いをする男女二人。  
彼らはしらなかった。

> i 3 2 0 4 9 — 3 9 3 3 <

その醜態がムービーで撮影されていたことに。  
新たな黒歴史の誕生である。

第おまけ話了

## 第四話「モダンウォーフエア」01と02

### 第4話「モダンウォーフエア」

01

カツ子は、ビルの廃墟の二階の窓から外をうかがう。  
眼下を味方が走り抜けていく。

直後銃声が鳴り響き、戦闘が開始される。

雑居ビル前方の道路右側を敵が走り抜ける。カツ子は、装備しているアサルトライフルで狙いを定め、トリガーを引くと、目標の敵はその場に倒れ伏す。

視線を前に戻すと、向かいのビルの窓からこちらを狙う敵が。

「しまった！」と思った瞬間、こちらを狙っていた敵が窓から転げ落ちた。

「大丈夫かカツ子！」ブッチョが窓から姿を見せる。

「ありがとうございます。助かりました」

ひと安心した直後、爆撃機の轟音が上空から鳴り響く。

「なっ！空爆！？」二人は建物の中にいるので安全だが、窓際では爆風に巻き込まれる恐れがある。

「……………(笑)」

「空爆要請したから、二人とも気をつけてね……。……と云ってる」

ドカン！ドカン！ドカン！と周囲を焼き尽くす爆撃が放たれる。

「マジかお前ら、空爆で。そんなに倒したんか？」

「……………(笑)」

「あははは、今のでさらに3人逝ったね。……と言ってる」

空爆は、自分がやられずに5人連続で倒すと呼べるポーナスなのだ。



そう、これは最近はやりのFPSゲームの話。  
ファースト・パーソン・シューティング  
FPSとは、その名の通り自分視点で動かし、鉄砲をうって敵を  
倒すゲームである。

なぜ、こんなゲームをやっているかというと……。

時は、夏本番を思わせる七月初旬。思わずエアコンの効いている  
場所へと足が向いてしまう時期の話。

ブッチョとライ丸姉妹の頭のなかで、エアコンの効いている施設  
は、自動的にここカツ子の家になる。

まあ、暑くても寒くてもここに集まるので、季節は関係ないのだ  
が。

「で、今日はみんなにお願いがあるんですけどお」

「金ならないぞ」金持ちに言うせりふではない。

「……………(哀)」

「ご飯は減らさないください。……と言ってる」どんな貧乏  
セレブか。

「いや、このゲームと一緒にやってもらいたいんですけど」  
と、なにやらゲームの箱を手にカツ子は言う。

ゲームのタイトルは”コールオブビューティ―：モダンガールフ  
エスタ3”全世界で記録的な本数を売り上げた、大ヒットFPSシ  
リーズの第3弾らしい。

ゲーム内容をざっくり説明すると。セクシーな女性兵士が、露出  
度の高いコスチュームで、数種類の武器を使い、2チームに分かれ  
て対戦するというお色気系FPSである。

ちなみに設定として、人は攻撃を受けると気絶するので、武器は  
実在のものではない。

カツ子はこのゲームをやってる人たちのチームに所属していて、

今日は他のチームとの決戦なのだが、チームメイト3人が用事でプレイできないとの事。  
ヒマ人のカツ子が補充要員の確保をまかされたのだが、人見知りの激しいカツ子は、悩んだ末ブツチョとライ丸姉妹に助っ人を頼んだ次第である。

02

「よし、わかった。けど、お前のやってたネットゲってこのゲームの事か？」

「いいえ。ネットゲの方はパソコンのオンラインRPGです。そちの話がいいですか？そうなると、傾向としてゲームの世界に入り込むことにもなりかねませんが？」

「……(汗)」  
「カツ子姉ちゃん。あんまりそういう事言わない方がいいとおもっよ？……と言ってる」

「おい！あんまこのネタ引つ張るな！」  
「あれ？そうですか？じゃあこっちの部屋に来てください」  
と言つて開けた隣の部屋の中には、3台の液晶テレビと、それに繋がった3台のゲーム機がセットされていた。

「うおっ！どっかのオフィスみたいだな。わざわざこのためにそろえたのか？」

「いえ、テレビとゲーム機を3台つなげて遊ぶゲームがあるので、そのためのセットです」

実際、5台つなげて遊べるゲームがあるそうだが、それは別の話  
「……(驚)」  
「すごい！はやくやろーよ！……と言ってる」と、目をキラキラさせながら言う。

「じゃあ少し説明しますね」といってリモコンで電源を入れていく。

それから約10分ほど操作説明を受ける。  
さすが子供は飲み込みが早く、すぐに操作を覚える。ブッチョも  
出来が悪いなりに覚えたようだった。

次に使用武器を選ぶのだが、大きく分けて遠距離・中距離・近距離の武器がある。で、数回プレイした結果。

ブッチョ……………ショットガン 近距離武器  
カッツ……………アサルトライフル 中距離武器  
ライ子……………アサルトライフル 中距離武器  
丸美……………スナイパーライフル 遠距離武器  
という具合になった。

「よし、まあだいたいオツケーだろ」

「……………(怒)」

「ぜんぜんオツケーじゃねえよ！敵が見えたからって、あんな遠距離からショットガンが当たるか！……と言ってる」たしかにぜんぜんオツケーではない。

「まあ時間もありませんし、これでいきましょう」

と言いながら、カッツはリビングの方のゲーム機を起動させる。

ブッチョとライ丸も、それぞれのゲーム機のコントローラーを持つ。

現在ゲーム画面には、ロビーと呼ばれる文字だけの画面が映し出されている。

「……………(笑)」

「あつ！わたし達の名前が書いてある……………と言ってる」

テレビ画面には、ブッチョ・カッツ・ライコ・マルミ、と上から順に並んで書いてある。他の名前が無いが、時間になれば増えるらしい。

「ふーん。で、この名前の前の文字はなんだ？」

自分達の名前の前に、カッツに囲まれたアルファベット四文字が書いてある。

「「あつ、それは”クランタグ”って言って、チームの名前みたいなものです。こういうゲームでは、チームの事を”クラン”って言って、このゲームではその名前をアルファベット四文字で付けられるんです」

「……………(笑)」

「じゃあ、わたし達も”クラン”かな? ……とってる」

「アホか、チームなんて格好いいもんじゃねえだろ? 寄せ集めで充分だ」と言いつつ、まんざらでもない様子。

「「えへへへ、今度わたし達の”クランタグ”考えましょうか」

「ところでこのクランタグはどう言う意味だ? 「HDKS」何かの略か?」

「……………(?!)」

「H……………ほっとけ・D……………だまれ・K……………けど・S……………好き。…」

・と言ってる「あいうえお作文が始まったようだ。」

「ツンデレか?! もっとかつこいい略だろ! たとえば、H……………ハイソな感じで・D……………ドラスティック・K……………クロッシング・S……………サレンダー」

「「厨二病ですか! 支離滅裂ですし! H……………ヘタ・D……………だけど・

K……………かんべん・S……………してね。の略です」「まったくもって駄目である。」

これからの対戦の泥試合ぶりが目に見える、ブッチョとライ丸姉妹であった。

そんなこんなで、これから数分後に世紀の泥試合が幕を開けるのであった。

「で、今日の対戦相手は強いのか？」

「いいえ、たぶん私達とおんなじ位の強さだと思います」「それを言うなら強さではなく、同じ位の弱さであろう。」

「……………(汗)」

「うーん、ぐだぐだの予感。……と言ってる」

「まあ正直なところ、相手のリーダーがウザすぎて相手したくないというか……………」

メンバーが来ないのも、そこらへんも理由のひとつのようだ。

カツ子の話によると、相手のリーダーはいわゆる粘着質らしく、いやがらせの様にしつこくまとわりついて来るらしい。

「しかもハンドガンしか使わないんですよ」

ハンドガンは、どの武器を選択しても持っている二つ目の武器である。

「ほう、あんな使いづらくて弱い武器を使ってる事は、そいつは上手いのか？」

「いえ、たぶん今日やるメンバー、敵味方全員の中で一番下手くそです」「」

「……………(驚)」

「えっ!?意味がわからないんだけど。……と言ってる」

「とりあえず、始めればわかりますよ。っと来ましたね」「」

テレビ画面を見ると、名前が二人増えている。

表示された名前は、ヨシオとマサミと書いてある。

「普通か!?」意味不明なツッコミである。普通のどこが悪いのだろうか。

クランのメンバーはこれで全部らしい。しかしカツ子は、これと

いつてなにもせず待っている。

「おい、なんかしゃべるとかメッセージ送るとかしないでいいのか？」

「「え？はい、私この人達と喋った事無いですし、勝手に始まりますよ？」」それでチームとはよく言ったものである。「コミュニケーションは、たまにゲーム機のメール機能でやりとりする程度らしい。」

そんなやりとりをしているうちに、テレビ画面の自分達の名前の反対側に、名前が6人分一気に表示される。どうやらこの6人が今日の対戦相手らしい。

その名前を見て、カツ子が、「「あれ？相手のリーダー名前が変わってる」「

カツ子が指さした名前は”103”と表記されている。

「あんま嫌われすぎて名前変えたんじゃない？元の名前は何だったんだ？」

「「ん？あれ？あまりにも忌まわしすぎて、記憶から消え去っちゃいました」「そこまでウザいらしい。」

「……………(笑)」

「そろそろ始まるみたいだよ。…………言ってる」

04

テレビ画面では、カウントダウンの後、廃墟の街並みとセクシーな女性がメンバー分表示される。ゲームのスタートだ。

開始直後、全員がダッシュで散会する。

しばらくすると、銃声が聞こえ出す。どこかで、戦闘が起こっているようだ。

ブッチョが銃声のする方へ走っていると、ひとつ向こうの道を、ハンドガンを撃ち続けながら、あさっての方向へ向かって行く敵を

発見する。

「はい？なにやってんだあいつ」この距離ではショットガンは当たらないので、つけてみる事にする。

キャラクターが視認できるようになると、その頭のうえに名前が出るのだが、その挙動不審者の頭には”103”と表示されている。ほどなくして、プレイヤー103に追いついき、ついでにショットガンで倒してしまう。

「？今の奴なんか意味あんのか？」と疑問に思っていると。ポコン！とテレビから気の抜けた音がする。

このゲーム機は、メールが来ると今の音で知らせてくれるらしい。「なんだ？こんなときにメールか？」と言いつつメールを確認してみる。

メールはボイスメールだった。ボイスメールとは、文字ではなく音声を送れるメールである。ブッチョはとりあえずメールを再生してみると。

『貴様も我が輩の邪魔をするのか。ゆるせん！呪ってやる！』とのこと。

「ぎゃあ！怨霊戦線！」

それをとなりの部屋で聞いていたカツ子が「ああブッチョさん、やっちゃいましたか。これから執拗に追いかけられますよ」「

「え？なにこれ？リアルサイバーホラーなの？」

と言っていると、前方からハンドガンを発射しながら、頭に103と書いたキャラが走ってくる。

このゲームは、一人敵を倒すと10点チームに入り、どちらかのチームが750点取るか、30分の制限時間の終わりに点数の多いほうが勝つというルールなので、やられても数秒の後にすぐに復活するのである。

ブッチョは、走ってくる103を難なくショットガンで倒す。

「ま、どつてことないな」

「いえ、これからですよ、本番は」

その後も幾度と無く向かってくる103を、楽勝で倒すのだが。

「えっと、ちよつとヤバイ！うわっ！」ブッチョが他の敵の相手をしているときに、たまたまタイミング良く103が来て、ブッチョは倒されてしまう。

「むむっ、なんだかむしょうに腹が立つんだが」

「そんなんですよ、たまに運悪くやられるとムカつくでしょう？」

そんな会話をしていると、丸美のテレビからもポコン！と音がする。どうやら丸美も103を倒したらしい。丸美が、メールを再生すると。

『貴様も我が……うっ……やつ……おい……ごめんなさい』復活した瞬間に丸美に倒されるらしい。どうやら4回目で屈服したようだ。丸美おそるべし。

ライ丸姉妹のコンビプレイはすさまじく、建物内を移動しながらライ子が丸美を守りつつ、丸美が遠距離攻撃で敵を倒す。

そんな感じで、どれだけの点差があるのか確認してみると。

630対630。

なぜか同点である。

「……………(怒)」

「ブッチョとカツ子姉ちゃんやられすぎ！……と言ってる」

「面目ない」「面目ない」「ブッチョはまだしも、カツ子もへたくそだった。

影の薄いヨシオとマサミは、名前と同じでスコアも普通である。

そんな事を言っていると、時間切れのアナウンスが流れる。それと同時に画面に”サドンデス”と表示される。

時間切れ時に同点だと、時間が10分追加され、復活が無くなるのだ。



もう復活しないととなると、全員慎重になるが、カツ子とヨシオとマサミが一人ずつ倒して、自らも倒されていた。

後はライ丸姉妹で終わり、かと思いきや。一人倒した直後、丸美をかばったライ子が倒れ、そのまま丸美も倒れてしまった。

ライ丸姉妹を倒した敵は、駆けつけたブツチヨが倒したのだが。気がつくのと、ブツチヨと103の一騎打ちになっていた。

そこでブツチヨにボイスメールが届く。

『やはり貴様とは決着をつけねばならぬようだな。決闘を申し込む！』いや、すでに1対1なので決闘なのだが。

05

そんな流れで、なぜか画面ではブツチヨと103のキャラが、近距離で背中合わせで立っている。

どうやら西部劇風の決闘で勝負をつけようというらしい。

スリーカウントで同時に振り向き、撃ち合って立っていた方の勝ちである。

このゲームにカウントダウンの機能はないので、どうするのか相手のメールを待っている。

ライ丸達が指を三本出して。

「……………(笑)」

「スリー・ツー・ワン……と言ってる」と勝手にカウントダウンを始めた。

ブツチヨはそれにつられてしまい振り向き、ショットガンを放つ。「あ!」「あ!」「あ!」

本日の勝負は「HDKS」の勝利である。

勝手に振り向いただけではなく、ハンドガンに持ち換えるのを忘れてショットガンでとどめをさす。という卑怯極まり無い幕切れであつた。

案の定『き……貴様あ！卑怯な！ゆるさんぞおっ!』というメッ

セージが送られてくる。

ブッチョがショットガンを放ったと同時に来たメールでは『ゲム画面の下に表示されている時計が、残り5秒になったら開始だ!』と、なかなか燃えるシチュエーションを考えていたらしいので、怒りも倍増であるう。

で、次のメールでは『貴様を一生呪つてやる! いや、本官の拳銃の錆にしてくれるわ!』

「ん?」「ん?」「……………(?)」「ん?……………と云つてる」

どこかで聞いたしやべり方である。

「あれ?この変人つてもしかして……………」

「……………(汗)」

「ああ、ブッチョが前にヒドいあだ名付けて、それを気にいつてた変人警察官だね。……………と云つてる」

「なるほど、それでハンドガンしか使わない変人なんですな」「ブッチョが付けたあだ名は”変人”ではなく”殺人警官イレイサーのレイさん”であった。」

「……………(!)」

「それで103(イレイサー)か!つてどんだけ気に入ってんだよ!……………と云つてる」

「いや、なんか気に入ってくれてると、それはそれでちよつとうれしいような」

「あつ、私も”カツ子”つて結構気に入ってますよ?」「」

「……………(怒)」

「私たちの気に入らないけどな!……………と云つてる」

「俺のも気に入らねーよ!」

といつもの調子で、グダグダに終わっていくのであった。

#### 第4話了

## 第五話「勇者の条件」 01から03へ

### 第5話「勇者の条件」

01

ここは異世界ラグー。

青く広大な海と空には巨大なドラゴンが蹂躞し、大陸には様々な種族の生き物達が、生を謳歌する大いなる世界。

すべての物には魔法の力が宿り、すべての生き物には力が授けられる。

そんな世界のお話。

この世界では、近年一人の人間が世界を支配していた。

その人間の名は”ヨシオ”。

我々の世界から、この異世界に迷い込んだ特異点。

この調和のとれた異世界は、不意に入り込んだノイズで崩壊の危機に瀕していた。

この世界を崩壊から守るべく賢者は、4人の人間を、これもまた我々の世界から召還した。

勇者”丸美”

従者”ライ子”

使用人”カツ子”

奴隷”ブッチョ”である。

「つて、誰が奴隷じゃあっ！」

「……………（笑）」

「だって、あきらかにブッチョ役にたってないんだもん。……  
と言ってる」

確かに、先ほどの問題でもブッチョの回答は間違っていた。

そう、ここは異世界ではなく、愛知県南部にある”ラグーナス”という海をメインにしたテーマパークである。

ラグーナス自体は、海や海賊をモチーフにしているが、現在一行は前述の冒険アトラクションを体験中なのだ。

「よかった、てつきり話の方向転換で異世界に飛んだのかと思いました。でも、私はメイドの方がよかったです」

「カツ子！そのネタはやめろって！てか、ヨシオ出た！流行なのか？」設定では”高橋ヨシオ”だそうだ。どこかの類人猿とは違うのだろう、きつと。

で、毎度のことながら、なぜラグーナスに遊びに来ているかという。

それは、8月もお盆を過ぎた頃の、ライ丸姉妹にとっては夏休み終了間際の日曜日にさかのぼる。

02

天気の良い日曜日、エアコンの効いた部屋の中、例のゲームでレイさん一味をこてんぱんにした後の昼食時。

「ブッチョさん、今度の水曜日暇ですか？」

「なんだ？唐突に。別に水曜日はバイト休みだから暇だけど。いやだぞ、また変なのとゲームすんの」

「……………(汗)」

「そうだね、これ以上変な知り合い増やしたくないね。……と言ってる」

「いえ、実はこんな物をいただきました」とカツ子は四枚の紙切れを取り出す。

それをのぞき込むブッチョとライ丸姉妹。

「……………(?!)」

「あつ！ラグーナスのチケット！・・・と言ってる」

「ああ、テレビで宣伝やってたやつか」

みんなテレビを見ていた時に、ライ丸姉妹がそのCMにやけに食いついていたのを思い出す。

「・・・・・・・・・・（笑）」

「今、ラグーの勇者って体験型アトラクションやってるんだよ！液晶画面付きの剣を持って、謎を解いたりすると光の力を手に入れて、それを四つ集めて魔王を元の世界へ戻すってやつ！・・・と言ってる」と、ライ丸姉妹は興奮しているようだ。

「ほう、誰からもらったんだ？」

「え？ライ丸ちゃん達のご両親からです。いつものお礼だつて」

「は？お礼なのか？それって体のいい子守……げふう！」すかさずライ子のパンチが横つ腹に絶妙な角度で入る。

「・・・・・・・・・・（怒）」

「……」ライ子は訳さなかった。

「ん？何か言ったんじゃないのか？」

「お姉ちゃん殴っちゃだめだよ！って言われたんだよ！」

「げふう！」ライ子の渾身の蹴りがブツチヨの側頭部に決まる。

前にもこんなことがあったが、蹴りならいいのか？

「まあお小遣いもいただいているので、行きましようよお」「」

「ああ、別にイヤだとは言っていないぞ。水曜日だな」

「・・・・・・・・・・（嬉）」

「やったーっ！すごい楽しみ！もう眠れないかも！・・・と言ってる」ライ丸姉妹は手をとりあってピョンピョン飛び跳ねている。どうも両親の仕事が忙しく、夏休みにどこへも連れて行ってもらえなかったらしい。そんな両親のせめてもの罪滅ぼしに付き合つのも、ライ丸姉妹のこの喜びようを見られれば良しと言わざるをえない。

「とりあえずちゃんと寝ろよ！行く前にバテたら元も子もないぞ」

「それじゃ水曜日の朝8時ここに集合ってことで」

という訳で、一行はラグーナスへと向かうことになったのである。

03

で、現在ラグーナスで、ラグーの世界を冒険中の勇者御一行様である。

このアトラクションは、カウンターで受付を済ますと、液晶画面付きの剣を手渡され、スタンプリーパー形式でミニゲームなどをクリアすると、液晶画面に描かれた穴に光の玉が表示されるらしい。ミニゲームの場所は、液晶画面に映るテーマパークの地図に、次の場所が光る仕組みになっている。

ちなみに先ほどのミニゲームは図形クイズだった。ブツチョのせいで危うく不正解になるところだったが、ライ丸姉妹のおかげで正解しみごと最初の光の玉をゲットしたのである。

「で、次はどの辺りなんだ？」

丸美は、ライ子の持つ剣の液晶画面をのぞき込む。剣は丸美が持つには大きすぎるのだ。

「……………(覗)」

「えっと、次はおみやげ屋さんの横の辺りだね。……………と言って」

おみやげ屋さんの横には、ネズミともウサギともつかないオブジェが液晶パネルをにかけている。

「なになに？このネズミウサギの頭を、10秒以内に25回殴れる？この安直な名前のオブジェの横にはグローブが垂れ下がっている。」

「……………(笑)」

「よし、奴隷！行け！失敗したらゆるさん！……………と言ってる」

「奴隷言つな！とはいえ、さっきの名誉挽回せんとな」挽回する

名誉などなくせによくいうものである。

ブッチョはグローブをはめ、ファイティングポーズを決める。そして、液晶画面にタッチするとタイマーが表示され、カウントダウンをはじめめる。

「うおおおおおおおっ！」雄叫びをあげながらパンチを繰り返す。

「うおおおお……おおお……」残り4秒あたりで失速。

終了間際へロへロになりながらも10秒を乗り切る。

「ぜえ、ぜえ、ど、どうだ？、ぜえ、いっただろ」「体力無さ過ぎである。

画面を見ると、25回と表示されている。

「「ぎりぎりでしたねえ。でもこのゲームはクリアです」「

剣の液晶には、二つ目の光の玉が表示されている。

「………（笑）」

「二つ目の玉、ゲットだぜ！……と言ってる」

「ぜえ、ぜえ、その決めゼリフ大丈夫か？ぜえ、ぜえ」「お前の方が大丈夫か？と聞きたい。

こんな感じで、はしゃぎながら進行する一行であった。

次のミニゲームは、壁で光っているスイッチ12個を同時に押すというもので、これは四人で協力してクリア。

その次は、左右の壁と天井と床に開いた穴から、出てくるモグラ風モンスターを叩くという、ハイパーもぐらたたき。これも四人でできるように、ハンマーが四つ用意されていた。

これも四人でクリアしたのだが。相当な数のモグラ風モンスターが出てきて「ぜえ、ぜえ、これって一人じゃクリアできなくね？」というブツチョの疑問に同意するライ丸姉妹とカツ子。

他にやっている人を見てみると、どうやら参加人数に応じてノルマが変わるらしい。

で、なんだかんだで四つすべての光の玉を手にいれる。しかしなぜか液晶画面には、新たにもう一つの玉を入れるべき穴が表示されている。

「……………(?)」

「あれ？なんかやり忘れたっけ？…と云ってる」

「…ん？でも、地図にはヨシオの所に行けって出てますよ？」  
疑問は残りつつも、勇者様御一行は最終決戦へとむかうのであった。

このアトラクションの受付の横にある、ヨシオの城の扉を開けて中に入る。全員が中に入ると、扉が閉じられる。

「なんか暗くてやな感じだな」と漏らしていると。

ガガン！ドドドド！という轟音と共に、雷のようなエフェクトが発せられる。どうやら最終決戦の始まりのようだ。

『ハッハッハッ！おろかな人間共よ、ここで朽ち果てるがいい！』



とベタな台詞がスピーカーから流れる。と同時に前方に魔王っぽい人形が姿を現す。

「ぎゃあ！ヨシオ出た！けっこう怖ええ！」ブッチョはこの手のものが苦手らしい。

前方から、魔王の攻撃がきている体で、音と光にあわせて風まで出る気合いの入った演出である。

ライ丸姉妹を見ると、興奮最高潮らしく。二人で剣を握り合い、魔王の攻撃を跳ね返すように、必死で前に突き出している。

しばらくそうしていると、突然エフェクトが止まり、キラキラした音と共にスピーカーから声が聞こえる。

『私は光の玉の妖精。最後の隠された光の玉を取らないと、魔王は倒せないわ！これを使って！』という台詞と共に、魔王の人形の前のカゴにグローブが滑り込んでくる。

『それで魔王の頭を、10秒間に30回殴れば光の玉が手に入るわ！』

「またこれかい！ノルマ上がってるし！」

「お父さん！お願い！光の玉をとって！」と叫んだのは、どうやら丸美ではないライ子の言葉のようだ。

「？」なんの事だかわからないブッチョとカツ子が、ライ子を見ると一心不乱に力んで叫んでいる様子。

まあ、小学校の頃たまに先生を呼ぶときに「おかあさん！」とか言い間違っ奴がいたので、それと同じ間違いだろう。

それをカツ子も理解したようで、「ちよつとがんばらないといけませんね、お父さん？」と小声でからかう。

「よっしゃ、お父さんちよつと気合い入れていくかな」とグローブを装着しながら言う。ライ子には聞こえないように。

スピーカーから妖精の声でカウントダウンが始まる。

『スリー・ツー・ワン』

「ゴーツ！」と全員のかけ声と共に、魔王の右上のタイマーがカウントダウンされる。

「うおおおおおおおおおおおつ！」魔王にパンチを連打するブッチョ。

「うおおおおおおおおおつ！」残り4秒を切っても失速しない。

「うおおお……げほっ、げほっ！」むせながらもパンチを繰り返して、10秒をしのぎきる。

「ぜえ、ぜえ、どうじゃあっ！」

カウント表示は……” 35”

「よっしゃあ！」

という声と同時に、剣の液晶画面に最後の光の玉がはめ込まれる。『よくやったわ！これで魔王を倒せる！その剣を魔王の胸に突き刺すのよ！』となにやら物騒な事を言う妖精の声と共に、魔王の胸が開き剣を差し込む穴が出現する。

それを見て、ライ丸姉妹はあわてて剣を差し込みに行く。

そうして魔王にとどめをさすと『おのれ人間ども、この恨みはらさしておくべきか！』と言う呪いの言葉を残し、魔王人形はゴゴゴ！という音と共に下にさがって消えていった。

「やったー！」とライ丸姉妹は手をとりあってピョンピョン飛び跳ねている。

するとスピーカーからアナウンスが入る。

『おめでとうございます。これで終了でございます。グローブは受付までお持ちください。』

そうして受付でグローブを返すと、代わりにクリア特典として、剣の形をしたビニール風船二つを手渡され、大喜びのライ丸姉妹。こうして、ライ丸大満足のラグーの勇者は幕を閉じたのであった。

その後、昼食として大量の食料を胃の中に放り込み、一通りの乗

り物を堪能する。

「……………(笑)」

「ねえ、次あれ乗りたい!…と云ってる」

丸美が指さす先には、ボートに乗っている人たちがいた。

ここラグーナスは、テーマパーク全体を運河に見立てた川が流れていて、そこをボートに乗って遊覧することができるのである。

ボートは二人乗りだということなので、じゃんけんの結果、ブッチョ・ライ子ペアとカツ子・丸美ペアに分かれて乗ることになった。先にカツ子達が乗り、こちらに手を振って出発する。

次にブッチョ達の番だが、ライ子が先に乗ろうとすると係員の兄ちゃんが「あつ、ごめんねお父さんから乗ってもらえるかな?」と言うつ。

「お父さんちゃうわ!」速攻否定である。

テーマパークで着ぐるみという異常な光景も相まって、係員の兄ちゃんは愛想笑いしか出てこない。

「お前、そこは別に否定せんでもスルーでいいだろ」

「だって、ブッチョはお父さんじゃないもん」ライ子は拗ねたように言うつ。

「いや、でもさつき魔王と戦ってる時に俺のこと」お父さん”って呼んでたぞ”

「!!!!」どうやら恥ずかしいのだろう、ビクン!としたまま止まってしまった。

しかし次の瞬間「ぐはあっ!」ブッチョの横っ腹にライ子のパンチがつきささる。

「ぐだぐだ言っていないで早く乗れ!」と照れ隠しにしては少々過激である。

ボートに乗るとすぐにライ子の機嫌も治り、丸美達が見えると手を振りあつ。まあ、ボートは乗ってるだけでも楽しいのだが、できることと云ったら手を振るぐらいのものである。

「……………(笑)」

「あー気持ちいいね。・・・と言ってる」  
「このうだるような夏の暑さでも、水の上はそれなりに清々しかった。

06

あまりに平然としていて気がつかなかったが、ライ子はこの暑さの中着ぐるみで大丈夫なのだろうか。

「お前そんなの着てて、暑くないのか？」と聞いてみると。

「ん？ちよつとここに手え突っ込んでみ？」と言いながら、ブツチヨの手を首の辺りに引つ張り込む。

「！！！」驚いた事に、着ぐるみの中はヒンヤリ涼しかった。

「ふっふっふっ。冷水をホースで全身に循環させて、ホースの冷気で涼しくするシステムが装着されているのだよ」と得意げに言う。

「ずりい！心配して損した！」

はっはっはっ！と運河にライ子の高笑いが響き渡った。

「なにかずいぶん楽しそうでしたねえ」「ボートから降りると、カッ子はそんなことを言う。

「そっちは楽しくなかったのか？」

「いいえ、すっごい楽しかったですよ。ねーっ」「と丸美と顔をあわせ、楽しそうに一緒に首を傾げる。

「そいつはよかったな」と丸美の頭をなでてやる。

ライ子の方を見ると、なにか呆けているようだ。

「おい、大丈夫か？疲れたんか？」

「は？ぜんぜん大丈夫ですがなにか？」どうやらかなりキているようだ。

「そうですねえ、丸美ちゃんも少し目がすわってきましたし、休憩しましょうか？」

「やだ！」ライ子は即答で拒否。

「私はこんなところで力尽きる訳にはいかないんだ！」なにか格好いい事言っているが、しょせんは遊びたいだけである。

で、現在ライ丸姉妹は揃って熟睡している。

ライ子はブツチヨの背中、丸美はカツ子の胸で。

「つーか、あんな事言つといて、一回寝たらもう起きないんだもんな」

「「しょうがないですよ。二人ともかなりはしゃいでましたからねえ」」

「そうだな、なんかこいつらの親に悪いな。あんなに楽しそうな笑顔を俺らがもらっちゃまって。一人笑顔わかんない奴いるけどな」

「「……そうですね」」

そんな事を話しながら夕日を背に家路に着いたのだった。

## 07

結局、ライ丸姉妹は自宅に着くまで起きなかった。

ブツチヨはライ丸姉妹の自宅を見るのは二回目だが、前回は家の手前で別れたので、家族の人とは会っていない。

すでに時間は午後7時をまわってしまっているのだが、両親は帰ってきているのだろうか。

ライ丸姉妹の家は、築20年ほどのなんの変哲もない一軒家である。ブツチヨとカツ子はインターホンを鳴らす。

出てきたのは60代であろうかという初老の女性である。祖母であろうか。

「はい、なんでしょうか？」と女性はブツチヨとカツ子を訝しげに眺める。

「あ、えつと、ライ丸……じゃなくて」そういえば本名知らなかったな、と今更ながらに思う。

女性は、二人が抱きかかえている子供に気づき。

「あらあら、あなた達が、そう、ああ二人ともぐっすりね、悪かったわね」と言いながら「おじいさん、手伝ってちょうだい！」と家の中に向かって叫ぶ。

すると、女性より少し年の多そうな男性が奥から出てくる。

訝しげに見る男性に女性が耳打ちすると、納得した顔になり、女性と共にライ丸姉妹を受け取る。

「いつも悪いわねあなた達、これからもよろしく頼むわね」と言いながら家の中に消えていく。

少しの違和感と寂しさを覚えながらも、ブッチョとカツ子は帰りの道を進む。

「「なんだか寂しいですね」」

「ん？ああ、結構騒いだからな」

言葉少なに歩いていると、大通りの交差点にさしかかる。

「「あれ？ブッチョさんのアパートあっちじゃないんですか？」」

「は？お前一人で帰れんの？」と言いながらジヨスコでの一件を思い出す。

「「あつ、そうですね、無理でした。じゃあついでに何か食べて帰りませんか？お腹すいちゃった」」

「「そうだな、マグドでいいか？」」

「「いやいや、まだ金額に余裕ありますから違うものにしましょ？」」

結局二人はファミリーストランで食事をした後、カツ子をマンションまで送って別れるのだった。

その帰り道。ブッチョは今日の出来事を思いだし、今日起こった事は、夢か幻のようなそんな錯覚を覚えていた。

それはもしかしたら、テーマパークの持つ雰囲気のようなものなのか、そういった喧噪から抜けた後の寂しさからなのか解りかねていた。

しかし、確実に胸の中に生まれた感情があった。

こんな夢のような出来事がずっと続けばいいな、と。

第二章了

# 第一話「ゴージャグラー」 01から03

## 第三章「夢みるピエロ」

### 第一話「ゴージャグラー」

01

陽気な音楽と共にネズミやアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている。

どうやらここは東京ネズミランドらしい。いわずと知れた米国の人気ネズミアニメのテーマパークである。パーク内にある城の壁画には、本物のダイヤが埋め込まれているという噂があるが、ウチの近所の歩道橋の柱にも10円玉が埋め込まれているという噂がある。

「あれ？お父さんは？」いきなりであるが、いつもの土下座している父親が見あたらない。

「え？なに？これホラーなの？」子供一人で、雑踏の中にいるのは恐怖であろう。

「あれ？ブッチョさん、こんなところでなにしてるんですか？」と、なぜか見慣れた女が出てくる。

「ん？カツ子？なんで僕の夢に出てくるの？」

「……………(笑)」

「わあ！ネズミランドだ！てかブッチョ子供だ！……………と云ってる」

「さあ！夢の時間の始まりですよ！」

「え？わあ！ちよつと引つ張らないでっ！おとうさん！」

「……………(笑)」

「なに言ってるの？お前がお父さんだろ！……………と云ってる」



「は？いや、夢？始まり？」

ピーンポーンパーンポーン

訳が分からず戸惑っている、館内放送が入る。

<<あー、本日は東京ネズミーランドにお越しいただきまことにありがとうございます。まもなく営業開始いたします>>

ジリリリリリ…けたたましく営業開始のベルが鳴り響く。

ジリリリリリリリリリリリ「いやちょっとまって、お父さんジリリリカツ子？おいジリリリリてかライ丸おまジリリリリ…ちよつるさジリリリリリリ…るジリリリリリ」リリリリ

「うるさいって言ってんだろーがってんだろーが！」

ガシャン！と目覚まし時計が壁に激突する。

しかし、ジリリリリ！とまだ鳴り続けている。

どうやら枕元に置いてあった目覚まし時計はダミーのようだ。もう壊さないようにとよく考えたものだが、それに引っかかっているところがまだまだである。

「くっ、なんだか昨日の自分に負けた気がするぜ」と本物の目覚ましを止めながら愚痴る。

02

今回は、夏も終わり少しずつ秋の足音が聞こえてくるようなこないような時期のお話。

ブッチョはいつものように、コンビニでバイトに勤しんでいた。

そう、驚いたことにバイトが続いているのだ。

どうやらブッチョにも自尊心があったらしく、カツ子やライ丸姉妹が立ち寄ることがあるため、真面目に仕事を覚えたようだった。

今はちよつど昼時を少しまわったところである。昼の忙しさがひと段落して、交代で昼食を食べる時間帯である。今はブッチョ一人

で店番をしている。

現在店内のお客さんは二人。その内の一人はこのコンビニの上得意のカッ子である。カッ子はいつものように、大量の商品をカゴ一杯に入れてレジにやってくる。

「お前こんな菓子和か食うと太るぞ」と、いつもの無表情で、商品のバーコードを読み込みながら告げると。

「なに言ってるんですかあ！ほとんどブッチョさんとライ丸ちゃん達が食べちゃうじゃないですか！」「と、相変わらず目を合わせず、表情をこころ変えながらしゃべる。

「あれ？そうだっけ？今度から控えるよ」

「いや、別に余らせてもしょうがないし、ライ丸ちゃん達も飯残さず食べるのでいいですけど」「と言いながら、いつものように携帯電話で支払いを済ませる。

「じゃあまたウチで待ってますね」「と言い残しコンビニを後にする。

カッ子を見送った後に、次の客が精算を済ませにやってくる。

ブッチョはいつものように、なにを間違えることなく商品のバーコードを読んでいく。

「はい、全部で1,543円になります」

と言ったところで、その客が「ちよつと待った」と止める。

「何か違いました？」クレーマーか？と思いながらブッチョが聞く。

「いや、別に間違っちゃいないが、仮にも客商売なんだから、あんたもうちよつと愛想よくした方がいいぜ」と、もつともなご忠告面倒くせえと思いつながら、自分の病気を説明すると「えっ？マジ？うわあすまん、またやる気のない最近の若者かと思っちゃまって」と恐縮しながら謝罪する。

「いや、別にいいつすよ。なれてるんで」と言つと。

「わっ、ほんとにしゃべりのニュアンスと表情が連動してないん

だな」と珍しそうにブッチョを見る。

その客は、年齢はブッチョより少し上であろうか、長身で筋肉の引き締まった男で、カツ子以上に表情をこころ変えて喋る。カツ子と違い自然な感じに表情を変えるので、人当たりの良さそうな印象を受ける。

そんなやりとりをしながら、男は現金で精算を済ませます。

男は帰り際に「あんた面白いよ！俺あさってそのジョスコでシヨをやるんだけど、よかったら見に来てくれよ」とジャグリングシヨと書かれたビラを渡される。

「俺は”テンホー”って芸名だけど、あんたは……ブッチョだっけ？さっきの彼女が呼んでたけど、変なあだ名だな。シヨは無料だから彼女と一緒にきてくれよ」と言い残し去っていった。

別に彼女じゃねえよ。というツッコミを入れる間もなく、去って行った客に渡されたビラを見ながら「みんなで行ってみるか」とつぶやいた。

03

「……………(笑)」

「……………」いきなりで悪いが、ライ子は訳さない。

「おい、あさっての土曜日行けるかって聞いただけなのに、なんで訳さないんだ？」

「土曜日は大丈夫だよお父さん。」って言ったんだよ！誰だ！ばらした奴は！」とライ子は叫びながらブッチョの横っ腹にパンチが突き刺さる「ぐぼはあ！」

「あつ、丸美ちゃんだけ知らないのは不公平だと思って、さっき言っちゃいましたあ」「あの時、丸美も必死で気がつかなかったらしい。」

「ってなぜに今?!ラグーナス行ってからどんだけ経ってんだよ!」約一月ぐらいだろうか。

「「いやー、ちょっと思いついちゃったもので」「  
「ぎゃふん！もうこのネタやめてください」「ライ子は撃沈された  
模様。」

と、こんな感じで、いつもおしゃれでかわいい無口な妹と、着ぐるみを着た姉の通訳という奇妙な姉妹も合流して、カツ子の家は賑わっていた。

結局全員あさっては予定が無いとのことなので、四人揃って行くことになったのである。

「……………(?)」

「で、ジャグリングってなに?……………と云ってる」

「ん？アレだろ？火の着いた棒みたいなのを回して、踊ったりするやつ」

「それはファイヤーダンスですつ。ジャグリングっていうのは、すごい数のお手玉したり、いろんな道具を使ってすごい技を見せてくれるショーですよ」「」

「……………(笑)」

「そのテンホーって人もすごい技を持ってるんだね。ブッチョと違つて……………と云ってる」

「悪かったな、なにも持つてなくて！」

「でもそれは楽しみですねえ。私も実際見たことないですから」「そりゃあ引きこもっていれば見る機会などないだろう。」

「……………(笑)」

「いざジャグリングショーへ!……………と云ってる」

「あさっただけだな！」

というわけで一行は、土曜日のジャグリングショーを見に行くことになったのである。

そしてジャグリングショー当日の土曜日である。

早朝カツ子の家に集まった一行は、軽く朝食をすまし、ジヨスコへ出発する事になった。

ショーは午前11時30分からなのだが、前回のウドレンジャーの件もあり、早めに出発することにする。

しかし、なぜかジヨスコに到着したのが11時45分になってしまった。

その内訳は、

カツ子が迷子になること3回。

ライ子が子供に捕まること2回。

カツ子が忘れ物を取りに戻ることに2回。

なんと前回よりもひどくなっているという始末。どうやらカツ子は外に出ることに慣れてきたのと、ブツチョと携帯電話で連絡が取れる安心感で、迷子の質が向上しているという迷惑さ。最近良くなっていたので、手を繋ぐのを忘れていたのがいけなかった。

中に入ってみると案の定会場は超満員で、すでに一人目が終了したところらしい。このショーは四人出るらしいのだが、名前まではピラにのっていない。テンホー氏はもう終わってしまったかな？と思っていると『はい、一人目のショウさんでした。拍手ーっ！』と進行役のお姉さんがアナウンスすると、会場から拍手がわき起こる。「どうやら間にあっただみたいだな」とライ丸姉妹でも見られる場所を確保しながら言う。

「……………(怒)」

「もう、カツ子姉ちゃん迷子になりすぎ！てか手え繋いでないと迷子になるって風船か？……………と言ってる」

「「面目ない」」

『ではつぎはケン横井さんの登場です!』

と言うアナウンスと同時に拍手がわき起こり、BGMのユーロビートと共に、おしゃれなイケメンがスーツケースを持って登場する。まず、スーツケースを開けて、赤いお手玉を山のように取り出す。そのお手玉を、立てたスーツケースの上へ並べたかと思うと、ひとつずつ上に投げだす。すると、あれよというまに10個もあるうかというお手玉が宙を舞続ける。実際はお手玉を受けては宙に上げているのだが、玉が浮かんでいるような錯覚に陥ってしまう。

そこで会場から拍手が出だすが、足まで使い始めたので「おおーっ!」と感嘆の声があがる。

「……(驚)」

「わああ、すごい!……と言ってる」ライ丸姉妹も釘付けである。

一通りお手玉の芸が終わると、次にスーツケースから四つの木の箱を取り出す。

四つの箱の両端を持って持ち上げると、一瞬で中に挟まれた箱と外側の箱を入れ替える。それはまるで箱がそこに浮かんでいるかのように見える。その後も、箱から手を離して体を一回転してから箱をつかんだり、箱を縦に並べて芸をしたりと拍手と感嘆の声が鳴りやまなかった。

05

『はい、二人目のケン横井さんでした。拍手ーっ!』というお姉さんのアナウンスで二人目のショーが終了する。

「いやー、すごかったな、なんか無重力状態みたいに浮かんで見えたな!」

「……(驚)」

「いやもつびっくりだよ!あんなに簡単にあんな事できちゃうな

んですごいね。・・・と言ってる」と興奮さめやらぬ様子。

「「そうですね、あれだけ簡単にやってるの見てると、なんだかできそうな気がしてきますね」と絶対にできそうにもない奴が言う。」

ほかの観客も一様に同じ様な意見を漏らしている。すると、進行役のお姉さんが出てきてこうアナウンスする。

『はい、次は少し趣向を凝らした方の登場です。』クラウン テンホー”！』

と、目当ての名前がアナウンスされる。

「ん？クラウン？」と、疑問に思っている。

気の抜けたBGMに乗って登場したのは、ダブダブの黄色い服に大きな帽子、鼻に大きな赤い玉を付けた道化師だった。

「って、ピエロかい！」と思わずツッコむ。

ステージ横から登場したクラウンテンホーは、ステージ中央あたりまで行くと見えない壁にぶつかる。どうやらパントマイムが始まるようだ、と思いきや、突然壁を突き破り前に一回転してペタンと尻餅をつく。そこで会場からどつと笑いが起こる。

そんな失敗を無かった体で立ち上がると、ステージ横に引き返し、大きなつぎはぎだらけのバッグを抱えて戻ってくる。バッグの中から取り出したのは、先ほどのジャグラーがやっていた赤いお手玉と同じもので、クラウンテンホーも器用に10個もお手玉を宙に舞わせる。

それを見た観客の「おおっ！」という感嘆の声もつかの間、舞っていたお手玉が一つずつ頭に当たって落ちていく。感嘆の声が「あー」という声に変わったところで、最後のお手玉が頭に当たると同時にズボンが下がり、白地に赤の水玉模様のデカパンが現れ、会場が爆笑の渦に巻き込まれる。

続いてクラウンテンホーは、バッグの中から長風船の束を取り出

す。その中から一本を取り出し、息を吹き込み風船を膨らます。全部膨らんだ後も息を入れ続け、観客の中から「割れる割れる」「キヤー」という声が出たかと思うと案の定風船はパン！という音を立てて割れてしまった。

割れてしまった風船をつまみながら首を傾げ、もう一本を膨らまし始める。するとまた空気を入れすぎてパンパンになった風船を見て「入れすぎ入れすぎ」「割れちゃうよー」など、先ほどよりも多くの悲鳴があがると、やはりパン！と割れてしまう。会場全体から「あーあ」と声が漏れると、クラウンテンホーはポケットから小型の空気入れを取り出し、それで割らずに空気を入れることに成功、その風船をかかげ「どうだ！」とばかりに胸をはり、会場から笑いと拍手が起こる。

そこでブツチョは奇妙な感覚に陥る。

さきほどまでの会場の雰囲気とはあきらかに違っている事に気づく。先ほどのジャグリングのとき、会場はすごい芸を見た感動の空気に満たされていたが、今の会場は、なんと言ったらいいのか、角の取れたような丸い雰囲気に含まれていた。

その後、風船でプードルやキリン、花などを作っては会場の子供にプレゼントして「ありがとー」と言われたり言わせたりしていた。そうすると、横から進行役のお姉さんが出てきて、クラウンテンホーに耳打ちすると、大げさに「もう時間なの？」というリアクションをする。すると会場から「えーっ」と言う声があがるが、残念がりながら退場しようとする、入場時の様に見えない壁にぶつかると、いくら押してみても進めないが、何かに気づいたと思ったら、ドアがあつたらしく取っ手を引いてドアを開き、今度は笑顔で手を振り退場する。こうしてクラウンテンホーのショーは、笑いと拍手によって幕を閉じたのだった。



「……………(笑)」

「あははは、すっごい面白かったね! ……と言ってる」

「「そうですねえ、すごく楽しいショーでしたね」「とこちらも満足げだ。」

「そうだな、最初はどうかと思ったが、良かったな」

その後、トリをつとめたのは”ミスター大暮”というマジックとジャグリングを融合した、エンターテイメントと言うにふさわしいショーだった。クラウンテンホーが作った会場の空気をつなぎにして、最高に盛り上がったステージだったのだが、紹介できないのが非常に口惜しい。

06

ステージが終わった後、ちょうど片付けを終えたテンホー氏を見する。向こうもこちらに気づき、スタッフにあいさつを済まし、こちらへ向かってくる。

「よお、見に来てくれたんだな。どうだった? って、あんた子供いたんか?!」と、いきなり質問をダブルでいただく。

「……………(怒)」

「ブッチョの子供達うわ! でも、あんたのピエロおもしろかったぞ! ……と言ってる」

「「すいません、私たちブッチョさんの友達なんです。ショーとつても楽しかったです」と、三人ともいつもの調子であいさつする。

「……………」いきなり不思議人間が三人も増え、絶句するテンホー氏。

「いや、すいません。こいつらいつもこんな調子で」

「……………(怒)」

「こんな調子ってなんじゃコラ! お前もそんな調子じゃねえか! ……と言ってる」

「あわわ、そんなケンカしちゃだめですよ」

と言った所で「ぷっ！あははははは！ブッチョくん、やつぱあんな面白いよ！いや、ほんとに面白い！」と、テンホー氏はいきなり笑い出す。

「いや、失敬。俺はクラウンをやってるテンホーって言います」と、うやうやしく頭を下げる。

「……………(笑)」

「こつちがライオンをやってるライ子姉ちゃん、私がその妹をやってる丸美です。……と言ってる」

「私は、引きこもり……は最近卒業気味なので、ゲーマーをやっているカツ子です」

「で、あんたがコンビニバイトのブッチョくんだね。で、ブッチョくんはどうだった？俺のステージ見て」

「え？あ、はい、えっと」ブッチョはいきなり振られたので焦る。「…………俺頭悪いんで、どう言ったらいいか分からないけど、なんかこう一瞬で会場の雰囲気丸くっていうか、柔らかくなったんで、すごいなって」ほんとに何を言っているか分からない。

それを聞いてテンホー氏は「ふーん。やつぱブッチョくん面白いわ。今日のステージに興味を持ったんだら…………ってちよつと待ってて」と言っつてバッグの中を探つてメモ用紙とペン、そして携帯電話を取り出し、携帯の画面を見ながらメモを取る。

「よし、今度このメモの所でやるから、興味があったら来てよ。ただし、悪いけどこれはブッチョくん一人で来てくれ」と言っつてブッチョにメモを手渡す。そこには、ある施設の名前と住所、そしてテンホー氏の携帯電話の番号が書いてあった。

「え？ここつて？」メモに記された施設の名前を見て、ブッチョは戸惑う。

「あはは、来てからの楽しみつてとこだな！まあ来なくても問題ないから、気が向いたらきてくれ。じゃあブッチョくん、カツ子さん、ライ子ちゃん、丸美ちゃん、今日はありがとな！」と言っつて、

テンホー氏は満面の笑顔で去っていった。

「……………(笑)」

「テンホー面白い奴だな。……と言ってる」

「「そうですねえ、シヨ一の最中は喋らなかつたですけど、喋っても同じ感じですね」「」

「そうだな」

と、今までに会った事のない人種との交流に、戸惑い、メモをにぎりしめるブツチヨであった。

第1話了

## 第二話「クラウン・クランケ・クラウン」01と02

第2話「クラウン・クランケ・クラウン」

01

なぜかブッチョは病院の中にいる。

カツ子やライ丸姉妹が入院しているわけではない。

ましてや自分に悪い所など見あたらない。

どうして、と問われても自分でも分からない。

かのテンホー氏に渡された、メモの施設は確かにここなのだ。

”豊多市 厚生病院”ブッチョの住む愛知県豊多市にある大きな病院である。市民病院かと思いきや、実はそうではないという市民から信頼のある病院なのだ。

ブッチョがいるのは、その小児科病棟である。

小児病棟など入る機会はないのだが、入ってみるとそこはやはり病院であると実感させられる。病棟自体は、廊下の壁に子供の好きそうな絵が貼ってあったりして、幼稚園のような感じをだしている。しかし、病院特有のにおいのする廊下には、遊んでいる子供もいるものの、その手には点滴のホースが繋がっていたり、頭に白いネットをかぶったりしている。

とりあえずブッチョは、ナースセンターに行ってみる。

「あー、すいませんブッチョといいますが」  
と居心地悪そうに女性看護師に声をかける。

すると看護師は、一瞬怪訝な顔をしたかと思うと、思い出したように「ああ、テンホーさんの助手の方ね。伺ってます、こちらへ来てください」とナースセンターの中へ招き入れられる。

助手ってなんだ？と思いつつもブッチョはナースに聞いてみる  
「今日は何かイベントかなにかやるんですか？」

というブッチョの問いに、女性看護師が怪訝な顔をした時ナース  
センターの外から声が聞こえる。

「おっ！ブッチョくん来てくれたのか！うん、あんたなら来てく  
れると思ったよ」と、場違いな元気な声で話す。

「っていつか助手って何なんスか？」とブッチョが言うと。

「まあまあ、今日は社会見学つてことよろしく」とテンホー氏  
それを聞いた女性看護師は「ちよつと、大丈夫なんですか？なに  
かあったりしたら……」

「大丈夫ですよ、ほんとにただの助手ですし。ささ、早く打ち合  
わせやつちやいましょう」さらに不安にさせるやりとりである。

なにやらテンホー氏は、看護師と患者の体調などを確認してい  
るようだ。テンホー氏はこの病院の医者なのであるうか。と思つて  
いると。

「じゃあ着替えて30分後に開始つてことで。じゃあブッチョく  
ん一緒に来てくれ」と言われたとおりについていく。

02

そしてブッチョはなぜかピエロの格好をしている。

「ぎゃあ！俺なんでこんな格好してんだ?!」

ブッチョはしま模様の大きなツナギを着て、大きな靴と奇妙な形  
の帽子をかぶり、真っ白に塗られた顔には笑っているようなメイク  
が施され、その真ん中には赤いボールの様な鼻が取り付けてある。  
前に立っているテンホー氏は、この前のショーとおなじ格好をして  
いるので、それと比べると少々地味な印象を受ける。

「とりあえず、何もなくていいから、指示に従つてついてきて  
じゃ、行こうか」と言うが早いかテンホー氏は歩き出す。

「え？はい」とブッチョは言われるままについていく。

小児病棟に入ったクラウンテンホーは、目の前の病室をこっそりのぞく。

病室には四つのベッドがあり、それぞれに点滴をしたり、鼻に管が入ったりした子供が横たわっている。クラウンテンホーは、大きな動きでこっそり病室に入ると、無表情のまま携帯ゲーム機をプレイしていた男の子が気づき、表情がぱあつ！と明るくなり「あつ！テンホーくんだ！」と叫ぶ声をかわきりに、病室の中がざわめき立つ。

「あちゃあ、みつかつちやつたか！ゲームやってるからいたずらしようと思ったのに」と、くやしがる。テンホーくんが男の子に「ゲーム機がベッドから落っこつちやいそだよ」と言うと、男の子はゲーム機を見るためにこちらに背を向ける、するとテンホーくんは男の子の背中にタッチする。すると男の子は「あーっ！今なにか付けたでしょー！」と、一生懸命に背中の方を見ようとしたり、手をまわしたりしている。するとテンホーくんは男の子のおなかにもタッチする。男の子がおなかを見ると、そこには大きなシールが貼ってあった「もーっ、やめてよー」とうれしそうに言うと、ポン！と頭にもシールが貼られる。「やめてー」と言っている間に、男の子の腕や足にもシールが貼られていく。

その後、はがしたシールを全ておなかに貼ったところで、テンホーくんは「ばいばい」と手を振り、次の子の所に向かう。

そんな感じで、クラウンテンホーは順番に子供のベッドをまわつては、子供にいたずらをしたり一緒に遊んだりしていった。

状態のすぐれない子供には無理に絡まず、2、3言葉をかわした程度で風船などを置いて去っていく。そんな風にすべての病室をまわっていくのだった。

終盤になるとクラウンテンホーは子供たちを引き連れ、看護師にまでいたずらを仕掛け、看護師に叱られる始末。まさにやりたい放題。

その光景をぼんやり眺めていたブッチョは、不意に服を引つ張られる。引つ張られた方に目をやると、そこには最初にシールを貼られていた男の子が立っていた。その男の子はブッチョに「ねえねえ、君は何かやったりしないの？」と声をかける。

「ん？俺はなににもできないから、ここでもなにもせず立ってんだよ」と言う。

「ふーん。君のお名前何て言うの？」と聞いてくる。

「えっと、俺の名前はブッチョだ」と答えると。

「そっか、君はピエロのブッチョくんだね」などと笑いながら言う。それを聞いてブッチョは、今の自分の格好を思い出す。

気がつくと、ブッチョは周りの子供たちに好奇の目で見られていた。「いやいや、マジで何にもできないから」と、なにやら子供たちの視線は、ブッチョの背中に集まっているようだ。

「はっ！もしかして、背中に何か貼られてる？！」と背中の方を見ようとしながら言うと、周りの子供たちから「あはは」と笑い声があがる。

そんなこんなで、最後は子供たちに囲まれていたブッチョは、クラウンテンホーに促され帰る事になる。

帰り際子供たちが「テンホーくん、ブッチョくん、またねー」と手を振ってきたので、それに答えて手を振り返し、終了したのだ。

その後、着替えた二人はナースステーションで報告を済ませ、病院を後にする。

ブッチョはテンホー氏の車で送ってもらつことになり、車に乗り込む。

そして帰りの道中、ブッチョは先ほど小児病棟で見てきた事の意味を分かりかねていた。

するとテンホー氏が「ブッチョくんは、”笑いの力”ってもんを知ってるか？」

「いや、わからないです」と言うとテンホー氏は「さっきの子供達は、病状の重い、軽い、の差はあるにしても、一日のほとんどをベッドの上で過ごす入院患者なんだ。それを何週間、何ヶ月、何年と続けている子もいるんだ。ブッチョくん想像がつくかい？」

「いえ、入院したことがないので。でも、退屈で面白く無いのは分かります」

「そう、退屈でつまらない、ましてや病気で苦しんでいる、そんな子供を見て親だつて気が滅入ってくるだろ？子供つて、親のそういう所に敏感だからさらに面白くない」と、運転しながらテンホー氏は肩をすくめる。

「人間の体つて不思議なもんで、つまらないことが続くのに耐えられないようにできてるんだよね。免疫力が落ちたり、精神的には鬱になったりさ。だからみんな遊びに出かけるだろ？」

ブッチョはうなづく。

「でも、今日のあの子たちのような入院患者は遊びに出たくても外に出られないんだ。逃げ場がないのさ、あの子たちも、その親もさ」

「で、その昔。だったら、楽しさ、笑い、の方から遊びに行つち



やえばいいじゃん。と思いついたお医者さんがいたんだ。”パッチ・アダムス”って聞いたことないか？”

昔そんなタイトルの映画があったような気がする。

「そのアダムス医師は、精神面からも治療するため自分がクラウンに扮し、入院中の子供に笑いを与えたんだ」

「毎日つらそうにしている子供から出た笑顔は、その親にも笑顔を取り戻させる」

ブッチョはラグーナスでの事を思い出す。ライ丸姉妹の楽しそうな姿を見て、自分やカツ子が癒されたのも事実だ。

「世の中には、楽しい状態を継続させて病気が治ってしまったという話もあるくらいだ」

「そう、今日ブッチョくんに体験してもらったのは、そのアダムス医師が始めた取り組み”ホスピタルクラウン”とか”クリニクラウン”と呼ばれているものなんだ」

そこまで聞いて、ブッチョはテンホー氏にたずねる。

「なんでそれを俺に見せたんですか？」

「ん？ブッチョくんにはクラウンとしての才能がありそうだったからさ」

才能？なんの取り柄もないブッチョには幻のような単語である。

「ブッチョくんは、大人とか子供とか関係なく真正面から接するだろ？子供は大人のそういう所すぐに見抜くからさ、だからみんな寄ってきたる？」

いまいち言っている事が理解できない。

そんなブッチョの様子を見ながらテンホー氏は続けて言う。

「それに、ブッチョくん自身がそういう世界、アダムス医師が思っている世界を、望んでいるように見えたからさ」

ブッチョは世界を望んだ事などない。テンホー氏の自分への評価は理解できないが、カツ子やライ丸姉妹と出会ってからの日々と、

今日見せられた世界が、ぼんやりと虚構と現実の狭間で揺れているような感覚を覚えるのであった。

04

ほどなくしてテンホー氏の車は、ブッチョのアパートに到着する。「ありがとうございます」とブッチョはお礼を言いながら車を降りる。

テンホー氏は去り際、ウィンドウを開けて「ブッチョくん、今日は特別だったけど、興味があつたら連絡してくれ。俺がキミをクラウンにしてあげるから」と笑いながら車を走らせて行った。

ブッチョは、その後しばらく部屋の中でぼんやりと考えをめぐらしていたのだが、考えがまとまらない内にふと思い出す。

「そっぴや、今日は俺が飯を作る番だったな」

ブッチョは呆けながらスーパーで買い物を買ませ、カツ子のマンションへ向かっていた。その途中で、見慣れた二人を見つける。

「よお、今から出勤か？」とその二人に声を掛けると。

「……………(笑)」

「あつ、ブッチョだ！今日のご飯は何作んの？……………と云ってる」とライ丸姉妹はいつものネタで答える。

「ん？あれ？俺何作るうと思つてたんだっけ？」といいながら買い物袋の中身を確認する。

「……………(?)」

「は？ブッチョこれで何作る気だ？……………と云つてる」

買い物袋の中には、さばの切り身、板チョコ三枚、キウイ、モロヘイヤ、ポテトチップ、そして豆板醤と、統一性のない食材が放り込まれていた。

「お？なんじゃこりゃ、超うけるwww」と云つと。

「……………(怒)」

「超うける、じゃねえよ！たまにはまともな物作りやがれ！……………」

と言ってる」

そんな調子で、カツ子のマンションまでの道中、ライ丸姉妹に説教されるブッチョであった。

で、現在カツ子を含む四人の前には、さばの豆板醤煮という創作料理と、モロヘイヤのポテトチップ和え、そしてデザートのカウイ、板チョコは、ブッチョがさばの煮物の鍋に投入しようとした直前三人が阻止し、そのままいただいたのだった。ついでに白飯の上には、砕かれたポテトチップスが乗り、醤油が数滴たらされている。

「こっ、こんなふざけた料理なのにおいしいなんて、なんだかくやしいですっ！」

「……………(驚)」

「さばの臭みがまったく無い！もしかしたらチョコ入ってもおいしかったのか？……と言ってる」と言いながらバクバク食べる。

「はっはっはっ！食材を無駄にしないのが、正しい貧乏人の流儀というものなのだよ！」ブッチョの料理は、味付けこそ感覚に頼ったデタラメだが、下ごしらえは完璧だった。

いつものように騒がしい食事風景、時にはケンカもするが笑いの絶えない空間。

健常者とは言いがたい四人であるが、それなりに楽しいのだと思う。

しかし楽しさという点だけで言えば、ラグーナスでの一日の比ではない。

だが今日見てきた子供達の笑顔は、ラグーナスでのライ丸姉妹の笑顔に匹敵するものであった。

短い時間でも子供たちからその笑顔を引き出せるクラウンテンホーは、正直すごいと思う。

ブッチョは、自分にもそんな事ができるのであるうか。と少しだけ胸が高鳴るのを感じる。

そんな事を考えていると、食べ終わった食器を食洗機にセットしながらカツ子が「何か楽しい事があったんですか?」「と聞いてくる。

ブッチョは、テレビを見て笑っているライ丸姉妹を見ながら「別に何もねえよ。今だって楽しいだろ?」と言う。

「「そうですねえ」「とカツ子もライ丸姉妹を見ながら返事をかえす。

確かに、苦しい事、悲しい事、つらい事、そんな事も忘れてしまふ”笑い”を作れるとしたら、どれほど素敵な事だろう。

そう思ったブッチョがテンホー氏に連絡するのに、それほど日数はかからなかった。

## 第二話了

03と04です。(後書き)

参考文献および参考サイト

『ホスピタルクラウン 病院に笑いを届ける道化師』 大棟耕介著  
サンクチュアリ出版

『NPO法人日本ホスピタルクラウン協会』 協会サイト

この物語はフィクションです。物語に登場する人物、団体、設定はすべて架空のものです。

### 第三話「しゅわしゅわソーダ」01から03

#### 第三話「しゅわしゅわソーダ」

01

これは、師匠が走ろうか走るまいかと迷ってしまっほどの、11月も終盤の頃のお話。

こちらの師匠、クラウンテンホーの地獄の特訓で、クラウン街道ばく進中のブッチョである。

初めてホスピタルクラウンの存在を知ったあの日から数日後。テンホー氏に、ホスピタルクラウンになりたいと連絡したその日の夕方に、テンホー氏は満面の笑みを浮かべながらブッチョの前に現れる。

「あっはっはっ！さすがブッチョくん！連絡くれると信じていたよ！」

「さっそくだけど、ブッチョくん、ジヨスコでのステージの時”ピエロかよ！”って叫んだろ？」地獄耳である。

「厳密に言くと”ピエロ”っていうのは昔の演劇の役柄の一つでしかないんだ。日本では白塗りの道化師っていうとピエロが有名だから、クラウン”ピエロ”って誤解されてるんだよ。まあ、そんなことは些細なことだけだね」

と、興奮したテンホー氏がまくし立てるように言ったところで、ブッチョが口を開く。

「すみませんテンホーさん、後ろでお客様がお待ちです」

テンホー氏の後ろには、三人ほどのレジ待ちの客が待っていた。ブッチョはバイト中であつた。

「いやいや、みなさんすみません。ごめんなさい」と言いながら、

こそそと店の隅に逃げる。

後で聞いたことなのだが、ピエロというのは、目の下に涙が書いてあるキャラクターで、悲しみを抱えながら人を笑わせる役柄なのだそうだ。

で、改めて初めてメイクした時に、ブッチョはなんとなくピエロメイクになると。

「ふーん。そうだな、ブッチョくんらしいよ」と言われてしまった。

そんな感じでテンホー氏は、ブッチョにジャグリングやバルーンアートを教えたり、ブッチョのバイトの合間に無理矢理ステージに上がせたりと、ホスピタルクラウンになるための基礎をたたき込んでいった。

そのかいもあって、ブッチョは病院での活動もするようになってきたのであった。

02

そんなある日曜日の朝のカッ子邸。

ホスピタルクラウンの活動は平日が基本で、クラウンのステージの仕事は、ブッチョはストリートパフォーマンスなどしかやらされないのです、土日の日中は暇なのである。

朝食を済ました四人は、揃って子供向け番組を視聴中である。

「……………(笑)」

「ウドレンジャーも、さすがにあと三ヶ月で終わりだから、展開がやばいね! ……」と言ってる」

「まさかメンバーが一人ずつ超エネルギーに取り込まれるとは、肉体をなくしたウドレンジャー達はどうなっちゃうんでしょう」「と、相変わらず憂鬱な話が繰り返り広げられているようだ。」

ちょうど番組が終わったところで、ブッチョは丸美を呼ぶ。

「……………(?)」

「なんか用?…と云ってる」

するとブッチョは、丸美に向かって野球のブロックサインの様な妙な動きをした。

丸美は、訳がわからず首をかしげる。ライ子は気のせいかビクッ!としたようだ。

「あれ?丸美わかんねえの?おつかしいな?このあいだ病院の子供が、耳聞こえない子はわかるって云って教えてくれたのに」

「……………(怒)」と丸美が何か言ったのだが、ライ子は訳すかわりに「……………っ!ブッチョこっちきて!」と云って、奥の部屋へブッチョを引っ張っていく。カツ子と丸美には「二人はここで待ってて!」と言い残していく。

ライ子はブッチョを寝室まで連れていき、バタン!とドアを閉める。あの一件以来寝室はきれいにしているらしい。

訳がわからないブッチョは「おい!いきなりなんだってんだよ!」と言つと。

「ダメ!!絶対ダメなのブッチョ!!それだけはやめて!!お願い!!」とすごい剣幕で止められる。

「は?どういふことだよ!説明しろ!」

「ダメなの!なにも聞かずにやめて!」と食い下がる。

ブッチョはしばらく震えるライ子を見てから口を開く。

「あのなあ、お前が何で丸美の通訳のまねごとなんかやってるかは知らねえけどよ」

ライ子はうつむいて動かない。

「俺はお前らと出会ってからの半年とちょっと、丸美の通訳じゃないお前とほとんど喋ってねえ!」

「"これ"はお前と会話するための足がかりなんだよ。ちゃんと

"お前の声"を聞かせてくれよ!」とライ子の肩をつかんで云つ。

「!!!!」ライ子はブッチョを見つめる。

しばらくの沈黙の後ライ子は口を開く。



「……わかった……でも、”これ”は私が教える」と言ったライ子は、寝室のドアを開けて出ていき、ブッチョもそれに続く。

リビングに戻ったライ子とブッチョを、丸美とカツ子は心配そうに迎える。

「あははは、ごめん、なんでもない。ちょっと休憩したら、さつきブッチョがやったのの説明するね」とライ子は手を顔の前でパタさせながら、冷蔵庫に飲み物を探しに行く。

03

全員が飲み物を手にし、テレビから流れる女の子向けアニメが終了したところで、ライ子が説明しだす。

「えー、さつきブッチョがやった変な行動は、別に気が狂った訳ではなく」と言ったところで「気が狂った言うな!」というブッチョのヤジが入る。

「ぐおっ!」ライ子はブッチョに蹴りを入れながら「気が狂った人はほつといて。あれは”手話”といって、耳の聞こえない人の為の会話手段です」と言う。

「あつ、テレビでもやってる人見ますね」「某国営放送でしか見たことはないが。

ライ子はどうやら手話がある程度勉強していたらしく、基本だけはマスターしているようだ。

ライ子の説明では、手話には、大きく分けて片手だけで表現する平仮名、数字、アルファベットと、両手や体の部分を使い単語を表現する二つの表現方法があるとのこと。

とりあえず、50音さえ覚えればなんとかなるだろうということ、それを覚える事になった。

着ぐるみの手袋で手話なんかできるのか?と思っていると、ライ子は着ぐるみ用の大きな手袋から普通の手袋にはめ替えていた。用

意周到である。

こうして手話のレッスンが開始される。

「あ、い、う、え、お」と言いながらライ子と同じように手指の形を変える一同。着ぐるみの先生に教わっている様は一種異様な光景である。

通常の50音以外の濁音などは、その文字の形のまま横に動かすなどして表すらしい。

「ぶ、っ、ち、よ、は、あ、ほ、だ」しばらくして応用編に入ったらしく、一同声を出しながらライ子に続く。

「ぶ、っ、ち、よ、は、す、け、べ」と一同は真剣に続けている。後日なぜか一同は”ぶっちょ”という指文字だけは、すんなり出せるようになっていたという。

そんな具合に、カツ子の腹の虫が鳴り始める頃には、全員がなんとなく50音分をできるようになったのであった。

「（おなががすきましたねえ、なにたべましょうか？）」「とカツ子が手を動かすと。

「（つくるのめんどくせえから、まぐどでいいんじゃない？）」「とブッチョが答える。

「（ん？わたしはなんでもいいよ）」とライ子が言う。

「（じゃあきょうは、まぐどでたべよっか）」と丸美が締める。

そんな一同を眺め、ブッチョは宣言する。

「（ふっふっふっ、これでわれわれはさいこうのつうしんしゅだんをてにいれた！これをたたかいにりようするのだ！）」「分かりづらいことこのうえない。

首をかしげる一同だが、とりあえず腹が減ったので、ブッチョをスルーしてマグドへ向かうのだった。

マグドで昼食をすませた一行は、ブッチョの提案で近所の公園にやってきました。

「(わーい！滑り台で遊ぶ！)」と言って丸美がかけていく。

「(わたしも遊ぶ！)」とライ子も後を追う。

「(あんまはしゃいでケガするなよ)」と走っていく二人に向かって、ブッチョは手話で言うが、もちろん二人は気づかない。

「(いやいや、声を出しながら手話をすればいいんじゃないですか？)」と言うカツ子も声を出さない。

「(それもそうだな、じゃあカツ子しゃべりながら手話をしてくれ。)」という。

「(え？いや、先にブッチョさんがやってくださいよ)」と、なぜか躊躇する。

「(は？なに言ってるんだ？別に声出したって問題ないだろ？)」と言いながらブッチョは声を出さない。

「(む、なんかヤです。ブッチョさんが声を出すまで私声出しません)」となにやら意味の無い勝負が始まりそうである。

そんな不毛な勝負が始まるうとしていたその時。

「おいブッチョくん、こんなところで用事ってなんだい？」とテンホー氏がやってくる。

「む、ゲームのメールで我が輩を呼び出したのは貴様等か！」とレイさんもやってくる。

「(あれ？テンホーさん、レイさん、なんでこんな所にいるんですか？)」

「(俺が呼び出した。これから”ぼこぺん”大会を開催します！)」

「（お？ブツチヨくんさつそく手話覚えたのか。てか」ぽこぺん  
” なつかしいな）」とテンホー氏も手話を使えるようだ。

「貴様等は先ほどから何をやっているのだ！」一人だけ手話がで  
きないらしい。

「えつ、みんな”ぽこぺん”やるの？わたしもやる！」とライ子  
がやってくる。

「（わたしもー）」と言いながら丸美も合流する。

「で、”ぽこぺん”ってなんですか？」

「我が輩も知らないぞ」

「俺も知らなかったけど、病院の子供に教えてもらった」とブツ  
チヨ、カツ子、レイさんは子供の頃”ぽこぺん”で遊ばなかったよ  
うだ。

”ぽこぺん”の遊び方を聞いてみると。

1、まず、じゃんけんで鬼を決める。

2、鬼が木や壁などの特定の場所で、みんなに背をむけて目を隠  
し、みんなで「ぼーこぺん、ぼーこぺん、だーれがつっーいた、ぼ  
こぺん」と歌いながら鬼の背中をつつく。

3、鬼は最後につついた人を予想して、予想が当たればその人が  
鬼になり、また2から始める。予想が外れた場合は、また鬼はみん  
なに背をむけて目を隠し、100を数える。その間にみんなは逃げ  
て隠れる。

4、100数え終えた鬼は、今いた木や壁を拠点にしてみんなを  
探し出す。見つけた場合は、拠点に戻り「（名前）、ぼこぺん！」  
と宣言すると捕まえることができる。捕まった人は、拠点から順に  
手を繋いで捕らえられる。で、全員を捕まえれば鬼の勝ちである。

5、捕まっていない人が、鬼に「ぼこぺん」される前に拠点に着  
いて「ぼこぺん」と言うと、捕まっている人が解放され、鬼が10  
0数えるところからやり直しになる。

地域によって違うようだが、だいたいこんな感じである。

「ああ、缶けりに似たような遊びですね」「缶けりをしたことがないので知らないが。ちなみにブッチョは缶けりすらもやった記憶がない。」

というわけで”ぽこぺん”の幕が上がったのである。

05

まず、じゃんけんで負けたのはブッチョである。

「よっしゃ、こいや!」と公園のどんぐりの木に向かい、目を隠す。

そしてその他全員で「ぽこぺん、ぽこぺん、だーれがつつーいた、ぽこぺん」と歌いながら、ブッチョの背中をつつきまくる。

「いてえ!レイさん、てめえだろうがあ!」とブッチョが予想すると、みんなが「正解、次レイさんが鬼」と言い、レイさんが鬼になる。

今度はレイさんが目を隠し、みんなで「ぽこぺん……」と歌いながらつつく。最後の一突きはカンチョーであった。

レイさんは「ぬぐあつ!ブッチョ貴様かあ?!」と予想すると「ブブブー、私でしたー!逃げろー!」とライ子が叫び逃げ出す。

100を数えたレイさんが目を開けると、視界には誰もいなかった。

「ぬ、我が輩を置いていなくなるとは、けしからん!」やはりルールを覚えるのは苦手なようだ。

とりあえずみんなを探し出すため、レイさんは拠点となるどんぐりの木を離れる。

ルールとして、隠れる範囲はこの公園内と決めてある。この公園は200メートル四方のそれほど大きくない公園だが、身を隠すのにちょうど良い遊具と木や植え込みが配置されている。

レイさんが探し始めてから一分「テンホー氏発見！」という声が聞こえる。

「しまった！」と叫びながら植え込みから飛び出すテンホー氏、さすがに大人の体では見つかりやすいようだ。

テンホー氏の全力疾走むなしく「ぽこぺえん！」というレイさんの声が、どんぐりの木を中心に公園に響き渡る。

がっくりと肩を落として捕まっているテンホー氏を背に気を良くしたレイさんは、意気揚々と次のターゲットを探し始めた直後。

「ぽこぺーん！」という声が公園の奥から聞こえたが、どんぐりの木の方を振り返ると、そこには木に手をつけている丸美が立っていた。どうやら声の出せない丸美の代わりに、他の場所にいるライ子が叫んだようだ。

「むう！なんたること、無念！」と100を数えに戻るレイさん。

「（すまない、丸美ちゃん）」とお礼を言うテンホー氏だが、テンホー氏も丸美の接近に気がつかなくなつたらしい。

「（あはは、どんどん助けちゃうからね！）」とスキップしながら隠れにいく。

レイさんは100を数え終わり、再び搜索を始める。

まさかあんなおっさんに最初から捕まるとは思わなかつたテンホー氏は、公園の一番奥の安全な場所で傍観を決め込む。

すると、前方の遊具の影でなにやら忙しく動くブッチョを見つけると、

しばらく見ていると、ブッチョは手話をしているらしく「（丸美今だ、右前の木に移動）」、「（ライ子、滑り台の後ろへ隠れる）」などと言っている。なるほど、手話なら声を出さずに的確な指示が出せるが、ズルである。

そんな調子で二回ほどレイさんに鬼をやらせた後。ブッチョ、ライ子、丸美の三人はズルしても楽しくないことに気づき、手話での指示は無くなったのである。

それを見ていたテンホー氏は「さすがブッチョくん、頭の構造が

小学生と同レベルだ」と感心しているのかバカにしているのか判別できない独り言をもらすのであった。

ズルの無くなったゲームはやはり緊迫した展開になり、いつのまにかカツ子以外全員が捕まってしまった。

「はははは！あと一人だぞ、観念して出てきたまえ！」と言いなからレイさんはカツ子を探しに行く。

「カツ子姉ちゃんがんばって！」（カツ子姉ちゃん逃げて！）やら最初は興奮していたライ丸姉妹だったが、10分たっても20分たってもカツ子は見つからない。

探していたレイさんも「ぬう、カツ子氏はどこにもいないでござる」と探し疲れたのか語尾がおかしなことになっている。

すると、ピリリリリ！ブイイイイン！とブツチヨの携帯電話の着信音とバイブレーターの音が公園に鳴り響く。

ブツチヨは液晶画面を確認することなく電話を取ると。

『『うええええん、ブツチヨさんここどこですかあ？たすけてくださあい！』』というカツ子の情けない叫び声が携帯電話から漏れ出す。

電話を頼りに全員でカツ子を探しにいくと、公園から歩いて5分も離れた民家の庭で身を隠すカツ子を発見する。

どうやら公園の端の方で一人で隠れていたら、通行人に見られたらしくパニックになり、気がついたら知らない家の庭にいたとのこと。よくもまあ簡単にパニックになれるものである。

その後公園に戻った一行は、一人ずつ順番に鬼になり”ぽこぺん”遊びは幕を閉じたのであった。

別れ際ブツチヨはレイさんと携帯番号の交換をし、一緒に遊んでくれたテンホー氏とレイさんにみんなで礼を言って解散したのだった。

気がつくと、空はすでに夕焼け色に染まっていた。

夕飯を再びマグドで済ました後、カッ子をマンションまで送って行き、現在ライ丸姉妹を自宅まで送っているところである。

ライ丸姉妹の家が見えたところで「ありがとブッチョ、もうここでいいや」とライ子が言う。

「（ブッチョ、また”ぼこぺん”やろーね）」と丸美が手話で話す。

「ブッチョ、今日はありがと。そして……ごめん」とライ子。朝のやりとりを気にしていたようである。

「ん、これでよかったのかな？」とブッチョが言うと、ライ子は「うん」とうなずき「じゃーね！」と二人で手を振りながら家に向かって歩いていく。

ライ丸姉妹が家に入るのを見届けてから、ブッチョは帰路につく。その道すがら、最近の自分の身の回りの変化を、思い起こしていた。

今日のようにみんなで公園で楽しく遊ぶなんてことは、ブッチョの記憶の中には無かったことである。

ましてや手話を覚えたり、少し前まで赤の他人だったテンホー氏やレイさんまでも一緒になって、友達を搜索するなど。

もしかしてこれが”普通の人”の普通な人間関係なのかな？と。そんなことを呆けながら思っている。

ブワアアアアアアン！というクラクションの轟音と共に黒いワンボックスカーが、すごい勢いでブッチョの目の前の交差点を曲がってきて、ブッチョに接触する寸前で急ブレーキをかけ止まる。

「てめえ！人を殺す気かっつってんだらうがっつってんだらうがあ！」

とブッチョが叫ぼうとする前に、運転席のウィンドウが開き。



「てめえ！ひき殺されてえのか！道なんか歩いてんじやねえよ！」と金髪にピアスのインチキホスト風の男が、すごい剣幕でまくし立てる。ホストはほとんどインチキ野郎だろうが。

年のころはブッチョと同じ位であろうか、さらに「冴えねえ面してんじやねえよボケが！消えろ！」と吐いて、その黒いフィルムが貼られたガラス越しにテレビ画面がいくつも見える黒いワンボックスは、マフラーから壊れたような轟音を轟かせながら、猛スピードで去っていった。

あまりの傍若無人ぶりに唾然のブッチョであったが、あれもあれで自分よりは”普通の人”なのかも。とも思うのであった。

余談ではあるが、次の日、あっさりと手話を忘れたブッチョはライ子の逆鱗に触れ、スパルタ指導で手話を体で覚えさせられたのだった。

### 第三話了

040506です(後書き)

参考文献

『すぐに使える手話辞典6000』米内山明宏 監修 緒方英秋

著 ナツメ社

## 第四話「ゆく年くる年」 01と02

### 第四話「ゆく年くる年」

01

年の瀬も押し迫った大晦日での一幕。

さすがに病院での活動も、年末は病院側に受け入れる余裕はないらしく、ブッチョはコンビニバイトに勤しんでいた。

ホスピタルクラウンは非営利団体なので、ブッチョの収入はバイトの給料のみである。

最近ではブッチョのジャグリングの腕も、ほどほどに上がっているようで、テンホー氏とのコンビ芸なども練習しているようだ。

カツ子とライ丸姉妹には、ホスピタルクラウンの活動をしている事は言っているが、ストリートパフォーマンスすらも見せた事は一度も無い。ブッチョは、未熟な芸を見せるのが恥ずかしいのだそうだ。

ところで、なぜクリスマス話題を通り越して、大晦日の話なのかというところ。

クリスマスにケーキを自作したのだが、作業を分担したおかげでカツ子の作った見た目完璧の変な味にするパンケーキと、ライ丸姉妹セレクトの珍しいフルーツ、そして味は良いが見た目最悪の創作生クリーム&盛りつけによって、カオスマスケーキになってしまった記憶は、四人から抹消されてしまったのだった。

で、現在カツ子邸では、年を越す準備をしているのであつる。

予定としては、またライ丸姉妹の両親は仕事でいないので、今日はカツ子のマンションに泊まるついでに、カウントダウン&初詣を済ませようということらしい。

「もーいーくつ寝ーるーとーおーしょーおーがーつー」とライ子は、なんとも間延びしたフレーズを無制限リピートしながら、重箱におせち料理を詰めている。

丸美は横の着ぐるみのリズムに合わせているように、踊りながらカツ子の料理の手伝いをしている。

どうやら自分で作れそうなおせちのメニューは、自分で作るとういうことらしく、三日前から四人で悪戦苦闘している様子である。

時折ライ丸姉妹が味見しては、ブッチョを呼んで調味料だけ入れさせるという二度手間の連携プレイで、なんとか切り抜けているようだ。

先ほど味見をした丸美が、苦虫を噛みつぶした様な顔をした後ブッチョを呼んで、その後ブッチョの味付けでオーケーサインを出していたのだが、苦虫レベルをオーケーまで持っていくブッチョの味付け技術はミラクルである。

「あとちよつとなので、ちよつと休憩しません？」と提案すると。

「うんそうだね、ちよつと歌い疲れちゃった」とライ子は見当違いの疲れ方を見せる。

「（丸美も休憩しようぜ）」ブッチョが手話で声をかける。

「（うん、なんだかノド乾いちゃった）」と丸美。

「「ジュースならいっぱい買ってありますよ。あつたかいお茶や紅茶がいいならインスタントがあるので、お湯沸かしますけど？」」

と、カツ子は正月外に出なくてもいいように、必要な物をいろいろそろえているのであった。さすが現役ヒッキーである。

丸美が紅茶がいいと言ったので、ついでという理由で全員紅茶ということになった。カツ子はさらについてということ、全員分のティーバッグを鍋で煮詰めるという横着ぶりを見せ、それを飲んだ丸美の「（苦い）」という一言で紅茶ネタは幕を閉じたのだった。

なんだかんだで、おせち料理を完成させ、みんなでのんびりとテレビを鑑賞しているところである。

カツ子の家にコタツが無いのは残念であるが、エアコンと床暖房が完備されているので、冬だとは思えないほどの暖かさである。

「で、大晦日の特番は何を観ましようか？」

現在午後6時なのだが、たいがいどのテレビ局も大晦日の特別番組を放映するのである。

「（）ノラえもん”がいい！」と丸美が言う。

”ノラえもん”とは、遙か過去から生きている野良猫の妖怪がある家に住みつき、その家の出来の悪い少年の悩みを妖術で解決するという国民的アニメである。

「私は”ガキの集い”のスペシャルがいい！」とライ子。

”ガキの集い”とは、大御所のお笑い芸人コンビが司会の番組で、ここ数年大晦日にスペシャル番組を放映している。内容はというと、番組メンバーが日常生活の中で、スタッフの仕掛ける罠にはまりながら指令をこなしていくという抱腹絶倒の番組である。

「私は”紅白歌マゲドン”がいいです」

”紅白歌マゲドン”とは、某国営放送の誇る大晦日の歌番組の集大成で、女性歌手だけの紅組と男性歌手だけの白組に分かれ、今年の最終対決を行うという歌番組である。

「ん？俺か？別に何でもいいぞ。みんなで話し合ってくれ」とブツチヨは丸投げを決め込む。

「ん、じゃ私は”ノラえもん”でいいや」

「（ううん、”ガキの集い”でいいよ）」

譲り合いとは美しい姉妹愛である。

「どつちでもいいなら”歌マゲドン”にしましょう？」「ぶち壊しである。

結局見たいところでチャンネルを替える、という中途半端な話で

まとまったようだ。

そんな感じでしたっけたりくだらなかつたりする番組を、見所でチャンネルを替えつつ見ていると。

「おなかすいたなー」とライ子が訴える。時計を見ると午後10時30分である。

「「そうですなえ、先に年越しソバを食べましょうか」

「（やった！食べる食べる！）」と丸美は楽しみにしていたようだ。

「おう、冷凍ソバだろ？俺が作るうか？」とブッチョが言う。

「ダメだよ！ブッチョはインスタントでも何か余分に調味料入れるもん！」

「（こないだなんか、うどんにあんこと牛乳を入れるんだもん！もう異次元スイーツだったよ。おいしかったけど）」チャレンジャーである。

「ああ、あれは隠し味にバターを入れたからな」

というわけでカツ子がソバを茹でたのだが、心なしか変な味がしたことについては触れないことにしたようだ。

今年が終わるまで、あと1時間。

今年はブッチョにとって、ありすぎると言う位いろいろな事があった。

この目の前にいる奇妙な三人と巡り会ったのを筆頭に、ホスピタルクラウンの活動を知ったり、バイトは変わってしまったが今までで一番長く続いている。

ブッチョの今までの人生の中で、これほど他人に関わり、変化にとんだ年は無かったであろう。

それもこの三人に出会えたからこそである。

願わくばこの関係が来年以降も続くことを望むのであった。

などとセンチメンタルなことを考えている横で、ライ丸姉妹は揃

っつらっつらっつらとしてる。

「あれね？二人とも寝ちゃいそうですねえ。初詣は明日にしましようか」「

「はっ！いやいや、なに言ってるのカツ子姉ちゃん！眠くなんか  
ないよ！」とライ子はあせって主張する。

「ん？だいじよすそ、けれくなんかつきよ」「丸美は眠気で、  
手が思うように動かないようだ。

はたしてライ丸姉妹は初詣に行くことができるのであろうか。

ゴオオーン……。

除夜の鐘が鳴り響く夜道を、四人は寒さに耐えながら神社に向かうまばらな人影と一緒に歩いていった。

どうにか睡魔に打ち勝ったライ丸姉妹は、“紅白歌マゲドン”が終わり”ゆく年くる年”の放映が始まると、眠気を覚ますように「初詣行こう！」と言い出したので、少々早いが出発する事になった。向かっている神社は、出店の出るような大きな神社ではなく、地域の住民のみが行くような神社である。

カツ子のマンションから歩くこと10分ほどで神社に到着すると、年が明けてないにも関わらずある程度の人が集まっていた。

広場の中心では焚き火がたかれており、10人ほどの人々が焚き火の周りを囲み暖をとっていて、一行もそれに参加する。

「あつたかーい」とライ子は焚き火に向かって手をかざす。

「（顔があつつい）」と丸美は焚き火に背を向けながら暖をとる。

「「あつ、あそこでお汁粉頂けるみたいですよ？」」

カツ子の言う方を見ると、大釜で暖められたお汁粉が、無料で振る舞われているようだ。

「お参り終わったら食べて帰るか」と言つと。

「はっ！ブツチョ、年が明けるまであと何秒?!」とライ子が焦って聞いてくる。

「おいおい、お前あと何秒って、そんなにギリギリじゃねえだろ」と言いながら携帯電話の時計を見ると。

「ぎゃあ！やべえ！あと10秒だ！」ギリギリだったようだ。

「（8、7、6）」と急いで指折り数え出す。

「5、4、3」と周りの子供たちの声も聞こえ出す。



「2、1」と声は大きくなり。

「あけましておめでとう」とあちらこちらで聞こえる。

「（あけましておめでとー）」「あけおめー」「明けましておめでとーございます」「ん、明けましておめでと」「それぞれがそれぞれに新年の挨拶をする。

「それじゃお参りしに行くか」とライ丸姉妹にお賽銭用のお金の5円玉を一個ずつ渡す。「わ、ブツチョけちくさい」との声に耳をかさずにカツ子を見ると、なにやらモジモジしている。

「えつと、ブツチョさんすいません、私お金持ってないです」と金持ちらしからぬ申告である。

「わかつてるよ、お前が現金持つてるの見たことないしな」と言いながら5円玉を渡す。ブツチョはあらかじめ全員分の5円玉を用意していたようだ。

「すいません、後で何かでお返しします」

「いやいや、5円でお返しって、いいよそんなもん」

「あつ！そうですね、ブツチョさんこういってお金のやりとり嫌いでしたね」

「ぶつ！5円でそんなこと言うとマジでケチに思われるからやめてえ！」 実際マジでケチである。

04

その後無事にお参りを済ませ、待望のお汁粉タイムである。何を願ってお参りしたか、などというどっかの安い恋愛ドラマのようなやりとりもなく、参拝前から一行の意識はお汁粉に向いていた。

大量の湯気の沸き立つ大釜からあつあつのお汁粉が、あらかじめ白玉の入った使い捨てのお椀にそそがれる。

一行はそれぞれお汁粉の入ったお椀と割り箸を受け取り、息を吹

きかけふうふう言いながら食べ始める。

「ああ、体があつたまるー」とライ子は身震いしながらすすっている。

「………(笑)」

「うーん、あまくておいしい。……と言ってる」と丸美の両手が塞がっているので、ライ子がかわりに言ってる。

「ああっ！メガネが曇って何も見えません！」「カツ子の眼鏡は湯気で真っ白になっている。

そんな一同の横を通り過ぎたカップルが「あれ？こっちは甘酒じゃなくてお汁粉食べさせてくれるんだ」と言ったのをカツ子は聞き逃さなかった。

「「そういえばこの神社から少し行った所に、もう一つ神社があるんですよ。そこは甘酒ですかあ」「と行きたそうである。

「甘酒かあ、飲んだ事ないな。お前等行くか？」とブツチョ。

「甘酒ってなに？私たちでも飲めるお酒なの？」とライ子は言う。丸美も首をかしげている所を見ると、二人とも甘酒を飲んだ事は無いようだ。

「「ライ丸ちゃん達も飲めますよ。甘酒っていうのは、お酒を造った後に出る酒粕を煮て砂糖で甘くしたおいしい飲み物です。どうします？」「と言いながら、足はずでに次の神社に向かっている。

で、現在一行の手には、甘酒の入った紙コップが握られている。

「あつ、甘くておいしい！」

「（このつぶつぶがおいしいね）」と初めて飲む子供にも概ね好評のようだ。

「ん、少しお酒の香りがするけど、いけるな」とブツチョも気に入った様子。

「つて、カツ子はどこ行った？」

気がつくど、カツ子がない。またいつものマンネリ迷子ネタか？という不安が頭をよぎった時「あつ、カツ子姉ちゃん！」とライ

子が、近くのテントにいるカツ子を見つける。

「おい、お前勝手に行くともた迷子になるぞ」とブツチョが忠告すると。

「ふあい？ブツチョはん、なんれすか？」「と、ろれつがまわっていない様子。

「は？まさかお前、いくらボケキャラでも甘酒で酔っぱらうなんて古典的にもほどがあるぞ」

と言いながらよく見るとこのテントでは、おじさんが一升瓶片手に日本酒を振る舞っていた。

「よう姉ちゃん、なかなかの飲みっぷりだね。もう一杯行つとくか？」とおっさんが一升瓶を差し出す。

「ふあい、ありがほーごらいまふ」「と言いながらコップを差し出す。

「ぶつ！お前やめとけつて！そんなに飲んだら帰れなくなつちまふそ……はへ？はんかるれふが……」とブツチョはお酒を飲んでないのにふらふらします。

「ぶ……ブツチョまさか」

「（甘酒で酔っぱらったんかい！）」とまさかの古典ギャグである。

05

その後、ブツチョとカツ子の酔っぱらいの保護者は、ライ丸姉妹の介添えでなんとかマンションに戻る事ができた。

リビングまで来ると、ブツチョとカツ子は倒れて動かなくなっていました。

「（もう！こんな所で寝たら風邪ひくよ！）」と怒ったところで起きそうにもない。

「まったく、しょうがないなあ」と言いながら、ライ子は部屋の隅に置いてある大きな袋から布団を取り出す。

どうやら今夜泊まるライ丸姉妹の為に、カツ子が買っておいた布団のようだ。

ライ子はリビングの床に寝ている二人の間に、敷き布団を敷く。

「ちよつと手伝って」と丸美を呼び「せーの！」と二人でブツチヨを転がして布団に乗せる。

「もういつちよ、せーの！」と反対にいるカツ子も、転がして布団に乗せる。

「よっしゃ、いつちようあがり！」と言いながら掛け布団をかぶせてやる。

「じゃ、私たちはカツ子姉ちゃんのベッドで寝よっか」

「(やった！ふかふかのベッドだ！)」

と、こうしてライ丸姉妹は、カツ子のベッドに二人で寝ることにしたようだ。

リビングに一つ敷かれた布団に眠る酔っぱらい達を残して。

翌朝、がっつりとブツチヨの腕の中で目を覚ましたカツ子の「ぎゃあ！」という悲鳴が目覚ましとなって、新年の朝がスタートするのであった。

#### 第4話了

## 第2おまけ話「表現の自由」01から03です(前書き)

前回のおまけ話と同様に、挿絵が挿入されています。

前回の告知どおり、キャラクタービジュアルの固定化は本望ではありません。

素人の描いた絵に嫌悪感を抱かない方はどうぞ。

この話は本編と続いています。シナリオ上重要な情報は書かれていません。

どうぞ飛ばしてください。

でもがんばって描きました。見る人はどうぞお楽しみください。

## 第2おまけ話「表現の自由」 01から03です

### 第2おまけ話「表現の自由」

01

01 二人が対峙してから三日、勝敗はつかずにいた。

惑星シュトウルーゼングノーシス第三惑星皇子シャルルグスブンゼン「ドラゴニズフス」ブラトリアヌス？世と惑星モルデスラハギンコルストール第六惑星のコルスリンシャロウ「ヒュルツドシュレット」ヴァンダルセン第三皇子との一騎打ちである。

> i33313 — 3933 <

しかし二人のソウルドルトリメイションは尽きかけようとしていた。たぶん次のマルテリクスシュトラウムでノルデイルコントレクトがきまるであろう。

先に仕掛けたのはシャルルグスブンゼン「ドラゴニズフス」ズラトリアヌス？世であった。

彼の聖剣ヒュレディレイドシュテルンデルグにはファイアリングエレメンタルがエンチャントされているので、コシュタリウスが可能なのだ。

一方コルスリンシャロウ「ヒュルツドシュレット」ヴァンダルセン第三皇子の聖槍ノーザンファシユリティーフュノプリウスは賢者ノルセリウス「ゴロフサコニフ」モリモンサレイスによって一つの聖槍ココリジューヒルシュトラウゼンとモスリタウルス融合されているのだ。

そしてシャルルグスブンゼン「ドラゴニ」……

「って寿限無か！名前が長すぎるわ！辞書か？これは変な長い名前辞典か?!」とブツチョコは原稿用紙を机に叩きつけながら叫ぶ。

「カツ子姉ちゃん、挿し絵ももうなんだかてんやわんやでカオスだよ！」とライ子が言うと。

「（カツ子姉ちゃん怖い）」と丸美は震え出す。

「なに言ってるんですか！これは愛と友情の物語ですよ？戦いの果てに二人は結ばれるんです」「」

「さらにオチはホモネタかい！」

「失礼な！ボーイズラブと言ってください！」と拗ねる。カツ子の意外な嗜好が明らかになる。

「なんか効果音おかしいし、ところどころに浮いてる丸いのなに？」

「あれはマスコットキャラのニッチくんです。ニッチくんを食べるとパワーアップできるんです」「」

「（怖い）」

「おーけー、これはノーカンで次いこう」

「ひどい！一生懸命書いたのに！」

いきなりのカオスだが、一同はなにをやっているかというところ。

今では正月三が日でも営業している店も多く、家から一歩も出ないということはなくなったのだが、おせち料理を作った手前全部食べてしまわなければならない為、外出を避けているのである。

現在1月2日、おせち料理は本日中に無くなりそうだが、暇を持って余した一同は書き初めを始めたのである。

書き初めの歴史的な意味は知らないが「別に習字じゃなくても、なんか書きゃあ何でも良くね？」というブツチョの適当発言で、なんでもいいから何かを書くという”なんでも書き初め”をすることになった。

で、カツ子の”なんでも書き初め”作品は今のカオスホモ小説だったのである。

「じゃあ次は私たちの番だね！」とライ子は元気よく言う。

「（二人の共同作品です！）」と丸美も元気良く言う。

「やっぱお前らは習字か？小説は書けないだろ？」

「ペン習字つてのもありますよ？」

「ふっふっふっ、そんなレベルの低いものじゃないよ！さあ丸美、二人に見せておやり！」

「（さあ！ブッチョにカツ子姉ちゃん！見ておしまいなされ！）」と変なノリでコピー用紙を手渡される。

ブッチョとカツ子が、そのコピー用紙を見ると。

>i333314—3933<

「わあっ！あぶねえ、このサイトから閉め出されるところだった。つてマンガかよ！」

「「わあ！びっくりしましたあ！運営から苦情がきますよ？」」

「わっはっはっはっ！どうだ！小説とマンガのコラボレーションだ！いや、これは超融合と言っても過言ではない！」

「（そう、これはどちらも現実なのだ！）」と、なにやら哲学的な台詞を吐く小学生である。

「「いや、でも、マンガなら他のサイト行けって言われますよ？」」

「「そうだ！怒られたら責任取れんのか！」」

「……」「ライ子は黙ってしまふ。」

しばらくの沈黙の後ライ子はあきらめたように口を開く。

>i333315—3933<

>i333316—3933<

「……」「……」「絶句のブッチョとカツ子。」

「わはははは！くるしゅうない！くるしゅうない！」反省の色ゼロである。

「（わっしょい！わっしょい！）」「こちらもおなじく。」

この二人のフィーバーぶりが、この後しばらく続いた。



それをブッチョとカツ子はぼんやりと眺めながら「怒られなきやいいな」と思っていた。

03

「それじゃあ次はブッチョの番だね」とライ子が仕切る。

「(さあ、ブッチョの作品を見せておくれ)」

「ブッチョさんは何書いたんですか?」「」

「いや、俺の作品はこれから書くんだ」

「は?まだ書いてなかったのかよ!」

「(今までなにやってたの!)」

との怒りもごもつともである。

「話を最後まで聞けって」と言っつて、ブッチョは大きな画用紙を取り出す。

「今からみんなで、一つのお題で絵を描くんだ」

「あつ、それ面白そうですね。なに描きます?」「とカツ子は乗り気だ。

「なんかだまされてるような気がするんだけど。いいや、何描くの?」とライ子。

「(ペカチユウがいい!)」と丸美が言う。

「ペカチユウ」とは、テレビゲームからアニメ化された”パケットモンスター”という大人気アニメのマスコットキャラ的な、電撃を発する怪物である。

「いいよそれで、じゃあ他の人を見ないように仕切り板作るね」とライ子は、そこらの物を使って仕切り板を作る。

子供二人はもちろん知っているだろうが、ブッチョやカツ子も見ただことはあるのだが、描くとなると話は別である。

四人それぞれが画用紙の角に陣取り、筆記用具を構える。

「じゃあ制限時間は5分、よいい、スタート!」とブッチョが合図をおくると、四人は一斉に描きはじめる。

「ペカチユウ」って電気の怪物で、チュウって言うくらいだから虫だよな」とブツチヨは見当違いの独り言をつぶやく。

「んー、どんなんでしたっけ？電気出して、目がクリクリしてましたよね？」とこっちはいい感じのようだ。

ライ子はすでに描き終えている。

丸美は楽しそうに体でリズムを取りながら描いている。

そして制限時間になり、見せ合うことになった。

「それじゃ、せーの！」と自分の描いた”ペカチユウ”を披露する。

「げっ！ライ子、これはまずい！」とブツチヨはライ子の描いた”ペカチユウ”の目を黒く塗りつぶす。どうやら正解だったらしい。  
> i333317—3933<

「（うわ、ブツチヨのやつ目が三つもあって怖いし似てない）」と丸美の突っ込みが入る。

「ぶっ、カツ子のそれ、体が人間じゃねえか」とブツチヨ。お前に言われたかない。

「あつ、丸美ちゃんのかわいい。お花が咲いて太陽さんまで描いてあります」と目を細める。

ライ子の描いた”ペカチユウ”は、完璧すぎて突っ込みどころが無く、誰も触れないでいる。

「……あれ？なんかちゃんと描いたのに何この敗北感」とライ子がつぶやく。

と、そんなライ子に気づき「え？いや、お姉ちゃん上手！」

「おお、さすがライ子」「うわあ！上手ですねぇ！」「と取り繕うコメントも、上手以外出てこないというボキャブラリーの低さ。

「もういいよ！おせち料理やけ食いしてやるう！」とライ子は拗ねて、おせち料理をがつきだす。

その後、おせち料理の大食い大会になり、昼過ぎには食料がそこ

を尽き、新年2日目の晩にしてマグドへ直行する一回であった。

## 第2おまけ話了

## 第五話「メモリーセンチメートル」01から02

### 第五話「メモリーセンチメートル」

01

今日はブッチョにとって、新年最初のホスピタルクラウンとしての活動である。

「ねえねえピエロさん、私にもお犬さん作って」と、手から点滴の管が伸び、胸元から巻かれた包帯がのぞいている女の子が言う。

「おう！ちよちよいと作っちゃうぞ」とブッチョはポケットから風船とポンプを取り出す。

病院での活動では神経を使わなければいけないことが沢山あり、やはりバイキンを子供達に近づけないようにしないといけない。なので、風船を膨らますのも口ではなくポンプの方が望ましいのである。

「ほらできた。おブードルさんのできあがり！」とブッチョはできあがった風船を女の子に渡すと。

「なんかあつちのピエロさんの作ったヤツのが上手」とダメだしされる。

「ぶっ！いやいや俺のはここんとところにオリジナリティーを出してんだよ」と左右で長さの違うパーツを指さす。

「あははは、これは絶対しっぱいしたとこでしょう？やり直し！となかなかきびしいようだ。

「ぎゃふん！君は師匠より厳しいな」と作り直すブッチョを、女の子は先生になった気になって楽しそうに指示を出している。

ここでの活動も、ブッチョは一部の子供達から顔なじみになりつつあった。しかしここは病院なので、本当は顔なじみになどならな

い方が良いのだ。

ブッチョがこの病院に来てからの短い間にも、回復して元気になって退院した子もいれば、治療の甲斐なく亡くなってしまった子供もいた。

人の”死”というものに直面したことのないブッチョは、はげしく戸惑い、悩みもした。

クラウンテンホーはそんなブッチョに「俺たちの役目は、子供達の笑顔を引き出し、闘病の精神的負担を少しでも軽減させる手助けをすることなんだ。俺たちは、子供達や病院の先生とか看護師のように、病氣と闘っている”主演”じゃない。わき役はわき役らしく、何も気にせず自分の役をこなしゃいいんだよ」

「ピエロはピエロらしく、悲しみは内に秘めとくもんだ。そのための涙のメイクだろ？」

とクラウンテンホーは言うが、ブッチョとしてはこの涙のメイクは、父親に捨てられたことによる精神的な病により、感情の高ぶりによってでは涙を流したことがないので、自分の人間的な部分を表す思いで書いているのだ。

そしてクラウンテンホーは「悲しみを全部内に秘めるなんて、簡単な事じゃないけどな」と、一瞬悲しげな表情を見せる。

テンホー氏にどんな過去があったのであろうか。

などということを考えていると。

「ブッチョくん、たまには一杯つきあわない？」とのお誘いをテンホー氏から受ける。

が、ブッチョの頭に初詣の記憶がよみがえる。

「すいません、どうも俺お酒飲めないみたいです」と一連の騒動を話す。

「ぶはははは！いや、いや、ほんとブッチョくん面白すぎるよ！」と大爆笑のテンホー氏。

「じゃあさ、カツ子ちゃんとライ丸ちゃんたちも呼んで、飯食いにいこうよ」とテンホー氏は提案する。

「スカイラグリーンへようこそー！」ウエイトレスのお姉さんの元気な声が店内に響きわたる。

ブッチョ、カツ子、ライ丸姉妹にテンホー氏を加えた一行は、ファミリーレストラン”スカイラグリーン”に到着した。

「なんか、ようこそなんて言われると気持ち悪いな」

「そうだね、そこまで素敵なことじゃないしね」

「(ぼつたくられそう)」

「わあ、みんなそんな悪口ばかり言っちゃだめですよ」

という四人と、苦笑いのウエイトレスのお姉さんを見たテンホー氏は「あはははは！さすが四人集まると最強だな君たちは」と大爆笑。

ウエイトレスのお姉さんに案内され、席につく一行。

その後注文をするのだが、その様子を見ていたテンホー氏は「君たちはいつもそんなに注文するのか？」と、注文した品数のあまりの多さに驚愕する。さらにその後、その注文した大量の食料のほとんどを、ライ丸姉妹が平らげるのを見て絶句するのである。

しばらくすると、次々に食料が運ばれてくる。

ライ丸姉妹は、待ちきれないとばかりにがつつき出す。

他の三人も空腹感から解放されるために、とりあえず無言で食べ始める。

「テンホーさんは、なんでほんな名前にひたの？」と、しばらくしてある程度食べて空腹が落ち着いたのか、ライ子は食べ物をおぼりながらテンホー氏にたずねる。

「おい、口に物入れながらしゃべるな！」とブッチョは叱ってみせると「ふあい」と答える。

「なんか子供にテンホー」さん」なんて言われると調子狂うな」と言う。

「（ん、ブツチョがいつもそう呼んでるからね）」と丸美が言う。「ま、しかたないか。で、名前の由来ね、君たちは麻雀は知ってるかな？」

四人とも麻雀はやったことはないが、四角いブロックを使った絵合わせゲームという認識で一致した。

「それで充分、麻雀であがるには決められた特定の絵柄を揃えたりしてできる役満っていうのがあるんだけど、その中に”天和”てんほうっていう役満があるんだ」

「図柄の書いてあるブロックは”牌”はい”って名前で、基本最初にもらえる13個の牌の絵柄にもう一つ牌を引いて、14個で完成する”和了役”あがりやく”っていうのを早く揃えた人が勝ちだけど、一番最初に始める”親””って人だけ最初にもらえる牌が14個なんだ。その親が最初に牌をもらった時すでに和了役ができてるのを”天和””って言うんだ」

「確率としては、親を33万回やって1回ぐらいの割合らしく”天の神様から授かった和了””って意味で”天和”と呼ばれてる。すごいだろ？ほんとに運のみの奇跡の名前で、天”大空、和”加算、あの広大な空にプラスできるって意味にもなるから”テンホー””って付けたんだ！”やはりテンホー氏はアホで厨二であった。

「え？日本語でオツケーですけど？」とライ子は理解できなかったらしい。

「（カツ子姉ちゃん、その肉取って）」と丸美は食べるのに必死だ。

「「はいはい、あんまり急いで食べると喉につつかえますよ？」」と聞いちゃいない。

「ぎゃふん！聞いちゃいねえ！あ、確かにこのメンバーと絡むと”ぎゃふん！””って言っちゃうな」とテンホー氏はなにやら納得している。

テンホー氏と話すと、毎回説明っぽくなるのは俺たちが無知だからなのか？とブツチヨは思っていた。



テンホー氏のビールが三杯目に到達し、ライ丸姉妹が追加注文した大量のデザートが、テーブルを埋め尽くす頃。ブツチヨはテンホー氏に、クラウンになったきっかけを聞いてみる。

「んあ？人に聞く前に自分のから先に言えやあ！」とテンホー氏は完全に酔っている。

「いやいや、俺はテンホーさんに誘われたからですよ」と言う。

「いや、そういうんじゃないでな。ん？まあいいか、まだ君も明確にはわかんないだろうからにや？」テンホー氏もあまりアルコールに強い方ではないようだ。

そしてテンホー氏は少し考えた後、話始めたのである。あまりにも悲しい過去を。

「んー、ありやあ中学3年の時だにや、ふたつ下の妹が死んじゃってさあ」と酔っぱらって明るい感じで。ブツチヨは聞くタイミングを間違ったようだ。

「いやー、ふたつしか違わなかったけどかわいい妹でねえ、今で言う」と妹萌え”ってやつ？妹は元々病弱だったんだけど、あるときコロツと逝っちゃいやがって」

「……」とブツチヨが言葉を失っていると「あー、もう昔の事だから気にするな。いやー、でも当時は荒れたねー、あたり構わずケンカしまくったよ。これでも運動神経いい方だからケンカ強かったんだぜ？でもあるとき高校生に袋叩きにあって入院さ、内蔵破裂だって、マンガでしか聞いたことないだろ？」と事も無げに言う。

この時点ですでにブツチヨとは全く違う世界の間人である。

「そんなだから親ともうまくいってなくて、入院中たまに世話

しに来てくれても俺は目を合わせもしなかったよ。で、入院生活も一ヶ月を過ぎた頃、死んじまった妹によく似た女の子となかよくなつてねえ、妹と同じ俺のふたつ下で”サッチ”って言うあだ名で呼ばれててかわいかったにゃあ”テンホー氏は体をくねらす。

ここでテンホー氏は残りのビールを飲み干し、新たにビールを注文する。ライ丸姉妹はデザートに夢中で、カツ子は食べ過ぎで放心状態である。

新しいビールが到着すると、テンホー氏は再度話を続ける。

やはりサッチも入院患者で、心臓が弱いらしく、入院は数年にも及んでいたようである。その間に何度も危険な状態になったことも聞かされた。

「俺はこのとき気づいたんだ、妹が死んで以来何にイライラしてケンカばかりしていたのか、俺が無視するような態度をとつても何で親はなにも言わなかったのか」

「気づいてたんだよ、妹が苦しんでるのに何もできない自分の無力さに、祈ることしかできなかった自分のふがいなさに」

だから両親も、テンホー氏の気持ち痛いほどよく分かっていたので、好きなようにやらせていたのだろう。

しかし気づいたところで、テンホー氏が目の前の少女にしてやれる事はないのである。

サッチは退屈な入院生活が長く続いたせい、表情の変化の乏しい少女で、テンホー氏と談笑していてもどこか陰りのある笑顔しか見せなかったという。

この子の笑顔はこういうものだ。と疑問を持たなくなった頃、そいつは現れたのだ。

「いや、びびったさ、まさか病院の中にピエロがいるなんて、冷静に考えてみる、病院にピエロがラッパ吹きながら歩いてきたらど

「うつする？」

と言われブツチヨは想像する。病院の暗いリノリウムの廊下を、ラッパを吹き踊りながら靴をキュツキュと鳴らして近づいてくる白塗りのピエロ。

「ぎゃあ！完全ホラー！」とブツチヨは叫ぶ。

「いやまさにホラーだろ？でも退屈で変化の乏しい入院生活が日常になっている子達にとってそれは、入院生活には無い非日常の出来事だったんだ」

「それを見ていたサツチの表情はこれでもかというぐらいワクワクしてた」

「で俺は思ったね、できんじゃん、病気を治す事はできなくても、このくそつまらない入院生活を楽しくさせる事ぐらいはできんじゃん！って」

その後サツチよりも先に退院したテンホー氏は「まずはサツチの為に修行して、退屈な入院生活を毎日楽しくさせてやるぜ！」とそのクラウンに弟子入りしたとのこと。

その後海外にまでクラウンとしての修行に行き、ホスピタルクラウンとしての知識を身につけサツチに会いにいったのだという。

しかしテンホー氏が病院に行くとサツチはもういなかったのである。

「そこでまた思い知らされたよ、言っただろ？俺たちは主役じゃないって、何の力もないただのわき役だって……」

「……」とブツチヨは言葉が出ない。結局は笑いの力で一時気を紛らわせたとしても、人の命など救えないということなのだろうか。カツ子やライ丸姉妹も今の話を聞いていたのだろうか、食べる手を休めつつむいている。

そんな一同の沈黙を破るように、テンホー氏の携帯電話の着信音が鳴り響く。

「お？はいはないな」と言いながら電話を取る。

「ん？あ、着いた？中にいるから入ってきて」としゃべっている。

「誰か来るんですか？」とブツチヨは、電話の終わったテンホー氏にたずねる。

「ああ、俺こんど結婚するんだ、それで奥さんになる人をブツチヨくんに紹介しようと思ってね」とテンホー氏。

「なに？リア充の自慢話？」とライ子は再びデザートを食べ始めながら言う。

「（今から来るの？じゃあもつと食べ物注文しなきゃ）」と丸美はまだ食べる気らしい。

「えっ？テンホーさんの彼女さんが来るんですか？」とカツ子は身だしなみを整えようとするが、ぼさぼさヘアにジャージでは整える場所など無い。

「スカイラグーンへようこそー」という声が入り口の方で聞こえたかと思うと、テンホー氏はそちらの方へ手を振る。

やってきたのは、すらりとしたきれいな女性だった。

「はじめまして、みなさんの話はいつもテンホーの方から聞きます。この人アホでしょう？」と女性はテンホー氏を指さして言う。

「アホとは失礼な！紹介します、これが俺の婚約者の”サッチ”です」とテンホー氏。

「は？」

と意味が分からない一同。

「サッチ死んだんじゃないかよ！」とライ子が言う。

「え？なに？なんで私死んだ事になってんの？」と戸惑うサッチ。

「えつと、だつてさつき病院で思い知らされたつて……」  
「え？だから、”わき役”の俺が修行に行つてて何も力になれなかつた5年の間に、”主役”のサッチやお医者さんが病気を克服してしまつたから、”主役”の人たちはすごいなあつて思い知らされましたとさ！」とテンホー氏。

「5年も修行してたんかい！どんだけ入院させとくつもりだよ！」とブツチヨ。

「言い方がまぎらわしいんだよ！」（さつきの沈黙を返せ！）とライ丸姉妹は怒り心頭である。

「いやー、その後サッチと連絡が取れてさー、会つてみたら超いい女になつててー、いやー、5年の月日つてのはすごいねつて思い知らされましたよ」とさんざんノロケまくっているテンホー氏をスルーし、サッチだけにお祝いを言う一同であつた。

05

その後食事の精算を済ます際、テンホー氏が「今日は無理言つて集まつてもらつたから俺が払うよ」と言つたのだが、あまりの金額に所持金が足りず、結局カツ子がお祝いということで支払う事になる。

別れ際テンホー氏はブツチヨに、半年後にある結婚式に招待するという約束をして、テンホー氏とサッチのお祝い食事は、お開きとなつたのである。

帰りの道すがら、ブツチヨはカツ子とライ丸姉妹に一つ提案をする。

「お前らどこか泊まりがけで出かけれる日がないか？」

「私はいつでも大丈夫ですよ？」と聞くまでもないヤツが言う。

「ん？私たちも土日ならいつでもいいよ」とライ子も即答である。

「いやいや、親の了承ぐらい取ってこいよ」まあそこらへんは力ツ子がつまくやるだろうが。

「（なにかするの？）」

「ああ、少し前から考えてたんだけど、みんなで”ネズミランド”に行かないか？」とブツチョヨが言う。

「えっ？」と驚きの表情をしたであろう着ぐるみが言う。

「（行く！行ってみたい！行ってしまおるに……！）」丸美は興奮しすぎて手話などしている場合ではない様子。

「「お金とかは大丈夫なんですか？なんなら私が出しますけど……」」とブツチョヨがお金のやりとりが嫌いなのを知りつつ申し出ている。

「いや、昔から少しずつ貯めてきた貯金があるから、贅沢しなきゃ大丈夫なぐらいはあるんだ」と、実はまめに貯金していたという意外な一面を見せる。

「じゃあ次の土日に行こう！善は急げだよ！」「（なんなら明日からでもいい！学校なんか休んじゃえ！）」などと勝手な事を言っている。

結局、ライ丸姉妹の両親の了承と、ホテルの予約、夜行バスの予約などの結果、再来週の土日に”ネズミランド”へ出かける事になったのである。

## 第五話了

## 第六話「東京ネズミーランド」 010203

### 第六話「東京ネズミーランド」

01

陽気な音楽と共にネズミやアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている。

ここは”東京ネズミーランド”日本のテーマパークの頂点に君臨する夢のワンダーランドである。

「マッキー！レオナルドー！」とライ子は嬉々としてキャラクターの名前を叫んでいる。

ネズミーランドのメインキャラクター”マッキー”ストライクフィールド”はネズミの空軍パイロットで、プロペラ機を操り敵機を撃墜するエースパイロットなのだ。

日本のアニメ映画”紅蓮の豚”というゼロ戦特攻部隊の話は、マッキーがモチーフになっているのは有名な話である。

ちなみに”レオナルド”ダックシュタイナー”はアヒルの高射砲の砲手だ。

しかしこのネズミーランドは、そんな血なまぐさい設定とは無縁の実に楽しい夢の楽園の雰囲気醸し出しているのである。

一行は前日の金曜日の晩に、ネズミーランド直行チケット付夜行バスなる格安バスで、一晩かけてはるばる愛知県から、この千葉までやってきたのだ。

バスから降りた一行の第一声は「腰がいたい」「首が曲がらん」「（おなかすいた）」「まだねむたいです」と、他の乗客のテンションの高さとは対照的に、ネズミーランドを目の前に文句のオンパレードであった。

しかし入場口で出迎えてくれたキャラクターの着ぐるみ達を見ると、前述の文句など消し飛んでしまったのである。

着ぐるみに抱きつく着ぐるみ、というシュールな画をテーマパーク側がよく容認したなと思っていたのだが、実はカツ子がこのテーマパークの株主で、事前に根回ししていたのを知ったのはずっと後の話。

さすがに週末のテーマパークは、気分が悪くなるほどの人の群で埋め尽くされている。

なので人気のアトラクションは、すでに二時間以上の待ちになっている。

「（ふう、入り口にあんなトラップが仕掛けてあるなんて）」と行列の最高尾に並びながら丸美が言う。

事前調査で、人気のアトラクションは開場と共にダッシュで並ぶというのが鉄則とのことだった。のだが、あの入り口の着ぐるみの出迎えは初心者には見過ごせないイベントなのである。

今並んでいるのは”ブーさんのハニーハント”というアトラクションで、プレイボーイの豚のブーさんが女を引っかけるというアニメを再現した人気アトラクションである。

「こんなの面白いのか？」とブッチョが言う。

「なに言ってるの！ハニーハントはジェットコースターに乗りながら立体映像で飛んでくる女の人を、光線銃で撃って捕獲するっていうすごいアトラクションなんだから！」なんだか世も末である。

「（たくさん捕まえるとブーさんバッチがもらえるんだよ！）」豚のバッチがほしいのだろうか。

「バッチもらえるといいですねえ」とカツ子は行列の先の方を見ながら言う。

それから順番がまわってくるまでの一時間半、しりとりしたり、じゃんけんしたりして時間をつぶす。

他の子供を見ると、大半の子供は携帯ゲーム機で遊びながら時間



をつぶしているのだが、中にはブッチョ達一行のように両親と子供で遊んでいる家族もある。

ようやく順番がまわってきて、建物の中のジェットコースターに乗り込み3Dメガネをかける。

所用時間は約5分。あつ、という間に終わってしまった。

しかし「あーおもしろかった!」「まさか最後にあの女の人が裏切るなんて!」「バッチ取れてよかったですね!」

と、5分とは思えない内容であったのだ。わずか5分の為に一時間半並ぶ価値のあるものであった。

ちなみに四人とも見事バッチを獲得し、さつそく四人そろって服にそのバッチを取り付ける。

なにやらおなじ物を付けると、妙な連帯感が生まれたような気になったのはブッチョだけではないようである。

02

「(おなかすいた)」と丸美が訴える。

一つアトラクションを乗り終えたばかりなのだが、時間はもう昼時である。

ここでの昼食は、レストランで食べるか、パーク各地に点在している屋台を食べ歩くかの二者択一なのだが、ライ丸姉妹とカッ子は事前に、どこの屋台で何が食べられるのかを調べてきていたようだ。こここの屋台は、すべて違う食べ物が発売されていて、そのすべてがキャラクターの名前がついていたり、キャラクターの装飾がほどこされている。

一行は食事しながら屋台をまわり、次の屋台までの道すがらにあるそんなに並ばなくてもよいアトラクションで遊んでいく。

実に効率の良い遊び方であるが、ブッチョはまさかすべての屋台

を制覇するとは思ってもしなかったのである。

で、最後の屋台での食事を終えた時にはすでに夜を迎えていた。

「あと一時間でパレードが始まりますよ」とカツ子がポップコーンを片手に言う。

「じゃあ調べておいた場所へ行こう！」とライ子はホットドッグを片手に言う。

「……………(笑)」

「パレード超楽しみ！……と言ってる」と丸美は右手にポテト、左手にチュロスを持っているので、ライ子が通訳する。

ブッチョはホットドッグの最後の一口を口の中に放り込みながら、そんな具合に目的地に向かって歩く三人の後ろをついていく。

目的地に到着すると、なるほど事前に調べていただけあって、前列の方ではないものの、子供の身長でも充分にパレードを見ることが出来る場所である。

しばらくすると、場内のスピーカーから音楽が流れ出し、きらびやかな電装の施されたさまざまな山車の上では、陽気な音楽と共にネズミやアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている。

カツ子やライ子は、嬉々としてキャラクターの名前を叫びながらリズムをとっている。

丸美は音楽は聞こえないのだろうが、山車の上で踊る着ぐるみと同じように楽しそうに踊っている。

そんな光景が、山車の電装に照らされて、ブッチョにはこの空間が夢なのか現実なのか判別がつかないような錯覚におちいる。

いままでブッチョが夢で何度も見てきたこの空間は本当に夢なのかもしれない。

ブッチョの横ではしゃいでいる三人は、出会いこそ奇妙だったものの、ブッチョが今まで現実と思っていた最低な場所から救い出してくれた恩人のように思う。

だからブツチョは感謝の意味も込めて、この夢のような場所に三人を連れてきたかったのである。

03

パレードも終わり、そろそろホテルに向かわなくてはいけない時間になっていた。

ちょうどライ子は遊び疲れたのか、先ほどから欠伸を連発させている。

「大丈夫か？寝たら担いでいってやるぞ」とブツチョが言う。「ん？大丈夫」とライ子は頭をふらふらさせながら答える。

丸美はすでにブツチョの腕の中で寝息をたてている。

ホテルは、電車ですぐの海浜幕張駅周辺で予約してあるので、ライ子を担いでいってもたいしたことはない。

結局電車に乗る頃にはライ子も力尽きたので、丸美をカツ子に預け、ブツチョが背負って行くことになる。

しかしなぜかホテルのロビーに到着すると二人とも目を覚ますのであった。

で、チエックインを済ます時にブツチョが気づく。

「すまんカツ子、部屋を一つしか予約しなかった」と言う。

ライ丸姉妹がいるとはいえ、さすがにつきあってもいない若い独身男女が一つの部屋で泊まるのはマズいと思ったのであろう。

するとカツ子も「ええっ？うーん」と躊躇している。

それを見てライ丸姉妹は「は？何言ってるの？二人で一つの布団で寝てたくせに？」、「（ブツチョの腕枕で寝たのに？）」「と犯人の二人が言う。

「ぶっ！なにを言ってるんだね君たちは！」

「ああわわ、な、なにもやましいことはしてませんよ？」

と慌てふためく二人。

よくよく考えてみると、別に一つのベッドで寝るわけではないので、そのままチェックインすることになった。

部屋に入り一息ついた後、一行は風呂に入りに行くことにした。このホテルのは大浴場があり、のんびりと風呂を楽しむのである。

ふとブッチョは、ライ子はその着ぐるみそのまま風呂に入ってるのか？という疑問が頭をよぎる。後で聞いてみようと考えながら、風呂の中でまどろんでいくのであった。

少々長湯をしてしまったブッチョが部屋に戻ると、すでにライ丸姉妹はそろって寝息をたてていた。

「うおっ！もう寝たんかい！」と驚くと。

「二人とも今日は最後まではしゃぎきましたからねえ」「とカツ子は、風呂上がりで肌を上気させたまま言う。

そんな普段ではあまり見慣れないカツ子の雰囲気、ドキリとしたかどうかはブッチョの無表情ではうかがい知れない。

「俺たちも疲れたな、明日もあるし早く寝るか」

「そうですねえ、私もちょっとはしゃぎすぎました」「

こんな感じでネズミーランド初日の夜は更けていくのであった。

窓の外には街の街灯の灯りがまばらにかがやいていた。

ブッチョは風呂の後すぐに床についたのだが、なぜか寝付けず窓際の椅子に腰掛け外を眺めていた。

「眠れないんですか？」とカツ子がベッドの中から声をかける。

「ん？ああ、なんか寝付けなくてな。起こしちゃったか？」とブッチョは外を見たまま答える。

「いえ、私も寝付けなくて」とカツ子は上半身を起こし、ライ丸姉妹が剥いだ布団を掛けなおしてやる。

「なにか飲みますか？」

「ああ、もらおうかな、アルコール以外で」

「あはは、お酒はもうこりこりです」と言いながら、備え付けの冷蔵庫から買っておいた飲み物を取り出し、もう一つの椅子に座りながらブッチョに渡す。

「サンキュー、今日は疲れたろ」

「ええ、でもあそこまで楽しい所とは思いませんでした、私ネズミーランド初めてなんで」

「ああ、俺も初めてだし、ライ丸姉妹も初めてみたいだな」と言いながら受け取ったペットボトルのお茶に口をつける。

「いつもライ丸たちの両親に連絡してもらって悪いな」

「え？別にたいしたことじゃないですよ？」

「いや、俺はこんなだから人に誤解される事が多くてさ」

「そんなことないですよ？ほら、テンホーさんとかすぐに仲良くなっただじゃないですか」

「あはは、あの人は特別だ、レイさんもな」

「……………」  
夜中ということもあるが、カツ子と二人きりで話すことなどないので自然と沈黙が訪れる。その沈黙を破ったのはブツチヨの言葉だった。

「ありがとな」

「「え？突然何ですか？」いきなりの感謝の言葉に動揺する。  
「いや、お前がああとき友達になってくれて言ってくれたから、今こんなに楽しく過ごしていただけるなって思っ」

「「えへへ、私も楽しいです」

「俺は子供の頃親に捨てられて、それ以来表情が変わらなくなっただんだ」

「……………」ブツチヨの突然の告白に言葉をなくす。

「知つての通り、俺は何をやってもダメだし、人との接し方なんて何一つ分かつちやいない」

「でも、お前やライ丸たちと出会ってから、なにか他人との関わり方が分かってきたような気がするんだ」

カツ子は何も言わずブツチヨの話を聞いている。

「ライ丸たちにも感謝してる、あいつらがいなくなったらホスピタルクラウンに興味なんか持ってなかったと思う」

まだクラウンの姿はカツ子やライ丸姉妹には見せたことはないのだが。

「お前たちのおかげで俺に夢ができたんだ、ほんとありがと」

「「いや、別ににもしてませんし、ブツチヨさんにもお世話になつてますし、でも、夢ってなんですか？」

「それは俺の力でお前たちを幸せにさせてやるって夢だ」

「「えっ？それって……………」」と思わずカツ子はブツチヨの目を見

る。

「……え？あれ？なんか俺言うことまちがった？」とそんなカツ子に戸惑う。

「えっと、だから、俺がもつとクラウンとしての腕を上げて、今日のようなお前たちの笑顔を俺の力で引き出してやるって……あれ？カツ子寝るの？」

カツ子はふてくされたように何も言わずにベッドに入り込む。

「え、えっと、じゃ、俺も寝るかな？」とブツチョもすすすことベッドに入ろうとする。

「あ、そういえばライ子って風呂入るときも着ぐるみ着てるのか？」

「「そんなわけないじゃないですか、なにおかしなこと言ってるんですか？もう寝ますよ！」「となにやら怒っていらっしやるようだ。」

「じゃあライ子の顔知らないの俺だけ？ずるい！」と空気の読めない発言をすると。

「「ライ丸ちゃんたちが起きるからあんまり騒がないでください」「と怒られる。」

「「……ごめんなさい、もう寝ます」と訳も分らず敗北したようだ。」

その後ブツチョは、今までに見たことのないカツ子のマジギレにビクビクして、なかなか寝付けなかったという。

「おっ、きつ、ろー」と叫びながらベッドの反動を利用してジャンプした後、空中で大の字のように両手両足を広げるライ子。

「うぎゃあ！」とブツチョの悲鳴がホテルの部屋に響く。どうやらライ子は無事ブツチョにフライングボディーアタックを決める事ができたようだ。めでたしめでたし。

「つて、めでたしじゃねえ！つて、ぐええっ！」とブツチヨの上に覆い被さっているライ子の上に、丸美のボディーアタックが追加される。

そんな感じに二日目の朝は爽やかに始まったのである。

「つて、まだ6時半じゃねえか！もうちよい寝させて！」と言いながらブツチヨは再度寝ようと試みるのだが、ライ丸姉妹がおなじ部屋ではしゃいでいて寝れるはずもなくそのまま起きることになる。

「あれ？カツ子は？」とブツチヨは一人足りない事に気づく。

「（カツ子姉ちゃんトイレだよ）」とのこと。

「でもちよつと長いね、おつきい方かな？」とライ子が言っている。

ガチャツ！と部屋の扉が開いて、「ちよつとライ子ちゃんそういうこと言わないの！」「とあわててカツ子が入ってくる。部屋の外まで聞こえていたようだ。

「ん、おはようカツ子」とブツチヨが言う。

「おはようございますブツチヨさん」と普通に返してくる。

昨夜の一件があったので、ブツチヨは内心ビクビクしていたのだが、少し安心する。

その後一同はホテルの朝食を済ませ、身仕度を整えながら、テレビから流れる見たことのない番組やCMに興味をそそられるのであった。

外に出ると、今日も昨日に続いて快晴である。

ブツチヨは旅行などの行事に出かけた事などないので、自分が晴れ男なのか雨男なのかなどという話題とは無縁なのだが、そんなことはどうでも良いと言う程の快晴である。

「ねっずみっしーい、ねっずみっしーい」とライ子はアホのように同じ言葉を連呼して歩いている。

丸美はそのアホと手を繋ぎ、一人で楽しそうにスキップしている。よく転ばないものである。



「ネズミーシーも楽しみですねえ、知ってました？ネズミーランドではお酒売ってないですけど、ネズミーシーでは売ってるんですよ？」と出さなくてもいいお酒の話題を出すと。

「カツ子姉ちゃん、もうお酒飲んじゃダメだよ！連れて帰るの大変だったんだから！」とライ子。

「（布団に入れるのも大変だったんだから！）」と丸美も追い打ちをかける。

「あわわわ、別にお酒飲みたい訳じゃないですっ」「と慌てるカツ子。

そんないつもと変わらぬ一行はネズミーシーに入場したのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3451w/>

---

くらんくらうん

2011年10月26日09時14分発行